
Monster Hunter - 龍骨の狩猟王 -

九鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Monster Hunter - 龍骨の狩猟王 -

【Nコード】

N0193D

【作者名】

九鬼

【あらすじ】

それは、狩猟王者を決める最大の狩猟レース……。10年に一度だけ開かれるその祭典に、狩猟王者に憧れる若きハンター、リオウ・アレスターは史上最年少年齢で参加する。龍骨の名で呼ばれる過酷なレースを征し、狩猟王者となるのは誰なのか……。！？《モンスターハンターを知っている前提で書いている部分が多いのでご注意を！！文字サイズは“最小”を推奨いたします。》

D R A G O N A S H - 龍の遺骨 -

ハンター達の“夢”とは何だろうか？

ハンター達の中には、強敵と戦いたい、スリリングな体験がしたい、などと言う奴もいるだろうが、そんな少数派はこのさい無視しても構わない。

ならば、夢とは何だ？

英雄になること……？

もちろん、それも最大の目的、夢ではある……。

しかし、全てのハンターの憧れというのは今、もっと具体的なものに向いているのだ……。

現在、ほとんどのハンターは夢についてこう言っただろう……。

ハンティング チャンピオン

狩猟 王者

その称号はハンター達にとって最大の栄誉。

その栄誉を手にすることができるのは、10年に一回開かれるハンター達の祭典を勝ち抜いた者のみ……。

その祭典の名は……

D R A G O N A S H

『ドラゴンアッシュ』……、それは全行程を時間で見ておよそ1ヶ月にも及ぶ距離を、数々の課題や困難を切り抜けながら目的地目指して誰よりも速く突っ走る、という過酷なレースだ……。

もちろん、突っ走る、と言ってもそこはモンスター達の住む秘境……、己のハンターとしての経験と実力が試される。

もちろん命を落とす可能性も低くはない。

この祭典の起源は、古代の英雄が逃げる古龍を追ってどこまでも走り続けた、という伝説からだそうだ。

正直、よく分かってないが、気づけば10年に一度のばか騒ぎが起こる1ヶ月になっていた様だ。

そして今年……、また新たな狩獵王者を決定する、『ドラゴンア
ッシュ』が開かれる時が遂にやって来た……。

D R A G O N A S H - 龍の遺骨 - (後書き)

ついに新作を投稿いたしました。

前作品ほど早い更新は望めませんが、今度こそ完結させます!!

今回はレース……。

長きに渡る過酷なレースを征するのは誰なのか……!?

1話：龍骨に挑む者達（前書き）

どうも、作者の九鬼です。

前作品を完結させられなかったので、今回こそっ！！という気持ちで挑みます。

今回の作品はレースです。

秘境を巡る過酷な狩猟王者決定戦の行方は……！？

1話：龍骨に挑む者達

この俺、

リオウ・アレスター

は、遂に念願だった、『ドラゴンアッシュ』の出場資格を得た。

『ドラゴンアッシュ』に出場できるハンターというのは、その10年の間で何度か行なわれる選考テストに合格した者のみだ。

酒場の息子で、ハンター達の話聞いて育った俺は、当然のごとくハンターに憧れ、『ドラゴンアッシュ』の存在を知ってからは、狩猟王者に憧れた。

正直、ハンターとしての才能が俺にはあったと思う。

だからルーキーでも実力社会のハンター社会でそこそこ通用するし、選考テストも“過去最少年齢”でクリアできた。

「オツケー、準備は完璧。後は本番を迎えるだけ。」

俺は期待と不安で高ぶる感情をできるだけ抑えるため、もはや何度目か分からない準備物の点検を行っていた。

現在、俺はレースのスタート地点となるリンバウムの村のレース参加者に与えられた宿舎にいる。

ここは英雄が生まれた地で、祭典の原型となる伝説が始まりを迎えた地だ、だからここがスタート地点なのだろう。

（レース開始まで1日、もう少し他の参加者の情報が欲しいな……。）

レースの参加者はリンバウムに、レース開始3日前に入らなければならない。

数ある規定の一つだ。

すでにリンバウムに到着してから2日が過ぎている。

その規定のせいで他の参加者の情報が名前以外全く明かされていないのため、その2日間を俺は情報収集に費やした。

だが、日頃モンスターばかり相手にしているハンターが、突然的に探偵の真似事をしてライバルとなる人間の情報を仕入れるのは難しい。

（情報って言えば、定番は酒場だよな。）

俺はそう思い自らがそういう環境の中で育った経験から酒場へと向かった。

自分で集めなくても、自然にその手の話が集まるのが酒場という場所だ。

（そう言えば、ハワードさんが応援に来るって言ってたな……。あの人が酒好きだし、酒場にいるかも。そしたら何か情報を聞いているかもしれねえな。）

俺はそう思い、足早に宿舎から飛び出した。

念のため、背中には愛刀である『天下無双刀』、このレースを共に戦い抜く相棒だ。

「うわっ……、荒れてるな……。」

宿舎から出た俺の第一声がこれだった。

村のあちこちで酔っ払いどもが暴れている。

たぶん全員ハンターだろう。

俺が知っている、少年時代にあった『ドラゴンアッシュ』の時も

こんな感じだった。

つい昨日までは特に何事もなかったのだが、祭典の開始1日前になつてこの現状だ。

（でも、誰が参加者で、誰が野次馬か、っていうのがよく分かるようになった。）

俺は辺りを見回す。

開始1日前に酒を飲むような奴はいない。

参加者と思われる奴はどこか鋭い、決戦を直前に控えた者特有の空気を纏っている。

（酒を飲んで暴れている奴らはみんなバクチが目当てだな。）

『ドラゴンアッシュ』は参加資格を持たない者からすれば、憧れの的以外に、一世一代のバクチの場でもあるのだ。

賭けの対象となるのは誰が狩猟王者になるか、ということ。

—ギイイイッ……

俺は酒場の木製の扉を開けた。

その瞬間から響き渡る歓声と笑い声。

俺は無礼講を良いことに酔っ払うハンター達の巣窟にズンズンと入り込んで行った。

「おいつ、リオウ!!」

探していた人の声が俺を呼んだ。

「どうもです、ハワードさん。」

俺は軽く会釈をする。

グレイ「ハワード

俺が少年時代からよく知っているハンターで、俺がハンターになつてすぐによくお世話になった。

年齢的にはそろそろ引退されるだろうか？

まあ、その分だけ酒に慣れていられるのか、酒を飲まれてはいるが全然酔われてはいない。

「どうです？ 誰に人気が集まっているんですか？」

俺は当然“賭けている”であろうハワードさんに賭けの相場を聞いている。

人気の高い奴ほどマークしておく必要のある実力者ということだ。

「……そりゃあ、ルーベンスⅡアナキンの奴だろ。なんたって現狩猟王者だからな。」

ルーベンスⅡアナキンは前回の『ドラゴンアッシュ』を制覇した男、誰だって名前を知っているし、文句無しが一番人気になることは分かっていた。

別名：紅蓮のルーベンス

「他は……？」

「ロバートⅡグリーン、エドガーⅡハンス——、」

名だたる大陸の英雄の名前が挙がっていく……。

「あつ……、そういえば正体は知らねえが、聞いたことない名前です。で人気のある奴がいるぜ。」

「誰です？」

「……アレン＝ストラーダ」

「聞いたことありませんね……。ここ最近で何か活躍した奴ですかね？」

聞いたことのない名前に注目が集まっているということは、だいたいそんなところだろう。

「さあな……。それよりも、リオウ。」

「はい？」

ハワードさんは酒の入ったジョッキをテーブルの上に置きながら言った。

「お前がまさか『ドラゴンアッシュ』に出るなんて……。まだハンターになって4年だろ？」

「ええ、まあ。いちおう最年少での参加らしいです。」

「……大したもんだ。天才って奴は本当にいるんだな。まあ、そうでなかったら、たった4年で追い抜かれるわけはねえか……。」

ハワードさんはやっぱり少し酔っていたのか、妙に感情的になっている気がした。

「天才だなんて……。ハワードさんが年老いただけですよ。」

「言ってくれるな……。俺はまだまだ現役だぜ。」

そんな感じで俺まで感傷的な気分になっていた時だった。

―バタアンツ―！！

酒場の扉がずいぶんと暴力的な音をたてて開かれた。

「やっと見つけたわよ……。リオウ！！」

そこにいたのは金色の髪の女……。

「誰だ？」

ハワードさんが少々驚いた顔でこちらを見る。

「……リンス＝キャレット。史上最年少の参加者です。」

「……？ 最年少はお前じゃなかったのか？」

「タイ記録ですよ。」

そう、史上最年少の記録の樹立者は二人いたのだ、それも生年月日まで同じ……。

選考テストの時に何度か顔を合わせているし、会話も交わした。

「リオウ……、前も言ったけれど、史上最年少はこの私よ。私の方が数分遅く生まれたわ。」

「そんなのどうだっていいよ。どうせ、記録上はタイ記録だ。」

俺は投げやりに返答する。

この女、やたらと史上最年少というのにこだわるのだ。

「いい？ 私は『ドラゴンアッシュ』を征して、史上最年少にして初の女性狩猟王者になるの。そのためにはアナタが私より年上だって認める必要があるわけ。」

リンスは俺を指差し、さらに続けて言い放つ。

「だから早く認めなさい!!」

俺は溜め息を吐いて言う。

「リンス、お前わざわざそれを言うただけに俺を探していたの

か？」

「……。」

言われて、リンスは一旦は黙る。

だが、またすぐに口を開いた。

「そうね……、今回は見逃してあげるわ。」

「それはどうも。」

リンスは突き出した指を下ろして言う。

「本題はね……、私と組まないか？　ってことよ。」

「はいっ？」

俺は訳が分からなかった。

狩猟王者を決めるレースで“組む”ってなんだよ？

「リオウ、これはレースの駆け引きよ。一人で頑張ったところで途中リタイアに終わるのはアナタでも分かるでしょ？」

リンスは少々大げさなアクションを加えながら説明する。

「……俺は一人で何とかするつもりなんだけど。」

だが、俺は誰かと組むなんて考えは毛頭なかったりする。

組んだところで、最後は狩猟王者を賭けて争うことになるのだ。

それなら情が移らないよう一人で行った方がいい。

「アナタ、本気で言っているの？ そんなこと不可能に決まっているじゃない。」

「……逆に聞きたいが、何で“俺”なんだ？ お前は俺が邪魔じゃなかったのかよ？」

たしかに、そこが気になる。

さっきリンスが自分で言っていたように、史上最年少の狩猟王者になるには俺が邪魔なはずだ。

そんな奴と組む理由は何も考えつかない。

「……。」

するとリンスは何故か沈黙したままになる。

「おい、リンス？」

俺はおかしいと思い、彼女の名を呼んでみる。

「——っ たわよ……。」

「はあ？」

「分かったわよ……！！！」

何故かは分からないが、リンスは突然怒りだした。

「そんなに私と組むのが嫌なら頼まないわ！！　せっかく私が引き立て役に選んであげたのに！！！」

「ちよっ……、誰がいつそんなことを言っただんだよ！？」

リンスのキレっぷりに、俺は訳も分からずに慌てて言う。

「知らないっ！！！」

―バタアンツ―!!

リンスは再び酒場の扉を、今度は蹴破る様にして開け、そのまま出て行ってしまった……。

「訳が分からん……。」

俺は呆氣にとられたまま、リンスが出て行った木製の扉がついた出入口を見つめる。

「お前が悪いよ、あれは。」

一連の動きを見ていたハワードさんが言った。

「どうしてです？　俺、何か悪いこと言いましたっけ？」

「……鈍感。」

ハワードさんはそれだけ言うと、再び酒の入ったジョッキに手を伸ばした。

そして酒を一口飲むと再び口を開く。

「まあ、俺はお前に全財産を賭けたから……。頑張っ
て優勝してくれよ!!」

「ちょっ……!! 全財産ってハワードさん、アナタ絶対に酔っ
てやりましたね!？」

「さあな……。とにかく祝い酒だっ!! さあ飲めっ、たんまり
と飲め!!」

「ちょっ……!! 俺、明日レースですよ!? だから遠慮させ
て……って、マジで飲まそうとしないでください!!」

そんな感じで、俺はレース1日前の日を過ごした。

そして、翌日……。

運命の日を迎える……。

《続く》

1話：龍骨に挑む者達（後書き）

感想、意見、指摘をお待ちしております!!

2話：新しき伝説の幕開け（前書き）

今回はちょっと説明的な文章が多い気がします。

2話：新しき伝説の幕開け

朝、宿舎で目覚めると、雲一つない快晴だった。

『ドラゴンアッシュ』の開催当日にふさわしい天候だ。

「……そろそろ行くか。」

俺は、『リオソウル』と呼ばれる蒼き火竜の素材を使った鎧を着込むと、天下無双刀をその上から背負い、荷物を持って宿舎を出た。

スタート地点は村の外だ。

俺は村の中を歩きながら辺りの様子を伺う。

昨日までいた酔っ払いも、リンバウムの村人の姿もそこにはなかった。

おそらく全員が歴史的レースのスタートを見ようと村の外まで出ているのだろう。

代わりにいるのは、俺と同じ方向に向かってゾロゾロと群れをなして歩いて行く武装した集団だけだった。

おそらく全員同じ参加者同士だろう。

中には、現時点ですでに仲良さ気にレースのことを話している奴らまでいる。

（協力が……。思い返せばずっと一人でやってきたな……。）

昨日のリンスの言葉が思い出された。

（謝っておかないとな……。よく分からないけど何か悪いこと言っちゃったみたいだし。）

そう考える内に村の出口から見える草原に武装集団を見つけた。

先ほどの参加者の群れもそこに続いていく。

（こうやって見ると凄い数だな。あそこにいる全員が選り抜かれた腕利きのハンターばかりか……。）

そう考えると身体中に緊張感が張りつめる。

参加者の数は、たしか500人だったか……。

（でも関係ねえ、『ドラゴンアッシュ』を征するのは俺だー!!）

俺は自分に言い聞かせ、その集団の中に歩を進めた。

（殺気だってるな……、かなり居心地悪いぜ。）

当然の事だが、俺を含め、ここにいる奴らはみんな本気で狩獵王者を目指している。

しかし、そんな集団にざわつきが起こり始めた。

（何だ？）

俺もそれにつられて前の方を見てみる。

そこには特設のステージの様なものが作られており、そこに一人の男が護衛を伴って昇っていく。

男はステージの上まで昇りきると手で荒ぶる波を抑える様な仕草をして辺りのざわめきを落ち着かせた。

（運営者かな？）

俺はそう思い、その男の言動に注目する。

辺りの視線もそちらに向いている様だった。

「……選り抜かれしハンター諸君。おはよう、私は『ドラゴンアツシュ』の運営責任者である、ルイス＝フランクリンだ。」

やはり男の正体は運営者側の人間だった。

ルイスという男は落ち着きはらった態度で辺り一面を埋め尽くす参加者達を見渡すと続けて言った。

「私は空気が読める男でね……、くだらない挨拶はしないつもりだ。さっそく本題に入ろうじゃないか。」

フランクリンは殺気だった辺りの空気を感じ、断りを入れて話すべきことだけを選んで話し始めた。

「すでに知っているとは思うが、『ドラゴンアツシュ』の目的は単純明快……、課題をこなしながら誰よりも速く目的地にたどり着くことだ。」

フランクリンはそう言うと、別の男数人に、この場にいるハンター全員が見ることができる程に巨大な地図を持ってこさせた。

「『ドラゴンアツシュ』のコースは全部で3ステージに別れている。まず、ここにいる者には密林を抜け、そして砂漠の中心にあるオアシスの街を目指してもらうことになる——」

ルイスという男はその後も部分的なルールの説明をした。

それを分かりやすくまとめてみると……

コースは全部で3ステージ。

次のステージに進む条件はステージごとに異なる。

各ステージには課題がいくつか存在し、それをクリアしなければ
ならない。

他にも数点あるので、詳しいルールは進行に合わせて説明してい
こう……。

「以上で話は終りだ！！ 第1グループはスタート地点へ向かえ
！！」

フランクリンは一連の話を終えると移動を促す。

ここで言われたグループとは事前に抽選されたスタートのタイミ
ング、その各タイミングごとに別れた集団だ。

なにせ人数が人数だけに一緒にスタートすることが不可能なので、
しかるべき対応だと思う。

微妙にハンデがつくが、全行程から見たら些細なものだ。

「俺は第2グループか……。」

俺は促されるままに第2グループと思われる集団に同化する。

ここで第1グループが出発するのを待ち、それから数分後にスタートすることとなる。

「……周りは協力でレースに挑む奴らばかりだな……。」

俺はボソツと呟いた。

だが、思わず口に出てしまうのも無理はないだろう。

俺の様に一人で挑む奴の姿が見当たらないのだ……。

どのハンターも明らかにパーティーを組んでいる。

（……マジでリンスの言うことが正しかった。出会ったら謝つとこう……。たしか、第3グループだったな。）

俺よりも後ろの集団だが、おそらくすぐに追いついて来るだろう。

出会うかどうかはまた別の話だが……。

「俺も仲間を探さねえとマズイかな……。」

当初は一人でも余裕だと思っていたが、ここにきて急に不安になってきた。

「でも、みんなパーティー組んでるから……、パーティーに割って入るのは難しいし、困ったな。」

俺は本当にすでに協力関係にある奴しかいないのか、と、辺りを適当にさまよう。

すでにパーティーを組んだ奴らにはもう、予定や計画というものがある。

今さらそれを狂わされるのは良しとしないはずだ。

俺はもう無理だと諦め、けっきょくは当初の予定通り、一人で頑張ろうと考えだしていた。

「……アンタ、少しいいか？」

そんな時だった。

一人の男が俺に声をかけてきたのは……。

「何だ？」

普通なら敬語で返すが、その男の外見が若く、年齢的にも近そうだったのでつい普段の口調で返してしまう。

その男は、自身の得物であろうアンヴィルハンマーを背に持ち、砂漠の覇者『ディアブロス』の素材を使った、少々いかつい鎧を身に纏っていた。

すると、その男もまた、普通に話しかけてくる。

「見たところ、アンタも仲間を探してるクチかい？」

「……まあな。」

どうやらこの男も事情は同じな様だ。

「俺は、アレン＝ストラーダ。どうだい、俺と組まないか？」

男は自分を親指で指差し、協力を持ちかけてきた。

「アレン……ストラーダ？」

だが、そんなことよりも男の名前が気になった。

……たしか、ハワードさんの言っていた、突然現れた注目株とかいう奴の名前だ。

「俺はリオウ＝アレスターだ。」

とりあえず、名前くらいは明かしておく。

「リオウ＝アレスター、……最年少の参加者って奴か？」

どうやらアレンという男も逆にこちらを知っていた様だ。

「よく知っているな。俺もアンタの名前くらいは聞いてるよ、謎の注目株だって……。」

「注目株だなんてよしてくれよ……。俺はただ、リンバウムに向かう途中でモンスターを一匹追い払っただけさ。」

アレンは少し照れた様子で言った。

「モンスター？ 何を追い払ったんだ？」

やはりそこは気になる。

「ああ、ここに来る途中で道を塞いでいた砦蟹をな……。」

「はあ？ 砦蟹を……、一人でか!？」

つい言葉に力が入ってしまう。

アレンが追い払ったというモンスターが問題だからだ。

砦蟹・シェンガオレン

無駄な説明を省くと、山の様に巨大なヤドカリだ。

ただ、その身を宿す殻というのが、歩く災害とも呼ばれる巨龍、
ラオシャンロン老山龍の頭蓋だ。

そんなものに身を宿すそいつ自身も歩く災害と呼ばれている。

（そんな奴を一人で追い払っただと……?）

俺にはアレンの言うことが信じられないが、それなら注目を浴びるのも納得がいく。

「……まあ、追い払ったって言っても、そいつが谷間の道の真ん中で眠っていたところを攻撃したわけだから、不意打ちってことになるのかな？」

アレンは俺に、大げさに考え過ぎだ、と言いたい様だが、そのことを考えても十分な偉業だ。

普通なら眠っていたとはいえ、その眠りから起きたシエンガオレンに反撃されて終りだろう。

「とにかくだ、リオウ。俺と組まないか？ このレースを勝ち抜くには仲間がいるんだ。」

「……。」

俺は沈黙する。

この男を信頼するか、否か。

「じゃあさ、こうしよう。」

すると、アレンはリオウに一つ提案した。

「最初のエリア、密林は一緒に行動しよう！！　それで大丈夫だと思っただけいい。」

……まあ、それなら。

「……分かった、それでいいよ。」

俺はアレンの提案に妥協した。

「よしっ、決まり！！ まあ見てくれよ、俺が頼りになるってところをさっ！！」

アレンがどこか自信ありげに言い張る。

「さあて、そろそろ俺達、第2グループの出発の時間だぜ！！」

アレンはすでに俺が仲間になると決まったかの様に喜んでいる。

（仲間……か。）

俺は、まだ決まったわけではないが、仲間とともにレースを戦うということに不思議な感覚を抱いた。

「行くか……。」

俺はアレンとともにスタートと地点へと向かう。

ーワアアアアアーツー！！

その時だった、割れんばかりの歓声が木霊したのは……。

俺は驚き、伏せていた顔を上げ、辺りを見回す。

そこにはリインバウムの村人を始め、ハンター、その他の人々が歴史的レースのスタートの瞬間を見るために集まっていた。

すでに第1グループが出発したはずだが、その歓声は止むことなく、むしろ大きさを増していく。

（レースが……始まる！！）

俺はあらためて実感した、これが狩猟王者を決める最大のレース、『ドラゴンアッシュ』であるということ……。

「スタートはかつ飛ばすだろ？ 観衆にカッコいいところを見て欲しいからな。」

アレンが耳元で呟くように確認してくる。

「まあな……、ちゃんとして来いよな。」

俺はアレンを挑発するように言う。

俺は足と体力には自信がある。

「見てろよ……。」

アレンはその挑発にのってやると言わんばかりに、その場で軽快に跳び跳ねた。

——ワアアアアアアッ!!

歓声はさらに激しさを増す。

ドクンドクンツと心臓が歓声に呼応するかの様に激しく脈打つのが分かる……。

そして、スタートとの合図が今……、告げられた……。

(……!!)

緊張が極限を越え、一瞬頭が真っ白になる。

が、俺の自慢の脚は、俺自身の意識を置き去りにして反応し、その第一歩を踏み出した……。

地面を蹴った反動に、俺の意識は一瞬にして覚醒する。

今この瞬間に、リオウ＝アレスターの『ドラゴンアッシュ』が開幕を迎えた……。

《続く》

3話・龍骨の森（前書き）

感想、意見、アドバイスなど待っています!!

3話：龍骨の森

俺は空気を揺るがすほどの歓声が巻き起こる中、生涯最大の出来事の一つになるであろう戦いのスタートを切った。

リンバウムの村の周囲は草原地帯が広がっており、そこを突っ切って遠く、僅かに見える密林の入口へと向かう。

この草原地帯では参加者同士が密林に侵入する際の位置争いを巻き起こすこととなる。

なぜなら密林と一概に言っても、海岸沿いを行く道、木々の生い茂る森のど真ん中を行く道、なだらかな丘陵地帯を行く道と、いくつかのルートが存在するからだ。

「どこのルートに行く気だい？」

俺の後ろを、当初の宣言通りにピッタリとついてくるアレンが判断を俺に委ねてきた。

あの重装備でこのスピードについてこれるとは、この男、やはり侮り難い……。
あなど

「…………課題を考えるなら、海岸沿いのルートか、丘陵地帯を行くべきだな。」

俺はスピードを緩めることなく返答する。

俺達第2グループに与えられた課題……。

グループごとに課題が別れるのは最初の密林だけなのだが、このグループの密林での課題は、2種類のモンスターのどちらかを討伐することだ。

水竜、ガノトトス、もしくは雄火竜、リオ・レウス。

ガノトトスは海岸沿いに生息しているし、リオ・レウスは丘陵地帯に生息している。

よって、課題のモンスターがいるルートに参加者達は向かうというわけだ。

中にはあえて密林のど真ん中をいく奴もいるようだが、俺としても課題を速く済ませたい。

「……海岸沿いを行こう。」

俺はアレンに意思表示すると、進路を左にとった。

空を自由自在に飛び回るリオ・レウスを仕留めるのは骨だ。

追い詰めたところで空に逃げられる場合もある。

それなら一度陸地におびき寄せれば逃げられる心配も少ないガノトトスの方が良いという判断だ。

俺は草原地帯を密林に沿うように走った。

（位置取りはこれくらいでいいか……。）

俺は自分のポジションを確保できたと判断し、スピードを落とす。歩き出す。

他のハンターもだいたい自分の侵入地点を確保したのかすでに歩き出している。

「ガノトトスか……。俺は正直苦手だな。」

俺がゆっくりと歩きながら息を整えていると、いつの間にか少し遅れていたアレンが追いついて来た。

「俺、速いだろう？」

「参りましたよ……。」

アレンは大きなアクションを付け加えて軽々しく言う。

まあ、普通に考えるとあの重装備でここまでついて来れたアレンは十分に凄いと思う。

「ところでよ……、ちょっと相談があるんだが。」

「何だ？」

「……ガノトトスと戦う前に他のモンスターと一戦交えないか？」

アレンは辺りを見回し、何かを探しながら提案を言ってくる。

「そうだな……。」

俺は少し思わせぶりにその提案に賛同した。

一刻も速く先へと進むべき状況下で、アレンが提案し、そして俺がそれを受け入れたのには訳がある。

それも、この『ドラゴンアッシュ』の特別ルールの一つだ。

『素材交換ルール』

『ドラゴンアッシュ』には食糧、キャンプ用品などの物資以外の持ち込みは禁止されている。

しかし、長い道の中では回復薬や、その他補助アイテムがなければやっていけない。

その手のアイテムを手に入れる手段は現地で原材料を集めて調合する、各チェックポイントでの補給……、そして後一つ。

各箇所に設置されたトレードポイントでモンスターの素材と交換する……。

『ドラゴンアッシュ』の中では役に立つことが少ないモンスターの素材を、有用なアイテムと交換してもらえる場所があるのだ。

逆を言えば、『ドラゴンアッシュ』を攻略する上で、時には意図的にモンスターと交戦し、その交換ルールの活用が必要不可欠となるわけだ。

「アイテムの獲得は課題をこなすのと同じくらい重要だから……」

俺はそういう訳もあり、アレンと同じく辺りを見回す。

「密林の中に入った方が良いんじゃないか？」

アレンは草原の上にモンスターの姿がないのを見て言った。

「そうした方が良さそうだな。」

俺も同じ考えに至ったので、アレンの言うことに異論はない。

「俺としては早く活躍ぶりをアピールしたいんだよ。」

アレンはそう言うのと密林の中にズンズンと入って行く。

「何だよ、それが目的だったのかよ？」

俺はたしかにそんな話をしていたが、正直全然こだわっていないかった。未だにそんな事を言うアレンに少々呆れながらも続いて密林に入って行く。

（目立ちたがる性格か……。）

俺はアレンについてそんな印象を受けた。

「おっ、獲物見つけ!!」

アレンが探していたモンスターを見つけた様だ。

「ダイミヨウザザミか……。海岸が近いからな。」

俺もアレンの発見したモンスターを確認する。

ダイミヨウザザミは水のある場所を好んで生息する甲殻種だ。

砂漠のオアシス近辺に生息しているイメージがあるが、海岸が近いここにいるのも納得がいく。

「正直、あんなモンスターに苦戦している様じゃあ先が思いやられるぜ……。」

アレンは余裕だと言わんばかりに言い張る。

その手はすでに背中のアンヴィルハンマーに伸びていた。

「速攻で片付けるか……。」

俺も天下無双刀を構え、ダイミヨウザザミを見据えた。

ダイミヨウザザミは俺達に狙われているとも知らず、暢気^{のんき}に日向ぼっこを楽しんでいたりする。

「俺がアイツのヤドを叩き潰してやるよ。」

アンヴィルハンマーを構えたアレンが言った。

ダイミヨウザザミが身を宿すのは巨大な頭蓋、砂漠に生息する一角竜・モノブロスの物だ。

まあ、アレンの扱う強大な威力を秘めたハンマーなら破壊も可能だろう。

「じゃあ、俺は側面に回り込みながら戦うよ。」

ここはアレンの実力を見届けてやろうと思った。

ちなみにダイミヨウザザミに正面から挑むのは、攻撃を物ともせず弾き返す大盾を兼ね備えるランス使いぐらいだろう。

「じゃあ、行くぞっ!!」

俺は合図を出すとともに駆け出した。

「油断すんなよ!!」

「アンタもな!!」

俺はダイミヨウザザミの右側面から脚を狙って飛び込む。

「はあああつ!!」

そして、気合いを込めて無双刀を一閃する。

―ズバアアアンツ!!

と、研ぎ澄まされ、抜群の切れ味を誇る天下無双刀はダイミヨウザザミの数本ある脚の内の一本を、わずか一太刀で切り落とす。

「やるねえ、さすが!!」

軽口を叩きながらもアレンがそれに続く。

アレンはアンヴィルハンマーを振りかぶった状態でダイミヨウザザミの背後、その身を収めるヤドを狙うのには絶好の位置をとる。

「うおらああーっ!!」

アレンの咆哮とともにアンヴィルハンマーが容赦なく振り降ろされた。

―グウオオオオンッ！！

超重量の金属の塊が空気を揺るがしながら狙った獲物に襲いかかる。

―バキヤアアアッ！！

骨が砕けた様な破碎音が強烈に鳴り響く……。

現にダイミヨウザザミのヤド、モノブロスの頭蓋の右半分が今の一発で粉碎された。

それどころか、ダイミヨウザザミの巨体が衝撃に押されてぶっ飛び……。

「凄い馬鹿力だな……。」

俺はアンヴィルハンマーの威力を差し引いても余りある破壊力、それを可能にしたアレンの力に下を巻く。

分厚い鎧を着ているため分かりにくいだが、アレンはけっこう細身だ。

どこにそんな力が隠されているというのだろうか……？

「どうだい？ お前が脚に自信があるなら、俺は力だ！！」

アレンはアンヴィルハンマーを構え直しながら自慢を口にする。

「参りましたよ……。」

俺は先ほどのアレンと同じ様に、大げさなアクションを加えながら軽々しく言う。

吹っ飛ばされたダイミョウザザミは崩れた態勢を立て直すと、今度はむこうから鋏を振り上げ、ノソノソと巨体を揺らしながら迫って来る。

襲撃者に対して怒り心頭なのか、ダイミョウザザミは口から泡を吹き出している。

この行動はダイミョウザザミの生態上、興奮や怒りを示すものらしい。

「悪いけど、このまま押しきらせてもらっ……！！」

俺はそんなことは一切気にせず、天下無双刀を構えたままダイミョウザザミに突っ込む。

“キレた” モンスターというのは一時的だが、速さ、攻撃力、タフさが増大する。

人間が興奮状態にある時と同じだ。

しかし、ダイミョウザザミごときにその程度の変化が生じたぐらいでは問題にもならない。

「覚悟しやがれ!!」

俺は天下無双刀を握る手にグツと力を込める。

ーブウウウンッ!!

先に動いたのはダイミョウザザミの鉄……。

ダイミョウザザミは盾蟹と呼ばれているのだが、その盾と称される理由はその鉄にある。

たしかに鉄というよりも、その使い方は盾の用途に近い。

相手の攻撃を頑丈なそれで受け止め、攻勢に出る場合はそれを本来の用途である切断に使用するのではなく、それで殴りつけるといった感じだ。

「よっ……とー!!」

ダイミヨウザザミは例のごとく鋏を振るうが、俺は身を屈めてそれを避ける。

ダイミヨウザザミはさらに、振るった腕とは逆の腕でも攻撃を仕掛けてくるが、フェイントも何もないその動きはあまりにも単調、戦いの慣れたハンターに通用するものではない。

「いいのか？　なら、そいつをもらっぜ……。」

―ズシャアアアッ!!

ダイミヨウザザミの片腕、鋏が鮮血を吹き出しながら宙を舞い、地面に落ちた。

「うわっ、鬼!？」

アレンは刹那のできごとに目を見開いて驚くが、そういう自分もすでに残った左半分のヤドを狙って片腕を失ってもがくダイミヨウザザミの背後に移動している。

「くらいやがれっ!!」

アレンはアンヴィルハンマーを振り上げ、大きく溜めをつくる。

が……、

「……ぬお……っ!？」

危険を感じたダイミョウザザミは、背後に回り込んだアレンにめがけて後ろを向いたまま体当たりをかました。

——ズウウンッ!!

右半分が欠けた一角竜の頭蓋がアレンを突き飛ばす……

ハズだった……。

起こりえる事態とは逆に、勢いよくアレンをぶっ飛ばそうとしたダイミョウザザミの巨体が、その勢いを失い、ピクリとも動かず静止していた。

「驚かせやがって……!!」

アレンだ、アレンがなんと、その手に持つハンマーの柄でダイミヨウザザミの巨体を押し止めている。

「モンスターの突進を力で押さえ込むだと……、なんて奴だ……。」

俺はアレンの想像を超える力に、驚きを通り越して呆れ果てた。

「……コイツはお返しだっ……！」

アレンは強引にダイミヨウザザミを押し返すと、その背中にめがけてアンヴィルハンマーを豪快に振り降ろした。

「バキイイッ……！」

完璧に振り抜かれたハンマーが快音を響かせ、一角竜の頭蓋を完全に打ち砕いた。

「ああ、このハンマーでしか味わえない感触……、快感だ……。」

アレンはヤドを失い倒れたダイミヨウザザミの姿を見るまでもなく、インパクトの瞬間に手に響いた反動に酔いしれる。

「お前、けっこう危ない奴だったんだな……。」

俺はそう言いながら、ヤドを破壊されてバランスを崩して転倒しているダイミョウザミへと近づき――

――ズバァアアアッ!!

容赦なく止めとなる一撃を加えた……。

《続く》

4話：喧騒に満ちし海岸（前書き）

今のところは前作よりも良い展開でこれてるんじゃないか、と勝手に思ってます。

ただ若干展開の速度が遅いのが気になる……。

いや、これくらいが普通なのか？

まあ、今回は『ドラゴンアッシュ』ならではの駆け引きがあったりしますのでお楽しみ下さい！！

では……！！

4 話：喧騒に満ちし海岸

「解体、解体……っと。」

アレンがダイミヨウザザミの各部位を引き剥がし始める。

「どうだい？ 俺、けっこう頼りになると思っただろ？」

アレンは一旦その手を止めて聞いてくる。

「ああ、これから一時的だが世話になるよ。」

俺もダイミヨウザザミを解体しながら肯定の返事を返した。

「何だよ、それ……。凄かった、とかくらいは言えよ。」

「じゃあ、言ってやる。……凄かった。」

「だろ？ やっぱそう思うよな！-！」

「ああ、そう思うよ。」

ひたすらに自画自賛を繰り返すアレンを放っておいて、俺は解体作業を続けた。

「ダイミヨウザミだから……、貰える物も大したことないだろうな。」

ようやく解体作業を再開したアレンが甲殻部分を剥ぎ取りながら言う。

「逆に基本的な物が貰えて良いんじゃないか？」

俺はむしろ必需品を貰える方が嬉しいと思う。

「まあ、そう言われみれば確かにそう思えないこともないけど……。なんて言うか夢がないんだよ、夢が。」

「こんなのに夢を求めてどうする気だよ……。」

「こういう時には何か凄い物を期待してしまう、という気持ちも分からなくもないが……。」

「あつ、でもコイツなら何か良いものを貰えるかも!」

「バキイイツ!!」

するとアレンが何か大きな物をダイミョウザザミの亡骸から強引に引き剥がす。

いや、バキイッという音からすると、何かを折ったようだ。

「コイツならいけるだろ?」

「ああ……、それなら期待できるかも。」

俺もこれならそれなりの物を貰えると思う。

それは真紅の角……。

先ほどダイミョウザザミが身を宿していた頭蓋から飛び出していた、一角竜・モノブロスの角だ。

「よおっし、早く持って行こうぜえ!!」

アレンはその自慢の馬鹿力で一纏めにしたダイミョウザザミの素材とモノブロスの角を持ち上げる。

「トレードポイントは……、ちょっと待ってくれ……。」

俺はスタートの前からあらかじめ支給されている密林の地図を広げ、現在地とトレードポイントの位置を調べる。

「ちょうど海岸に行く途中に一ヶ所あるな。」

「じゃあ、そこ目指して急いで出発だ。これがレースだってことを忘れるなよ。」

「忘れてねえよ。」

俺は荷物のお半を一人で持ち上げ、そのまま速い足どりで歩き出したアレンの背後に続いた。

「じゃあ、回復薬2つとの交換だな。」

「ええ、たったコレだけかよ!？」

トレードポイントに到着したところで、ここのトレードポイントの担当者と思われる男と、一人のハンターが取り引きをしていた。

「ドスランパスごときの素材を持って来たくらいで文句を言えると思うな。」

「……ケツ、分かったよ。」

ハンターはしぶしぶ回復薬を2つだけ手に入れてトレードポイントを後にする。

俺達は交渉に失敗して機嫌の悪そうなそのハンターとすれ違う。

「お前達も交換か？ 言っておくが、あの担当者は相当ケチだぞ。せいぜい頑張って交渉するんだな……。」

ハンターはすれ違い際に俺達を見てそれだけ言っと、重い足どりで生い茂る木々の中に消えて行った。

「……だつてさ。」

アレンが俺を見て言う。

「たぶん大丈夫だろ。」

俺はいい加減な返事をして、トレードポイントに近づく。

トレードポイントは倉庫の役割を持ったガツシリとした造りの建物だった。

その外壁から飛び出す様に造られた窓口があり、そこに先ほどの担当者の姿もある。

「すみません、交換お願いします!!」

俺は窓口の前まで行って交換を申し出る。

「何の素材を持って来たんだ……?」

担当者の男は無愛想に言う。

たしかに先ほどのハンターが言った通り、いかにもケチそうな感じがする。

「俺らが持って来たのはこの素材です。」

アレンはそう言って、持っていた素材を窓口の前に並べた。

「ダイミヨウザザミか、まあ出だしにしてはまあまあだな。」

担当者は無表情のままじつくりと積み上げられたダイミヨウザザミの素材を品定めする。

「回復薬を4つほどだな。」

「それだけ？」

その結果は首をかしげるものだった。

アレンも横で不満そうな顔をしている。

それを見た担当者は溜め息を一つ吐いて再び口を開く。

「素材の破損が酷い。力任せにダメージを与え過ぎだな。」

「あつ……。」

俺はけっこう思い当たるフシがあったのでそれ以上言及することはできなかった。

「そりゃあ仕方ねえよな。獲物をキレイに倒せ、なんて言われたことねえし……。」

アレンはそれは無理な話だ、と言わんばかりに首を振る。

そして、さらに続けて口を開いた。

「だがよ……、これならどうだい？ 形もけっこう良いぜ。」

そうやってアレンが取り引きに持ち出したのは、やはり例の真紅の角。

「ほう、モノブロスの角か……。なるほど、ダイミョウザザミが身を宿していたのを壊して持って来たのか。」

さすがに無表情を貫き通していた担当者も、少々驚きを表情に出す。

「……いいだろう。お前達は第2グループだな？」

「ええ、そうですけど。」

担当者は俺達が第2グループであることを確認すると、背後に並んだ棚から何かを持ち出してくる。

「こちらのルートに来るということは、選んだ課題はガノトトスだな？ それなら、こいつをくれてやる。」

そう言って、担当者はそれらを細長い台の上に転がす。

「音爆弾か……。」

俺はそれらの内の一つを手に取り、それが何であることを確認する。

渡されたのは強烈な音を発する手投げ爆弾だ。

全部で8個ある。

「音爆弾を8個ねえ……。まあまあじゃねえの？」

アレンがそれを見て言う。

先ほどの様な不満は無さそうだった。

「ああ、十分だ。これだけ貰えれば、他のハンターとの物々交換にも使える。」

俺はそう言っただけ渡された音爆弾を全て受け取った。

「お前そんなことまで考えていたんだな……。」

アレンは俺の考えている別のアイテム入手ルートを聞いて、素直に驚嘆の声を漏らす。

「考えてみるよ……。ガノトトスを地上におびき寄せるのは普通には難しい。しかも、『ドラゴンアッシュ』にそういった事態に対応できるタイプのアイテムは持ち込めないから、ここで俺達が音爆弾を手に入れたことの意味は非常にデカイ……。」

「だから他のアイテムとの交換に使おうってか？」

「ああ、可能な限り相手に良いものを出させてな……。」

俺はニヤリと笑って言う。

「うひょっ、悪人だねえ!!」

そう言うアレンも軽く笑っていたりする。

「さあ、そうと決まれば海岸に急ぐぞ。需要があるのはガノトトスがいる間だけだからな。」

そういつた訳で、俺達は急ぎ足にトレードポイントを後にした。

「おっ、やってるねえ!!」

海岸に着くと、アレンが言うように、そこは戦いの最中だった。

しかし、現在海岸沿いには事前におびき寄せられていたのか、数匹のガノトトスがいるわけだが、陸地には一匹も確認できない。

それら全ては、沖合から陸地にいるハンター達に向かって高水圧のプレスを吐き出しているだけだ。

当然、ハンター達は手も足も出ないといった状況にある。

すでに倒されたガノトトスもいるようだが、その亡骸を見る限り、

それを倒すことができたのは弓やボウガンといった飛び道具を用いるガンナーが属するパーティーだけのようだ。

つまり、接近武器の使用者だけで構成されたパーティーはここで足止めをくらっているというわけだ。

「そうでなければコイツが売り捌けない……。」「

俺は笑みを浮かべながら8個の音爆弾を取り出す。

「その役目、俺にやらせてくれよ!!」「

そこで何を思ったのか、突然アレンが名乗りを上げた。

「別に良いけど……、条件を吊り上げられるだけ吊り上げてからにしろよな。」「

「分かってますって!!」「

そう言ってアレンは8個の内の5個を手にする。

そして――

「ガノトトスにお困りのハンター諸君!! 吉報だ!!」「

海岸にアレンの声が響いた。

「ここに超便利な音爆弾がある！！　今なら物々交換に応じても良いぜ！！」

それを聞いたハンター達は互いに顔を見合わせ、そして――

「俺のアイテムと交換してくれ！！」

「いや、俺と頼む！！」

「駄目よ、私がやるわ！！」

「おまえら邪魔だ！！」

「何よ、レディファーストって言葉も知らないの！？」

戦闘中にも関わらず、ハンター達がアレンの下に大挙して押し寄せた……。

「ハイハイ、押さないで。順番にね……。」

アレンは予定通りそれを捌き始める。

「じゃあ、俺はとつと課題を終わらせちゃいますかね……。」

そんな喧騒を背景に、俺は天下無双刀と残りの音爆弾を手にし、ガノトトスのいる海へと歩みを進めた……。

《続く》

4話：喧騒に満ちし海岸（後書き）

どうでしょう？

『ドラゴンアッシュ』ならではの取り引きは……。

リオウやアレンはけっこうな悪人に思えます（笑）

感想とか待ってます！！

5話：水面に潜む試練

澄んだ青色をした水面に揺れる巨大な背ビレ……。

それは全てのモンスターの中でも比較的大きなサイズを誇るモンスターである、水竜・ガノトトスのものだ。

「よし、アイツがいいかな……。」

俺は沖合を泳ぐ数匹のガノトトスから一匹を選別する。

そのガノトトスは一匹だけ群れから外れたところにおり、これなら他のガノトトスを交えての乱戦になる恐れもない。

俺はそのガノトトスが群れに合流する動きを見せる前に素早く近づく。

ーバシャアアン！！

すると、そのガノトトスも近づいてくる外敵に気がつき、迎え撃たんと上半身を水面から出して迎撃態勢をとる。

そして、体内に貯めた水を凄まじい勢いで口から吐き出した。

それはさしずめ『極限まで圧縮した水鉄砲』といったところだろ

うか……。

高速かつ、あらゆるものを穿つであろう水の弾丸は正確に俺を狙ってくる。

が、しかし。

水面にいるガノトスの攻撃手段はそれのみ……、つまりはその攻撃がくることは分かっていたことだ。

俺は軽く身を捻っただけでその弾丸を避けた。

目標を外れた弾丸はすぐ後ろまで迫って来ている密林の木々のうち、一番太い大樹を捉える。

―バキバキバキッ！！

と、凄まじい音をたてながら、大樹は弾丸が直撃した根本から折れ、辺りの木々の枝葉を巻き込みながら乾いた砂浜に倒れた。

砂浜には砂塵が巻き上がり、その大樹の木片が飛び散る。

その大樹が我が身かなと思うと恐ろしいが、そんなことにいちいち怯えてはいられない。

「さあ、地上に上がってきやがれ!!」

俺はガノトトスのいる沖合に向かって音爆弾を遠投した。

——キイイイイインツ!!

音爆弾はちょうどガノトトスの直上まで達したところで破裂し、それと同時に金属音にも似た、鼓膜を破るような高く大きな音が響き渡る。

——バシヤアアアンツ!!

水面が爆ぜ、波と水しぶきがここまで飛んでくる。

大きな音を苦手とするガノトトスが音爆弾によって暴れ狂ったのだ。

暴れ狂ったガノトトスは陸地に向かって水面を跳ねる様に泳ぎ、そのまま砂浜に座礁した。

そして、クネクネとヘビの様に体を擦らせながら砂浜の上を滑る様にして進み、その中ほどのところで止まる。

「陸地へようこそ!! さっそくだが覚悟しやがれ!!」

それを見た俺は天下無双刀を抜き放ち、砂地という足場の悪さを気にもとめずに駆け抜けた。

水陸両様の活動が可能なガノトトスは水掻きの付いた足で立ち上がり、その退化した目で迫り来るリオウを視界に収める。

「はあああつ!!」

俺はこちらを振り返ったガノトトスの顔を狙い、天下無双刀を上段から振り降ろす。

が……、

「消えた……!?!」

俺は目を疑う。

実際に消えたわけではないが、狙いを定めていたガノトトスの顔が急激に動き、その一瞬だけ俺の視界から逃れたのだ。

その代わりに俺の視界に写ったのはガノトトスの巨大な尾ビレ……。

ガノトトスは体を回転させ、俺の攻撃をかわすと同時にその巨体

に見合つた尻尾で俺を攻撃してきたのだ。

「ぐはあっ……！！」

それに気がついた時には俺の体は宙を舞っており、次の瞬間には砂浜の上に受け身もとれずに叩きつけられた。

「……ッ！！ 油断した！！」

俺は物理法則に従い砂浜の上を少し転がった後で立ち上がり、再びガノトトスの方に向き直る。

（次はないと思いやがれ……！！）

俺はノソノソと砂浜を歩いているガノトトスを睨む。

「……そんな怖い顔しなさんなって！！」

すると、視界にアレンの顔が割って入ってきた。

「何だ？」

「音爆弾、とりあえず3個は捌いたぜ！！」

アレンは残り2個の音爆弾を手で遊ぶ。

その証拠に、向こうの方であの音爆弾の音が3回響いた。

他のハンターも再び課題に取りかかった様だ。

「あと2個も頑張ってくれ。どうやら少し急いだ方がいいみたいだしな。」

「りょーかい。」

俺はアレンの返事を聞く前に再びガノトスに向かって駆け出していた。

（今度はさっきみたいにいくと思うなよ……！！）

俺はガノトスの眼前まで迫る。

ガノトスはリオウの突進に対し再び蹴散らさんと、巨大な尻尾を振るう。

「同じ攻撃を簡単にくらってたまるか！！」

俺は身を屈め、唸りを上げながら振るわれる尻尾の下を潜ってか

わす。

「うらあぁっ！！」

そして、そのままガノトトスの腹の下に潜り込み、その腹部に向かって天下無双刀の切っ先を突き出した。

ザクツという音をたて、天下無双刀は柔らかい腹部にアッサリと突き刺さり、鮮血がその刀身に滴る^{したた}。

ガノトトスはダメージに身を震わせるが、この程度で倒れるモンスターではない。

それどころか、水掻きの付いた巨大な足を持ち上げ、自らの体の下に逃げ込んだ敵を踏み潰さんとする。

「うおっ！？」

俺は寸でのところでそれをかわし、ガノトトスの一撃は砂浜を捉えるだけに終わった。

だが、ガノトトスはすぐにもう一方の足で俺を踏み潰そうとする。

「チィ……ッ！！ おとなしくしゃがれ！！」

俺は叫ぶと同時にガノトトスの腹に突き刺した天下無双刀をその

まま振り抜いた。

ガノトトスは切り裂かれた腹部から血をぶちまけ、後ろに大きくのけぞる。

「ざまあみる！！」

天下無双刀を振り抜くと同時に腹の下から抜け出た俺は、致命的なダメージを受けてふらつくガノトトスに追い討ちを仕掛けるべく再び天下無双刀を構えて突っ込む。

ガノトトスはこれには堪^{たま}らずと、大量の血を流しながらも海の方に向かって逃走を開始する。

「この俺が簡単に獲物を逃がすと思ったか！？」

それを見た俺は2個目の音爆弾を取り出し、逃げるガノトトスめかけてそれを投じた。

——キイイイインッ！！

と砂浜に鳴り響くあの音、これにはやはりガノトトスも身を硬直させ、足を止める。

「はあああああつ!!」

俺はガノトトスの脇をトップスピードで駆け抜けけると同時に天下無双刀の磨き抜かれた刃をガノトトスの体に滑らせた……。

時が止まったかの様に静止するガノトトス。

「終わりだ……。」

俺は静かに告げる。

すると、そのガノトトスの混じりけのない青い体に静かに赤い線が入っていく……。

―ズウウウンツ……

赤い線がガノトトスの体を渡り終えたと同時に、ガノトトスの体は真っ二つになって倒れ、白い砂浜をその血で真っ赤に染めた。

「リオウ、こっちも終わったぜっ!!」

戦いの終わりを見届け、天下無双刀を鞘に納めたところで、アレ

ンがいくつかのアイテムを抱えて駆け寄ってきた。

「どうだった？」

俺はアレンの持って来たアイテムをしてみる。

回復薬にペイントボール、解毒薬、投げナイフ……ここまでは普通だな。

閃光玉にシビレ罠……このあたりはかなり役に立ちそうだな。

あとは食糧やロープなどの物資だ。

「まあまあだな。」

「まあまあって、俺けっこう頑張ったんだけどなあ。」

「でもこれだけ手に入れば当分は大丈夫そうだな。」

俺は手に入れたアイテムを整理しながら言った。

まあまあとアレンには言ったが実際、かなりの儲けだと思う。

「さてと……、他のハンターはまだ戦ってるみたいだな。」

俺はここから少し離れたところで交戦するハンター達を見る。

「今のうちに追い抜いちゃいますか！！」

これがレースであることを忘れてはいけない。

差はつけられる時につけておくに限る。

「リオウ、次はどこに行けばいいんだ？」

アレンが荷物から地図を取り出して言う。

「次か？ 次はここを抜けて一気に砂漠に向かう。」

俺が指さしたのは密林と砂漠の境界に広がる森林エリア。

『盲目の森』

いわゆる迷いの森だ。

普段は危険だということで立ち入りが禁止されている。

古龍が住むとさえ言われる深き森は『ドラゴンアッシュ』が開かれる時のみ立ち入りが許されるのだ。

「迷いの森ねえ。まあ、なんとかなるだろ。」

アレンは臆することなく、かなり楽観的に言う。

「気楽過ぎだろ……。遭難したらそこで終わりなんだぞ。」

俺は気を引き締める意味も込めて警告する。

俺の勘ではこの『盲目の森』はかなりの試練になると思う。

参加者が脱落するとすれば、それはここになるだろう。

俺達は次なる目的地、『盲目の森』へ向けて歩き出した……。

《続く》

6話：女王の巢

海岸沿いのエリアから密林の奥深くにわけ入り、それからまる1日、太陽の光が地上に届かないほどに生い茂った木々の中を歩き続けたところでようやく『盲目の森』の入口までたどり着いた。

そこにはその区域を隔離するための壁が作られており、普段は閉まっているであろう鋼鉄の門が今は開いていた。

「おい、誰がいるぜ。」

アレンが門の前にたたずむ男を指差して言う。

「ここの門番ってどこだろ。」

「門番？ 何のために？」

「たぶんコレだろ……。」

俺は1日前に仕留めたガノトトスの素材を取り出す。

「ああ、課題のチェックね……。」

アレンもそれで納得がいったのか、頷きながら言う。

「でもそれだけじゃないみたいだな……。」

俺は門のすぐそば、壁に面したところにある建物を見つけて言った。

「あの建物……、トレードポイントか？」

アレンはその建物が以前見たトレードポイントと同じ造りであることに気がついた。

「たぶんな……。おそらく、この位置にある以上ただのトレードポイントじゃないな。」

俺はそう言って、そのトレードポイントの前まで行ってみる。

「すみません、ここトレードポイントですよね？」

俺は前回のトレードポイントにいた男と同じ服装の担当者、今度は初老の男に問いかけた。

「ああ、そうさ。ただ特別なアイテムを二つほど置いているがね……。」

初老の男はフツと笑うと何か意味ありげな事を言う。

「特別なアイテム……?」

俺はすかさず聞き返す。

「一つはその門の通行証だ。これをあそこの門番に見せれば『盲目の森』に入れてもらえる。ただし課題のモンスターの素材と交換だがね……。」

初老の男は通行証らしき物を台の上に置く。

「なら、これでそいつは貰えるんだな。」

俺はガノトトスの素材をその男に手渡す。

「たしかに……。ほら、通行証だ。」

初老の男は俺が課題のモンスターの素材を持っていると分かっていたのか、表情一つ変えずに素材を受け取り、代わりに通行証を渡してきた。

「どうも。で、もう一つの特別なアイテムっていうのは何なんだ?」

俺は通行証を受け取り、そして残り一つの特別なアイテムとやら

について尋ねる。

「フッフッフ……、それはここ、『盲目の森』の地図さ……。」

「地図だと……!？」『盲目の森』に地図があるのか!？」

俺は怪しげに笑うその初老の男に詰め寄る。

「その通り、地図があるのさ。長年かけてようやく完成した物がね……。」

「何と交換だ？」

俺は能書き無用と、話の本題を問いかけた。

「……逆鱗だ。女王、リオレイアの逆鱗と交換だ。」

初老の男は怪しい笑いを止め、真剣な顔つきで言う。

「リオレイアか……。それも逆鱗だと……。」

俺は条件の厳しさに考え込む。

「どう思う、アレン?」

俺はすぐ後ろで話の流れを静観していたアレンに聞いてみる。

「さあ、逆鱗だろ？ リオレイアと殺り合うのはともかく、逆鱗は出るかどうか分からねえだろ。」

アレンも判断に困るといった感じた。

この判断は難しい。

逆鱗は飛龍の鱗の中に混じって極マレに存在するレア素材だ。

入手できる確率は世辞にも高いとは言えない。

それと『盲目の森』の地図を交換……。

ここで地図なしで『盲目の森』に挑んでも、脱出まで時間がかかる上に、下手をすると遭難もあり得る。

地図があれば一挙にその問題は解決するのだ。

が、しかし。

今からリオレイアと戦いに行つて、仮に逆鱗を手にすることができれば、それに掛けた時間のロスも問題ではないが、もしリオレイアを倒しても逆鱗が無ければ、けっきょくリスクを背負っただけで

地図も貰えずに『盲目の森』へと挑むことになる。

「どうしたものか……。」

俺は頭を捻る。

ずいぶんとリスクの大きいギャンブルだ……。

「……行こう。」

俺は静かに呟いた。

「どっちへ行くんだよ？ 『盲目の森』か？ リオレイアか？」

アレンが聞き返してくる。

俺は『盲目の森』とは反対方向を振り返って言った。

「行こう……、リオレイアを倒しに、『女王の巢』へ……。」

このまま『盲目の森』に挑んでも何日さ迷い続けるか分からない。

それに、仮に脱出できたとしても次は砂漠が控えている。

消耗した状態で砂漠を越えるのはあまりにも厳しい……。

一方、地図の入手は困難でリスクも上の比ではないが、成功すれば間違いなくトップグループの仲間入りだろう。

さあ、賭けの始まりだ……。

『女王の巢』は密林の断層地帯に位置する巨大な洞窟だ。

密林の女王、リオレイア複数匹が縄張り争いなどとは無縁の、一つのコミュニティーを成して生息している。

危険性は高いが、あちこちを飛び回っている飛竜、リオレイアと確実に会いたければここしかないだろう。

「……というわけで、やって来ました『女王の巢』……！」

『女王の巢』にたどり着いたところでアレンが叫んだ。

「誰に言ってるんだよ……。」

「さあ……?」

俺は目の前の断崖にポツカリと開いた洞窟の入口を見据えた。

そこだけではなく、他にもいくつか入口らしき穴がある。

「他のハンター達も地図欲しさにここに来ているみたいだな。」

アレンが洞窟の近くでキャンプをした後なのか、たき火の跡を見つけて言う。

「俺達も行くぞ……。」

俺はそう言っただ洞窟の中へと進んで行く。

洞窟の中は意外と明るく、外とにいるのと大差ない。

何故かと思い天井を見上げると、天井に大きな割れ目があり、そこから青い空が見え、そして太陽の光が差し込んでいた。

「リオレイアにとっては暮らしやすい環境なのかもな。」

アレンも空を見上げて言う。

たしかに外から吹き込む風は涼しいし、太陽の光は暖かい。

それに、開いた天井は巨大な翼で空を舞うリオレイアからすれば都合が良いだろう。

俺はそんなことを考えながら、リオレイアの姿を求めてさらに洞窟の奥へと歩を進めた。

そして今までで歩んで来た道が終わり、かなり広い空間に出た時だった。

――ザアアアアア……

洞窟に水が流れる音が聞こえる。

俺がそちらの方を見てみると、そこには洞窟に流れ落ちる滝があった……。

「こんなところに、滝？」

外から流れ込んできているのだろうか……？

俺は辺りを見回してみる。

すると岩壁に空いた大穴から外の風景、深い緑に覆われた密林が伺えた。

見える風景からすると今俺達がいる場所はけっこうな高地に位置するらしい。

洞窟に入ってから、知らずに知らずの内に登り坂を歩いて来たようだ。

「おおっ！！ 絶景だな！！」

アレンが広がる外の風景を見て驚嘆の声を漏らす。

たしかに果ての無い空の青に、地平線の向こうまで続くのではないのかと思われる密林の緑。

空には太陽が輝き、白い雲が僅かにそれにかかっている。

そして、その空を舞う緑色の飛竜が徐々にこちらに近づいて来て

「——って、おいっ!？」

俺はそこで我に返った。

こちらに向かって急速に接近して来るのはまぎれもなくリオレイアだ。

ーギヤアアアアーツ!!

リオレイアが咆哮を上げながら滑空して来る。

「リオウ、伏せる!!」

アレンが叫ぶ。

「……ッ!!」

俺はその言葉が聞こえると同時に身を伏せる。

ーギユウウウーンッ!!

空気が切れる音がして、リオレイアの鋭い爪が身を伏せた俺のすぐ上を通過した。

「チッ……、不意打ちとはやってくれるじゃねえか……。」

俺は起き上がると同時にリオレイアの方を振り返る。

リオレイアはしばらく洞窟の中を飛び回ると、地上にゆっくりと

降り立った。

「向こうから来てくれるとはラッキーだな。」

アレンがアンヴィルハンマーを両手で構え、リオレイアの出方を伺いながら言う。

「まあ、探す手間だけは省けたな。後はこのリオレイアが逆鱗の持ち主であることを願うだけだ。」

俺もそう言って天下無双刀を鞘から抜き放つ。

ーグオオオオオオッ!!

リオレイアは外敵に対し、再び咆哮を上げて威嚇する。

しかし、俺達はその警告ともとれる咆哮を無視し、リオレイアめかけて駆け出した……。

《続く》

7話：密林の女王（前書き）

この作品は前作のみたいにギャグが多くはありませんね……。

ギャグを入れるのが難しい流れですが、入れていった方が良いでしょうか……。

感想、意見、アドバイスなどまっています！！

7話：密林の女王

アレンがリオレイアの弱点である頭を狙って正面から、俺はその隙に奴の攻撃の要である尻尾かなめを狙って背後に回り込む。

それに対するリオレイアはまず、自らの領域を侵した外敵を焼き払うための業火を体内の火炎袋で生成する。

そして、リオレイアの口が作り出された炎で溢れ、火の粉が漏れ出す。

さらに、その熱で周りの空間が揺らめいているのが分かる。

「おっと!？」

それを見たアレンは急ブレーキをかけてスピードを緩め、来るべき相手の攻撃に備える。

ドオオオオオンッ!!

火薬に引火したかの様な爆発音、そして赤い輝きが見えたと同時にリオレイアの大きく開かれた口から火球が吐き出された。

「そいつを頂くのは遠慮させてもらっぜ……!!」

アレンは燃え盛る火球をワンステップでかわし、再び加速すると、プレス攻撃に移る際に体勢を落としたままのリオレイアにめがけて突進する。

今ほど奴の頭を狙いやすいタイミングはない。

「それでも……喰らいやがれッ!!」

リオレイアに肉薄したアレンが高く振りかぶったアンヴィルハンマーをその頭めがけて力任せに振り降ろす。

―ブウオオオオン……ッ

が、凄まじい風圧とともに、リオレイアの体が一気に後方へと逃れていく。

リオレイアが巨大な翼で空気をとらえて浮力を生み出し、その勢いで後方に向かってバックステップ程度の飛行をしたのだ。

―ガキイイインッ!!

しかし、それによってアレンの振り降ろしたアンヴィルハンマーの一撃はかわされ、地面を砕いて鈍い金属音を響かせるだけに終わる。

「くそっ！！ ふざけたマネをしやがって……！！」

アレンはすぐに追撃しようとするが、巻き起こった強風に動きを妨げられて思い通りにいかない。

「ここは俺に任せろ！！」

リオレイアの後方に向かって走っていた俺は、リオレイアが後退して来たためにその側面に出ることとなったが、問題はない、とにかく目の前の獲物を倒すだけだ。

「突き穿つ！！」

俺は天下無双刀の切っ先をリオレイアの脚部に向け、左足で踏み込み、体重がその左足に乗るのを感じたと同時に握り締めたそれを突き出した。

全ての力を一点に凝縮した、高速かつ強力な一撃は、リオレイアの体表を覆う堅い鱗を突き破り、その刃はその脚の向こう側まで届いた。

―グオオオオオッ！！

強大な力を持った飛龍も、さすがに脚に刀が貫通しては堪らず、苦しみの叫びを上げて退けぞる。

しかし、気高き女王は片脚の自由を奪われながらも、残る一方の脚で踏ん張り、敵の前で地に伏すことはない。

―グアアアアアッ！！

それどころか、リオレイアはリオウをギロリと睨みつけ、鋭い牙の付いた口を開き、その強靱な顎^{あご}でリオウに上から噛み付きにかか
る。

「なんだと……ッ!？」

俺はリオレイアの気迫とも執念ともとれる行動に気圧され、反応が遅れた。

「くっ……!！」

―ガキイイインッ！！

響く金属音とガリガリツという摩擦音……。

俺は咄嗟とつとに天下無双刀でリオレイアの牙を防いだ。

しかし、そのまま俺の頭の上からリオレイアの口が押し付けられてくる。

ドロリとして異臭のするヨダレが天下無双刀の刃と俺の顔に垂れてくるのがうつとしいが、そんなことを気にしている場合ではない。

「やばい……な……。」

俺は片手を刀の背にあて、力一杯に押し付けられる口を支えるが、アレンは例外としても、普通の人間の力でモンスターの力に勝つのは不可能だ。

そのまま徐々に押されてきて、すでに目の前に奴の牙がある。

さらには天下無双刀がギギギツとしなり、刃がこぼれて今にも折れそうだ。

太刀という武器はそもそも防御、こういった状況を想定して作られてはいない。

名刀、天下無双刀であるからこれだけでもっているのだ。

「……ッ!? ウソだろ!?!」

俺はさらに、見てはいけない光景を目の当たりにした。

リオレイアの口、喉の奥から赤い光が込み上げてきた……。

さらに、その光を浴びる俺の顔、天下無双刀を握る手に圧倒的な熱が伝わってくる。

(ウソだろ……死ぬ……!?!?)

深い絶望感が嫌でも浮かび上がってくる。

そして、灼熱の炎が解き放たれた……

「うらあああああッ!?!」

——ガァァァアンッ!?!

と、いった瞬間に叫び声がして、打撃音とともに目の前のリオレ
イアの巨大な体が吹き飛んだ……。

「……アレン!？」

「大丈夫か、リオウ!？」

アレンはアンヴィルハンマーを振り抜いた体勢のままこちらを見
て言う。

（助かった……、一人だったら死んでいたかもしれない……。）

俺は初めて仲間がいるということに感謝した。

「助かったぜ、アレン。」

「仲間がいて良かっただろ？」

「ああ。」

俺は刃が欠けて切れ味が落ちてしまった天下無双刀を構え、命拾
いしたことで抜けた気を入れ直した。

―グオオオオオツ！！

あと少しのところで邪魔をされた女王がお怒りなようだ。

ここからが女王と呼ばれる雌火竜の本懐ほんかいだろう。

貫かれたはずの脚の傷はもう塞がり始めている。

さすがモンスター、恐ろしいまでの回復力だ。

「来るぞ……！！」

「分かってますって！！」

俺達は怒りの咆哮を上げる女王を見て身構える。

―ガアアアアアッ！！

女王は脚のダメージをもとめせずに、地を揺るがしながら突進してきた。

「そうきたか……。でもそれは悪手ってやつだ!!」

俺は迫り来る女王めがけて、音爆弾との交換で手に入れた投げナイフを投擲した。

―ズバアアツ!!

ナイフは一直線に飛んでいき、突進する女王の右目に突き刺さり、それを潰した。

―ガアアアアアツ!!

視界を半分失い、怒りと苦みの入り混じった叫びを上げる女王。しかし、それでも女王の勢いは衰えはしない。むしろ、より勢いを増して俺達に向かって来る。

だが、やはり視界を半分失い感覚が麻痺しているのか、その突進は左へと逸れていく。

「右だ、リオウ!!」

「分かってる!!」

俺達はその突進を避けるべく、右に逃げる。

左に狙いを外した女王は当然、右に逃げた俺達を捉えることはできない。

だが、俺達はただ逃げただけではない。

それは女王とのすれ違いざまだった。

「うおらあああつ!!」

アレンが体を回転させ、その遠心力を利用してアンヴィルハンマーを振り抜く。

―バキイイイツ!!

その一撃は女王の脚、ひざ膝の辺りを捉え、骨が砕けたのではないか、

と思わせる破碎音を響かせた。

―グオオオオオツッ!!

女王はそれでも立ち続けようとするが、片足を碎かれ、残る一本も俺にやられた傷が塞がりきっていない状態ではその執念も叶わない。

女王は突進の勢いでそのまま転倒する様に倒れ、動きを止める。

「ざまあみやがれ!!」

アレンがチャンスといわんばかりに女王に駆け寄っていく。

「待て、アレン!!」

俺はアレンの軽率すぎる行動を止めるが、すでに遅し。

女王は倒れたままの状態で首だけを動かし、顔をアレンの方に向けて、その体勢から炎で満ちた口を大きく開き、渾身の大火球を吐き出す……。

「……なっ!？」

油断しきり、ハンマーを構えて突っ込んでいたアレンには、その灰も残さないであろう紅蓮の大火球から身を守る術も、それをかわす術もなかった……。

「アレン……ッ!！」

俺は目を見開いたままのアレンと燃え盛る業火との間に割って入った……。

視界の全てが紅蓮に覆われ、熱が身を焦がす。

「唸れ……、天下無双刀!！」

俺は全ての気を刃に込めて天下無双刀を振るった。

欠けたはず刃に紅い気が駆け、新たな刃を形成する。

刀に眠る極限を解き放つ技……、『気刃斬り』。

その磨ぎ澄まされた一閃は、実体を持たない大火球を両断した……。

―ドオオオオオンッ！！

俺達の背後で二つの爆発が起こり、火柱が上がる。

「うおっ……、すげえ……。」

アレンがボソッと漏らす。

「何だ……今は……。」

俺自身、驚いている。

あの状況下で、それも咄嗟とっさにやったことなので何も分からない。

俺が自分のやったことに身を震わせていた時だった。

―グオオオオオオッ！！

女王の咆哮にハツとし、慌ててそちらを見ると、女王が倒れていたはずの場所にその姿はなかった……。

「どこに行きやがった……！？」

俺は辺りを見回すがその姿は見受けられない。

「リオウ、上だ……！」

アレンが叫び、上方を指差す。

「くっ……！！ 逃げる気か！？」

俺がアレンの指差した方を見ると、天井に空いた穴から、広がる青空に向かって翼を広げ、ダメージを受けた脚をダラリと垂らした状態で飛んで行くリオレイアの姿があった。

「アレン、ペイントボールを……！」

「ああ……！」

逃げるリオレイアをマーキングすべく、アレンは慌てて荷物からペイントボールを取り出す。

（ギリギリ届くか！？）

距離はギリギリ、リオレイア自身が巻き起こす強風もある。

しかし、逃がすわけにはいかない。

「届いてくれよ……！！」

そして、アレンがペイントボールを振りかぶって投げる。

ペイントボールは空に吸い込まれるように飛んでいき、強風の壁を越え、リオレイアの垂れ下がった尻尾の先端に当たった。

ドオオオオオンッ！！

が……、その瞬間に響いた謎の爆発音……。

そして、リオレイアの姿が、その爆発の中に消えた……。

《続く》

8話：ゴールドクイーン

俺達は目を見開き、リオレイアが力尽きて落ちていくのを見ていた……。

――サバアアアンツ……

未だ黒煙に纏われるリオレイアの体は滝の中へと落ち、水蒸気のような水しぶきが上がる。

「な……何が起こったんだ……？」

俺はわけが分からず、ただその言葉だけが口から漏れた。

アレンが投げたのはペイントボールで、爆発とかそういったものを引き起こす物ではない。

俺もアレンも、ただポカーンっとして、たった今脳裏に焼き付いたばかりの映像を頭の中でなんども再生するしかなかった。

しかし、そんな時だった……

「オーツホツホツホ！！　これで逆鱗が手に入れば完璧ですわ！！」

むしように高く響く、気どった女の声が聞こえたのは……。

「誰だっ！？」

俺はその女の声がした方を仰ぎ見る。

その女は流れ落ちる滝の上、洞窟の岩壁の上の方に空いた横穴にいた。

まず目を引いたのはその女の服装……。

（紅い……ドレス……！？　なんでそんな格好の奴がここにいるんだ！？）

この狩猟場、まして『ドラゴンアッシュ』には「なめているのか？」と言える程に不釣り合い過ぎるその格好に俺は目を疑う。

すると、紅いドレスを身に纏ったその女が口を開いた。

「『誰だ？』 私を知らないと言っても言つのかしら？」

女はこちらを上から見下ろしながら言う。

「知るかつ！！ 他人の獲物を横取りしやがって！！」

俺はその女に掴みかからん勢いで叫ぶ。

相手が断崖の上にいるため実際にそうすることはできないが、それくらいの剣幕だったということだ。

なぜなら、『他人の獲物を横取りする』といった行為は事故ならばともかく、ハンターとして絶対にしてはいけないことだ。

例えばそれが、『ドラゴンアッシュ』という過酷な競技の中であつたとしても……。

（それを違犯する、ハンターの風上にも置けない奴は大嫌いなんだ……。）

俺はハンター達の中で育つたため、ハンターの誇り、伝統を重んじる人間になった。

だからこそ、目の前の女の行為に激怒したのだ。

まあ、俺以外のハンターでもキレてるだろうが……。

しかし、その女はそんなことは全く気にしていない様で、シレッとその怒りを込めた言葉を受け流して言った。

「フンッ……。そんな些細な事を気にするなんて、やはり三流ハンターですわね!!」

「誰が三流だと!? 他人の獲物を横取りするお前が一流だとも言うつのかよ!？」

俺はその女の言葉に堪忍袋の尾が切れた……。

断崖をよじ登ってでもその女の目の前まで行って殴り倒してやろうとする俺を、驚きの入り混じった表情ではあるが、比較的落ち着いていると言えるアレンが押し止める。

女はそれを、汚い物でも見るかの様な目で見下しながら言う。

「もちろん、私は一流の天才ハンター。貴方達のような俗物とは違いますわ……。」

女はそこで間を置くと、今度は澄ましていた顔を強ばらせて話を続けた。

「その素晴らしい私の名前を……！！　貴方が知らないということの方が重大ですわっ！！」

女はこちらを鋭く指差し、わけの分らないことに怒りを露^{あらわ}にする。

「さつきから、アンタはいったい何者なんだ！？」

ここでアレンがその女に向かって叫んだ。

どうやら、俺ほどではないにしろ、やはりアレンも怒っていたのかその口調は強い。

「なら教えてさしあげるわ、しっかりとその硬い頭に刻み込みなさい。私の名前は……」

シャロン＝フランクリン

その名前は、俺の頭の中を駆け巡った……。

（シャロン＝フランクリン……！！）

そして一つの記憶を呼び覚ました……。

「ゴールドクイーン《金の女王》……。」

俺の口から漏れた言葉……。

それがこの女の別称だ。

シャロン＝フランクリンについて、俺の記憶が許す限り説明しておく……。

名門・フランクリンの家に生まれたお嬢様がどういうわけかハンターになると言い出した。

誰もが無理だと思っただろうが、彼女はこれといった訓練もなしに、12歳という異例の若さでハンターになるための試験をクリアしてしまう……。

13歳の時には街を襲った古龍を撃退するまでに至る……。

そして、14歳の時に一人で、金の鱗に覆われたリオレイアの希

少種を倒してみせた。

その時から、彼女はその金竜と同じ名前で呼ばれたした。

『ゴールドクイーン』

《金の女王》と……。

しかし、彼女の行動は基本的に暴風の様にデタラメだ。

新しい武器の試し切りにと、素材として有能で需要も多い雪山のポプを無意味に、それも生態系を狂わせるレベルで殺しまくり、結果として無くなった餌を求めてティガレックスが人里まで降りて来た事件。

珍しいものを食べてみたいと、珍味とされるダイミョウザザミを探し求め、最近見つかって研究対象として保護対象となっているダイミョウザザミの亜種を周りの制止を振り切り、殺すなど。

とにかく彼女は問題ばかりを引き起こす存在だ。

しかし、彼女の实力だけは本物であることに間違いはない。

俺は一部で天才などと囁ささやかれているが、彼女と比べればその辺に

転がる石ころと同じだろう。

とにかく器が違う、ハンターの素材としてのレベルが比べ物にならないのだ。

その女が、『ゴールドクイーン』が、目の前にいる……。

「オーッホッホッホー！ 驚かれた様ですわね！！ まあ、当然のことでしょうが……。」

シャロンは俺の表情を見て満足そうに高笑いをして言った。

「……。」

俺は無言に陥る。

シャロンの名前を聞いた瞬間に負けたと思ってしまった。

それがむしように悔しい……。

（ハッ……、俺は何に気圧されてるんだよ！？ このクソ女は俺

達の獲物を横取りした気にくわない奴だろうが!!」

俺はそう言い聞かせて、自分というものを取り戻す。

「お前が一流だっというのはよく分かった……。だが、それは他人の獲物を奪って良いという理由にはならないぞ!!」

俺は滝の上にいるシャロンに向かって叫ぶ。

すると……、

——ガアアアアアンツ!!

炸裂する火薬音……。

「リオウ、危ねえっ!!」

アレンが俺の前にアンヴィルハンマーをその手に構えて飛び出してくる。

——ガキイイインツ!!

金属音が響き、何かがアレンが構えたアンヴィルハンマーに弾かれた。

（弾丸……！？）

弾かれた物は弾丸、その弾道を逆に辿ると行きつく先はやはり思った通り……。

「貴方、気に入りませんわ。さつきから伝統、決まりって古くさいことばかり言って……。私を怒らせたいのなら容赦はしませんわよ……。」

金色に輝くボウガンを構えたシャロン……。

その目はこちらを睨みつけ、明らかに殺気を漂わせている。

（アイツ……！！ 人を撃ちやがった！！）

俺はシャロンの攻撃に目を疑うとともに、ますます怒り感情が込み上げてきた。

「このわがまま女……、絶対に許せねえ!!」

「何とでも言いなさい!! もはや私には負け犬の遠吠えにしか聞こえせんわ!!」

シャロンは再び金色の銃口をこちらに向ける。

『ゴールドヴァルキリー』

これを持っている奴などほとんどいないため、詳しいことは分からないが、あれは金竜の素材を使ったライトボウガンだ。

まさしくシャロンが金竜を葬った『ゴールドクイーン』であることの証拠。

半端ない弾速と威力に加え、高い汎用性を誇る。

おそらく俺達が戦っていたリオレイアも、あれから撃ち出された拡散弾か何かでやられたのだろう。

俺はハンターになって、いや今までの生涯で初めて、喧嘩以外で人間と戦うことになりそうだった……。

《
続
》

9 話：人の敵（前書き）

少し更新が遅れました、スイマセン

―（・―・）―

これから短編の方にも浮気しながら書いていこうと思うので更新が遅れ気味になります（汗）

短編の方も見てやってくれると嬉しいです。

では、本文をどうぞ（笑）

9 話：人の敵

覚悟しろ、とシャロンに言い放った俺だが、地の理は明らかにシヤロンにある。

シヤロンは断崖の上から、俺達はその下……、さらに言えば俺達の武器は近接用、シヤロンは遠距離からの攻撃が可能だ。

この差はいかようにもし難い状況を生み出す。

つまり、分かりやすく言えば、俺達は逃げ回ることしかできなかった……。

—ガアアアアン—！！

響く射撃音、硝煙の匂いが上から吹き下ろす風によって俺の鼻にも微かに香る。

「チイツ……！！」

俺は撃ち出された弾丸をかわすことしかできない。

「あらあら……、どうしたのかしら？ あんなに意気がっていら

っしやったのに……。」

シャロンは逃げ惑う俺達を小バカにしながらも、弾を素早くリロードし、再び照準をつける。

狙いは……俺……、ではなく……アレン。

「ちょこまか動く方は後で……。先にこつちを潰させていただきますわ!!」

―ガアアアアン!!

再び響く銃声、その軌道はアレンを、堅牢なディアブロスの鎧のすき間を正確に狙っていた。

「上等だぜ……!!」

しかし、アレンはニヤリと笑うと、回避行動をとらず、アンヴィルハンマーを構えてドッシリと待ち構えている。

弾丸は風を裂き、硝煙の尾を引きながらアレンに向けてスウッと一直線に伸びていく。

その瞬間だけはやたらとゆっくりに見えた。

「うらあああああつ!!」

その静止画を見ている様な錯覚を覚える世界にアレンの叫び声が響き渡り、それとともに世界は再加速した……。

―ガキイイインツ!!

耳の奥まで轟く様な金属音、それが聞こえた瞬間にはアレンはすでに動いていた。

打ち返したのだ……、弾丸を……。

あの瞬間にアレンは、迫りくる弾丸に向かって自らの持つアングイルハンマーを振るつたのだ。

それは見事に高速の弾丸を捉え、弾き返した……。

打ち返された弾丸は不規則に回転しながらも、持ち主の元へとはね返っていく……。

「なっ……!？」

シャロンは思いもよらぬアレンの行動に目を見開き驚愕するが、すではね返ってきた弾丸はシャロンの頬をかすめ、背後の闇の中へと消えていった。

弾丸がかすめたシャロンの頬からは赤い筋ができ、そこから流れて出た血がシャロンの白い肌をつたう。

「こしゃくなマネを……!!」

はね返ってきた弾丸は人間の反応できる速度を越えており、『ゴルドクイーン』たるシャロンでも例外ではなかった。

が、あと少しのところで片目を失う、いや、さらに危険であったのかもしれない……。

とにかく、その事実がシャロンの高い誇りを傷つけたのだ。

「へっ!! 何発でも撃ってきやがれ!!」

しかし、アレンはそんなシャロンをさらに挑発してみせる。

「いいでしょう……。穴だらけにしてさしあげるわ!!」

身を震わせ、怒りを露にしたシャロンは慣れた手つきでゴールド
ヴァルキリーに素早く弾を装填すると、再びその照準をアレンに向
ける。

「私を怒らせた代償……、その身をもって償いなさい!!」

叫びと同時に金色のフレームから吐き出される弾丸……。

たしかな反動がシャロンの腕にも伝わっているであろうが、彼女
は微動だにせず、次の弾を素早く込める。

対するアレンは撃ち出された弾丸に対して再び身構えていた。

体の後ろにアンヴィルハンマーを構え軸足に重心を作っている様
子から、再び打ち返してやる、という意図がハッキリと読み取れる。

「うおらあああつ!!」

案の定、アレンは弾丸を狙ってアンヴィルハンマーを振るう、タ
イミングはほぼ完璧だろう。

タイミングを一度目でだいたい把握したためか、そのスイングは
先ほどよりも鋭い。

が、しかし……

「……なっ!?!」

アレンは驚愕した。

目の前まで飛んできた弾丸が散ったのだから……。

「があっ……!!」

アレンに弾丸のつぶてをかわす術はなく、その四肢に散弾の洗礼を受けることとなった。

しかし、散弾の威力はそこまで大したものではない。

それに加えてアレンを襲った散弾のほとんどは、アレンの身を覆うディアブロスの鎧の前に無力化されている。

足止めが精一杯といったところだろうか……。

「……ッ!?!」

しかし、アレンは思わぬ攻撃に怯みながらも、確かに聞き取った……。

さらにもう一発の銃声と、空気を裂く弾丸の音を……。

（チィッ……！！　こっちが本命かよ！？）

アレンがそれに気づいたのは遅過ぎた……。

アレンの体は先の散弾の痛みに一瞬だが硬直し、本人がどれだけ動かそうとしても言うことを聞かない。

「オーッホッホッホ！！　単細胞にはこのやり方が一番有効ですよー！！」

シャロンはその一瞬の隙を作るのが狙いだっただ。

動けない標的を狙って放った弾丸は当然ながら『拡散弾』。

ボウガンを使う者からすれば必須の切り札……。

「ぐわあああああつ！！」

アレンは、手負いとはいえリオレイアをも葬った爆炎に飲まれた

……。

爆発は連鎖するように起こり、その破壊力を増す。

「たいしたことないですわね。」

シャロンは黒い煙が立ち込める直下の広場を見つめて言う。

しかし、その目は何かを探して忙しく動いていた……。

「どこへ行ったの……？」

思わず口に出た言葉。

シャロンが探していたのはもう一人の敵の姿……。

それが消え失せたのだ。

「ここだ、このクソ女……！」

「な……ッ!？」

シャロンの足元……。

しかし、そこは断崖だったはず……、その事実を考えるとあり得ないリオウの動きにシャロンは困惑する。

「はあああああつ!!」

俺はシャロンの前に飛び出すと同時に天下無双刀を振るう。

俺は断崖を登ったのだ……。

小細工はしてない、ただシャロンの意識がアレンに完全に向いていたために気づかれなかった。

ひとえにアレンがシャロンの攻撃をはね返し、傷を負わせたおかげだろう。

シャロンの意識から俺の姿は消えたのだ。

とにかく、ただそれだけ……、ただそれだけが、逆にそれがシャロンの裏をかく奇襲となった。

アレンの挑発的な行動も全てこれが狙いだったのだ。

「クツ……!?!」

シャロンは慌てて間合いをとろうとするが、すでに俺の間合いに入っている。

俺は氣にくわないとはいえ、人を斬る氣は全くない。

だから峯を返して、シャロンの腹部を打ちにいった。

が……

―ガキイイン！！

それがシャロンを捉えた時、奇妙な音が響いた……。

「残念……でしたわね。」

シャロンがフツと笑い、自らの体に当たって止まった天下無双刀の刃を見て言う。

（こいつ……、ドレスの下に鎧を……！！）

よく考えずとも、十分にありえることだ……、さすがの『ゴール

ドクイーン』といえども鎧を着ないなんてことはあり得ない。

（そんなことも考えなかった俺の失態か……！！）

俺は苦渋を飲みつつも、天下無双刀を引き戻し、構え直す。

「まあ、惜しかったですわね……。その刀なら、峯打ちなどせずに素直に斬りにすれば、私の鎧でも危なかったというのに……。」

シャロンは僅かに破れたドレスから覗く、金色の鎧に視線をやつて言う。

「安心しろ……。次は斬りにいつてやるよ。」

俺は再び刃を返して、シャロンにその切っ先を向ける。

未だにここは俺の距離だ。

「残念ですわね……。奇襲に失敗した時点で貴方の希望は潰えましたわ。」

しかし、シャロンは大胆不敵に笑う。

「強がりもそこまでしな。その得物では接近戦は無理だ。それくらい分かるだろう?」

シャロンの言葉に嫌な予感がしなくもないが、剣士がガンナーに接近戦で敗れるなんてことがあっていいはずがない。

「なら……試してみるといいですわ!! 天才を相手に二の太刀がないということを教えてさしあげましょう!!」

「……ッ!!」

叫ぶやいなや、いきなりシャロンが突っ込んで来た。

俺はその一挙手一動に気を配り、迎え討たんと、天下無双刀を握る手にも力が入る。

すると、シャロンは全く予想できなかった動きを見せた……。

手に持っていたゴールドヴァルキリーを俺めがけて投げつけたのだ……。

「何だと……!!? クッ……!!」

ライトボウガンとはいえ、なかなかの重量を誇る物だ。

不意を突かれて回避という選択肢を選べなかった俺は、反射的にそれを斬り払うという手段にでた……。

が……

先ほども言った通り、それなりの重量を持つ物体、それも正面から投げつけられた物を受け流すのは難しい。

「チイツ……!!」

俺はゴールドヴァルキリーをなぎ払うことには成功したが、その反動で体勢を崩される。

「やはり三流……、単純過ぎますわね……!!」

「しまっ……!!」

——ド「オオオッ——!!」

後悔の言葉を吐き終えるよりも速く、打撃音が響いた。

「がはっ……!!」

シャロンの、鎧の上からでもアバラが数本折られたのではないかと思わせるほどの拳打に嗚咽おえつが漏れる。

さらに体が宙に浮いたと気づいた瞬間には、もう次の衝撃が俺を襲った……。

その次に放たれた蹴脚で、俺は断崖の上に空いた横穴から、直下に広がる広場へと……投げ出された……。

《続く》

10話：傷ついた誇り（前書き）

正直、今回は書くのが個人的に難しかったです（汗）

今回みたいなシーンが自分で思ってたよりも苦手だったと気づきました。

上手く書けていればいいのですが、正直私の文才ではどうなってるかわかりません（笑）

ちなみに、アレンはともかく、リオウのキャラがイマイチ引き立ってないと思ったので少しだけヘタレ属性を入れてみました（笑）

根がヘタレではなく、若さゆえ、精神が発展途上であるがゆえの脆もろさといったところでしょうか？（笑）

長々と失礼しました。

—（・ー・）—

では本編をどうぞ（笑）

（*ハァ。）b

感想や意見、アドバイスをいただけると嬉しいッス（笑）

10話：傷ついた誇り

目を開けると水の中、全身に痛みが走り、体が空気を求めてさなる悲鳴をあげている。

口から気泡が漏れ、自らの危機を悟る。

俺は俺はもかく様に手足をばたつかせ、水面にキラキラと輝く光を求めて浮かび上がった。

俺はシャロンに直上の断崖から蹴り落とされ、その下の滝壺へと落下したようだ。

俺はなんとか水面に顔を出すと、咳き込みながらも無我夢中で新鮮な空気を肺へと取り込む。

目の前には先ほどのリオレイアの焼け焦げた死体が沈んでおり、翼と顔、そして尻尾が水面から飛び出していた。

焦げた血肉の匂いが嗅覚からたまらない不快感を与えてくれる。

しかし、そんなことよりもだ。

「オーッホッホッホ！！　これで貴方達がいかに愚かで、私の足

「元にも及ばないということが分かったでしょう!」

直上から響いてくる声の方が問題だ。

勝敗は明らかだろう……。

俺達は負けたのだ。

不快感を通り越して、何とも言い難い嫌な感情が沸いてくる。

俺は滝壺からなんとか陸地によじ登るが、水を吸って重くなった鎧の重さ以上に、敗北の二文字がのしかかってきた。

「大丈夫か？」

すると突然、アレンの声がした。

そちらを見るとたしかにアレンの姿があり、アレンの着ているディアブロスの鎧は、拡散弾の直撃によりところどころが焼け落ち傷ついているが、まだその威厳を保っている。

元より頑丈で炎に強いディアブロスの素材で作られているだけはある。

そのおかげか、アレン本人の傷も大したことはないようだった。

ただ、その形相は俺と同じく怒りや悔しさが混ざりあい、何とも形容し難いものではあるが……。

その姿を見下ろすシャロンは怪しげな笑みを浮かべて、俺達に言い放った。

「貴方達にはこのレースをリタイアしていただきますわ……。」

俺は一瞬、シャロンが何を言ったのか理解できなかったが、すぐにそれが許容し難いことだと分かった。

「リタイア……って……、そんなことできるか!!」

俺は声を張り上げて反論する。

「あら、私に喧嘩を売っておいて、それだけで済むのなら安いものだというのに……。」

シャロンは俺達の反論を鼻で笑って言った。

「負けたからってリタイアしないといけない、なんてルールはね

え！！ 俺達の腕は、脚は、まだ動く！！」

そもそも向こうからふっかけてきたのだ。

それでリタイアしろとは、元よりそれが狙いだっただのではないかと疑いたくすらなる。

「分かりましたわ……。」

するとシャロンの視線が突然冷静な眼差しに変わり、俺は、空気すら冷えきっていく様な嫌な感覚にとらわれた。

シャロンは睨みつけるような、そんな眼差しのまま続けて言う。

「つまり、貴方達の腕や、脚を潰してさしあげれば……。リタイアしていただけるということですね！！」

空気が震えた……。と思った瞬間に世界が一変した……。

目に写る物全てが凍りついたかのような錯覚すら引き起こされる。

俺は驚きの声を発することをも忘れ、冷たい世界に凍りついてしまった。

これは……殺気だ……。

体感したこともないくらい強烈な……、研ぎ澄まされた殺気。

それがシャロンから、爆発したかのように唐突に膨れ上がったのだ……。

俺はやつと理解することができた……。

彼女、『ゴールドクイーン』はほんの少しも本気を出してはいなかったのだ。

絶望的な差を感じとってしまい、やがて抵抗する気すらなくなっていく……。

殺気だけで、今にもその場に崩れ落ちてしまいそうな精神状態に追い込まれた……、そんな時だ。

遙か直上、高く、澄んだ青の空より、凍りついたその世界すら揺るがす咆哮が幾重にも轟き、響き渡ったのは……。

「えっ……？」

俺は轟く砲哮を聞き、わけも分からぬままに天を仰ぎ見る。

しかし、その次の瞬間には、自身の曇った眼に写り込んだ映像を否定、拒絶せずにはいらなかった。

「何だよ……おいっ!？」

そして、同じく天を見上げたアレンが、俺の心中をそのまま代弁するかの様に叫んだ。

「タイミングというものを考えて欲しいものですわ……。」

シャロンも予期せぬこの状況に俺達ほど驚きを露あらわにはしていないが、直面した状況を悲観しているのがよく分かる。

先ほどの圧倒的な殺気はすでに霧散し、俺達を縛るものは何もない……、が、新たな問題に直面することとなった。

青い空、太陽を背にして三つの巨影が今も依然として、まるで意思を伝え合うかの様に砲哮を轟かせあっている。

その巨影のうちの二つは緑……、そして残る一つは桜色をしていた……。

それらは見間違えるはずもなく、リオレイアだった……。

今も滝壺に転がる一匹と、上空を旋回し続ける三匹を合わせれば四匹ものリオレイアがここにいることになる……。

ここは『女王の巢』、リオレイア達の領域なのだから不思議ではない。

「仲間の敵討ちにでもしに来たっていうのかよ……。」

さすがに三体もの飛竜に襲われてはひとたまりもない。

たぶん、俺の声は震えていただろう……。

「リオウ、こいつは逃げるしかねえぜ……。」

アレンも抗戦の意思すらないのか、アッサリと撤退を示唆する。

正直、事態が急変し過ぎて頭がついていないが、逃げなきゃババい状況であることだけは考えずとも明らかだ。

（だが……、ここで逃げることは、シャロンから逃げることで重
なってしまう気がする……。）

鬱然と^{うつぜん}、傷ついた誇りが、未練がましくも俺の逃走の意思を抑圧
している。

しかし、俺の葛藤の中で停滞する意思とは裏腹に、三匹の女王は
華麗に舞いながらも力強く、仲間を失った怒りを秘めながら悠然と
俺達の前に、地響きを起こしながら降り立った……。

正直、二匹くらいまでが限度だろう。

三匹を相手にするなんてことは考えたことすらない。

しかも、その内の一匹は、原種よりも凶暴化することが分かっ
ている、色違いの亜種ときている。

「リオウ、マジで逃げなきゃヤバいつて……！」

アレンからすれば逃げるそぶりを見せない俺が不思議でしょうが
ないだろう。

地上に降り立った三匹のリオレイアは、滝壺に朽ち果て浮かぶ仲間の姿を見て激昂する。

空を旋回していた時と同様、互いに咆哮を上げ、その口からは炎が溢れていた。

完全に怒りに身を支配されてしまっているようだ……。

しかし、俺は生命の危機にさらされても、未だに陳腐な誇りを捨てきれない。

だが、そんな俺に、そのバカな考えを捨てさせるキッカケを作ったのは、意外にも原因となる人物自身だった。

「興ざめましたわ……。私は引き上げさせてもらいますわ。」

シャロンは軽くため息を吐きながら、踵を返した。

そして、横穴の奥、暗い闇の中へと消えようとし、その時に一度だけこちらを振り返り言った。

「今回は見逃してさしあげますわ。けれど、次に会った時には覚悟しておくことですね……。」

一瞬だけ、またあの時と同じ、いやに冷たい殺気が言葉とともに俺達の体を貫いた……。

が、それに俺の体や心が縛られることはなく、むしろ解放されたと言ってもいい。

シャロンが立ち去ると同時に、俺の変なこだわりは消えてなくなつたのだ。

「おい！！　しっかりしろ、リオウ！！」

そして、アレンの言葉で俺は我を取り戻した。

「ああ、すまない……。負けて、ちょっとおかしくなっていたみたいだ。」

「そんなこと言ってる場合じゃねえって！！　俺達、囲まれちまつたんだ、見るよ！！」

アレンが俺の言葉を気にもとめずに叫んだ。

俺は慌てて周りを見渡す。

すると、いつの間にか、俺が呆けている間にだろうが、三匹のリオレイアがそれぞれに、俺達を包囲する位置へと動いていた……。

狩るものと狩られるものが入れ替わった瞬間だった……。

「冗談じゃないぜ……。」

アレンはアンヴィルハンマーを構え、こちらを取り囲むリオレイアを睨みつけた。

リオレイア達は無計画に襲いかかってくるのではなく、何か思惑があるかの様に一定の距離を保ちながら俺達の周囲を回り続けている。

「逆鱗とか言ってる場合じゃなくなっちまったな……。」

俺もまたそのリオレイア達の動きを険しい目で見ながら言う。

「言ってくれるなよ……。俺達がやったことが無意味過ぎて悲しくなっちまう。」

アレンが深々とため息を吐いて肩を落とす。

しかし、そんなバカらしいやり取りをやっているわけにはいかない。

三匹が今、この瞬間にも大口を開けて飛びかかってくるかもしれないのだ……。

そうなる前にやるべきことは一つしかないだろう。

「アレン……。」

「ああ……、ちゃんと分かってる。そこまでバカじゃねえよ。」

俺はアレンに目配せし、お互いの考えが一致していることを確認した。

（もう、こうなったら強行突破しかない……！！）

天下無双刀を握る手にも力が入り、心臓の鼓動が高鳴り、呼吸も僅かながら荒くなってきた。

出口は向こう……、今は桜色の亜種が立ち塞がっている。

後はタイミングだ……。

俺はポーチの中に手を伸ばし、それを手にした。

（せめて桜色をした奴の動きだけでも止めないとダメだな……！
！）

それは閃光玉……、音爆弾との交換で手に入れたそれを、今ここでいきなり使ってしまうのはもったない気がしなくもないが、そんな節約精神をむき出しにしている状況ではない。

その時……、俺達の背後に回り込んでいた一匹が、ついに緊迫した状態を破り、その鋭い爪で地を蹴り、その大地を踏み鳴らして動き出した……。

と同時に、俺も閃光玉を、三匹が囲う空間のど真ん中へと投じた……。

《続く》

10話：傷ついた誇り（後書き）

なんか週1更新になってきちゃいました……（汗）

週に2、いや3回、それ以上の速度で更新できるように頑張ってくださいと思います！！

（＜D＞）b

感想だけでも創作意欲を刺激されるのでヨロシクです！！

（
）

11話：脱出劇（前書き）

けつきよく週1更新かよ（爆）

最近活動拠点を

アイルーの集い

<http://x42.peps.jp/kazumhp2/>

に移したので（笑）

こちらのサイトの基準（1話1024文字）で5話書いたら、纏めて1話にしてこちらに投稿しております（笑）

だから続きが気になる人はこちらのサイトを見てもらうと少しは速く読めます（爆）

月の始め（1～7日）にかけては小説の人気投票もやっているのです
よろしければ投票してください（笑）

—（・・）—

上位を狙いたいのでファンの皆様（いるのか？（笑））月の始めは
よろしく（コラコラ

ついでに感想も（爆）

長々とふざけた事をすいません。

本編をどうぞ（笑）

11話：脱出劇

白い世界が広がる……。

しかし、荒ぶる竜の咆哮だけは響いていた。

そして、光に溶けた世界が、再び元通りに復元する……。

すなわち命がけの勝負が始まる瞬間だ。

まず、目の前……一番どうにかしたい桜色の亜種。

こいつの動きさえ止まれば、出口まで突っ走るだけ。

後ろの二匹は警戒しなければならぬが、とにかく生存するためにはこいつが問題だ。

（行ける……！！）

しかし、俺は確信的にそう思った。

なぜなら、閃光玉を投げるタイミングはこの桜色をしたレイアの動きに合わせたものだからだ。

他の二匹はどうなったかは知らないがこいつの動きだけは止めたという自信があった。

案の定、桜色をしたレイアは見当違いの方向を向いて、砲撃をあげながら暴れている。

「よし!! 行けるぞ、アレン!!」

俺は出口めがけて一目散に駆け出した。

後ろの二匹は閃光玉の影響下にあるうが、なかるうが関係ない。

「リオウ!!」

しかし突然、すぐ後ろからアレンの警告の意を感じさせる声が響いた。

何だと思い、俺は走らせるスピードを落とし、半身を捻りながら顔を後方へと向ける。

「な……ッ!?!」

目の前まで迫ってきている緑の火竜……。

一番始めに動き出した一匹、それが俺に狙いを定めていたのだ。

逃げ切れなかったが、その見解は甘かった。

しかし、そのことを後悔したところで、時間が戻るわけでもない。

俺はリオレイアに背中を向けたまま、その巨体の突進をもろに受けた……。

背骨が軋む嫌な音が響く……、いや、痛みがはしったのが先だったか……、衝撃で呼吸ができなくなったのが先だったかもしれない。

わけも分からないまま、天地が二度、三度逆転した……。

が、しかし、なにも飛竜の突進をくらうのはこれが初めてではない。

たった4年……、たった4年のハンター人生だが、その4年の中でも何度かあったことだ。

（頑張れ……、俺！！）

俺は齒を食いしばって意識を繋ぐ。

固い地面の何とも言えない嫌な感触はすぐにやってきた。

強打した背骨にまで響く衝撃が体を貫く。

うつ伏せに落ちたため、今度はあばら骨の辺りがキツかった。

まさに痛みのサンドイッチ状態……、なんてバカなことを考えられるということは大丈夫ということだろう。

「俺としたことが……、迂濶だったぜ。」

俺はすぐさま痛みを押さえつけて立ち上がる。

『嫌なことは長く感じる』とはよく言ったものだ。

地面に叩きつけられるまでずいぶん長く感じたが、実際に起こったことはほぼ一瞬だ。

その証拠に辺りの空間での動きというものはほとんど変わらなかった。

起き上がった俺を心配と安堵の混ざった表情で見ているアレン。

突進の勢いで体勢を崩し、地面に倒れこむリオレイア。

相変わらず明後日の方向に向かって砲哮を上げる桜色のリオレイア亜種。

しかし、残り一匹のリオレイアがここで動きを見せていた。

体勢を低く落としたそのレイアの口から吐き出される、灼熱の火球……。

その狙いは正確……、閃光玉の影響を受けていないことがこれでハッキリと分かる。

その射線上にいた俺は、地面を前転するように転がり、その燃え盛る炎の塊をかわす。

（閃光玉の当たりは3分の1かよ……！？ マジで最低限度とはついてないぜ！！）

俺は自分のツキのなさを嘆くが、どんな状況でも決して諦めないのがハンターだ。

「アレン！！」

俺はアレンの名前を呼ぶ。

「何だよ！？」

「出口に向かって走れ！！俺がオトリになる！！」

二匹のリオレイアの攻撃を避けながら、さらに、混乱しているとはいえ凶暴な亜種の脇を潜り抜けて出口まで行くのは困難だ。

そこで俺が考えついたのは、オトリを使うことだった。

「何言ってやがるんだ！？ そんなこと許せるわけないだろ！！」

アレンは怒った時のような剣幕と口調で俺の考えを否定した。

しかし、俺も引き下らない。

「とにかく行ってくれ、アレン！！俺は大丈夫だから！！」

「大丈夫なわけないだろ!!」

俺はアレンがかたくなに反対するので、今度は諭すようにアレンに言う。

「俺は脚には自信があるって言っただろ？ だから大丈夫だ。お前が逃げのびたら俺も逃げるからさ……。」

すると、あくまでも譲らない俺の意思にアレンは一瞬、困ったような表情を見せた後、諦めたのかため息を一つ吐いて言った。

「分かった……。絶対に生き延びてくれよ!!」

そして、アレンは駆け出す。

出口に向けて、可能な限りのスピードで……。

「後でまた会おうぜ!!」

そして、俺もすぐさまアレンと正反対の方向へと駆け出し、リオレイア達の注意を引き付けるべく、その中央へと踊り出た。

それに対して、問題となる閃光玉の影響を受けていない二匹のリオレイアはそれぞれに動いていた。

その片方……先ほど俺を跳ね飛ばした方は、再び大地を踏み鳴らし、土ぼこりを巻き上げながら突進してくる。

もう一方……俺の進行方向で待ち構える方もまた、咆哮をあげ、強靱な脚で駆け出してきた。

どちらも俺の挑発的な立ち位置に誘発されたのか、その狙いは俺へと向いている。

俺を挟み撃ちにするつもりだろう。

（単純な奴らだ……！！）

しかし、俺は迫りくる二匹のリオレイアを限界まで引き付け、そして、可能な限りの力で跳躍した。

上にはない、身を投げ出す様に横に跳んだのだ。

跳び退いた俺の背後スレスレを、猛進するリオレイアが掠めていく……。

俺は際どいタイミングだったが、二匹のリオレイアの挟撃から抜

け出ることに成功した。

「がはっ……！！」

その代わり、不自然な姿勢のまま、腹から地面に着地……もとい
激突したため、先ほど痛めた肋骨と背骨にかなり響いた。

たまらず苦しみのうめき声が漏れる。

しかし、それと同時に何かが激しくぶつかった、凄まじい衝突音
が聞こえた。

何が起こったかは見ずとも分かる。

俺を挟み撃ちにしようと突進してきていたリオレイア同士が、愚
かしくも頭から正面衝突したのだ……。

二つの巨体は絡み合うようにしながら転倒し、短い鳴き声を何度
も響かせている。

立ち上がろうともがいてはいるが、お互いの無駄に大きな身体が
邪魔で、なかなかうまくはいっていないようだ。

俺はアレンの走り去った方にチラリと視線をやる。

（うまく逃げたか……。）

そこにアレンの姿はなく、桜色の亜種が唸り声にも似た鳴き声を出しているだけだった。

（今のうちに俺も……！！）

そう思い、俺はもつれ合う二匹のレイアを飛び越え、出口へと走り出す。

しかし、ここで思いもよらぬ事態が起こった……。

桜色の亜種が視界を失ったまま、俺とは正反対の方向に向けて猛烈な勢いで走りだしたのだ。

それ行動自体は狙いも見当違いなうえに、全く問題ではない。

が、その突進の方向には問題があった……。

次の瞬間に激突音と、破碎音、そして何かが崩れ落ちる音が洞窟

中に響き渡り、俺もその事態に気がついた。

「なっ……！？ 出口が……！！」

崩れた……。

実は岩で覆われた壁は外に向かって開いた穴から吹き込んでくる風や、滝壺から生じる湿気で風化が進んでおり、それがレイアの突進によって一気に崩壊を起こしたのだ。

桜色の亜種はその下敷きになり、しばらく苦しみの咆哮を響かせていたが、遂には動かなくなる。

しかし、その代わりに出口は崩れた無数の岩で塞がれてしまった……。

俺は想定外の事態に驚きの声すら出すことができず、ただ見開た目で崩れた岩壁を見つめるしかなかった……。

これで逃げ道を失った……。

しかし、背後のリオレイア二匹は今ゆっくりと立ち上がり、並び立っている。

「マズイな……。」

冷や汗が頬をつたうのが分かった。

まさに袋の中の鼠といった状況……。

しかし、俺は二匹のレイアの背後に、とあるものを見つけた。

「あ……あれは……？」

向こう、反対側の壁に開いた穴……。

俺達が来た道から、さらに先へと進むことができる入口だ。

気づけば、俺は無言で駆け出していた。

（一か八かの賭けだ!! 先へ進んでみるか!!）

脱出口が塞がれてしまった今、単純な考えではあるが、それしかない俺は考えたのだ。

その先に何があるかは分からない。

行き止まりかもしれないし、ひょっとすると抜け道になっているかもしれない。

少なくとも今のこの状況よりはマシにはなるだろう。

しかし、立ちほだかるのは二匹のリオレイアだ。

どちらも口から火をこぼし、怒りを露あらわにしている。

「止めてみやがれ！！ 俺は絶対に逃げ延びてやる！！」

俺はそんなことおかまいなしに一度鞘にしまった天下無双刀を再び抜き放ち、立ちほだかる強敵へと挑んだ……。

《続く》

11話：脱出劇（後書き）

無駄に長いよ『女王の巣』（笑）

つーか密林長すぎ？みたいな（爆）

12話：仮称・危険領域強行突破作戦（前書き）

ようやく長かった『女王の巣』も終わりが見えましたかね（汗）

密林そのものが無駄に長いよ（笑）

12話：仮称・危険領域強行突破作戦

砲哮をあげた……。

リオレイアが……、ではない。

俺が、だ……。

気合いの一声とってくれればいい。

度重なる試練の連続で、俺の精神は疲弊するどころか、むしろ研ぎ澄まされ、高揚していた。

攻撃をかわし、天下無双刀を振るう。

敵が二匹とはいえど、することには何ら変わりはない。

いつもと違うのは逃げ延びるということだ。

相手が二匹ということにおいて、隙を見て逃げるという選択肢は少し難しい。

だから、隙を“作って”逃げるのだ。

俺は再び雄叫びをあげ、天下無双刀を振るった。

鮮血が飛び散り、炎が飛び交い、轟音が響く。

血で赤く染まった刀身からは、同じ様な赤さの気がにじみ出ていた。

生き延びるといふ一点だけに全神経、集中力を傾ける。

ひたすら貪欲にそれだけを求めて……。

“死ぬ気”という言葉があるが、その言葉の真の意味は“生きる”という意味だと思う。

生きるため、死ぬ気で挑むのだ。

そして、遂にリオレイアの一匹が浴びせられた斬撃に耐えられず、力を失い倒れた。

死んだわけではない、ただ脚に力が入らなくなったのか、バランスを崩して倒れたただけだ。

それで、もう十分だった。

逃げるには十分過ぎる。

俺は傷ついた手を大きく振り、火傷を負った脚で駆け出した。

残る一匹のレイアがそれを許すまじと翼を広げて飛び上がり、突風を巻き起こしながら俺の真上を通過し、再び正面へと降り立ち、立ち塞がる。

だからといって止まってやるわけにはいかない。

俺は恐ることなく、そのまま突っ込んだ……。

振るわれる巨大な尻尾。

しかし、それよりも速くりオレイアの股下を潜り抜けた。

そして、そのまま走り続ける。

神経を削る激しい戦闘と、傷を負った四肢で己が限界の速度で走ったことにより、すでに満身創痍と呼ぶに限りなく近い状態であることは確かだ。

だが、すぐ目の前まで迫った穴に向かって四肢を躍動させる。

息はあがり、身体の内と外が互いに悲鳴をあげるが、残された精神力で抑え込む。

股下を抜かれたりオレイアはすぐに、逃げる俺の方へと振り返り、それを追って再度翼を広げて飛ぶ。

今度はかなりの低空飛行、滑空と呼ぶべきか……。

おそらく、そのまま俺に食らいつくつもりだろうが、それならばなおさら逃げるしかない。

しかし、滑空する飛竜の速度というものは走る俺のそれを遥かに上回っていた。

激しく揺れる俺の影に、だんだんとオレイアの巨大な影が重なってくる……。

俺は次の一步に可能な限りの力を込めた。

疲弊した筋肉が張り裂けそうになるが、前へと進むために込めた力は止まらない。

脚のバネを大きく躍動させ、俺は跳んだ。

目の前の穴へと飛び込む様に……。

『女王の巢』の外……。

無事に脱出を果たしたアレックスとラーダは仲間であるリオウを待っていた。

その眉間にはシワが寄り、なんとも険しい表情だ。

岩に腰掛け、落ち着いている様に見えなくもないが、先ほどから脚をブラブラとばたつかせたり、周囲をキョロキョロと見回したりと、よく見なくともやはり落ち着きがない。

当然といえば、当然である。

この『ドラゴンアッシュ』で知り合った、まだギリギリで初対面とも言える、変に気の合う男がオトリという極めて危険な役回りをかってたのだから……。

『また会おう』とキザなセリフを言っていたが、かなり不安だ。

信用していないわけではないが、その無事な姿を見るまでは、このいかようにも形容し難い複雑な心境は変わらないだろう。

その時だった……。

背後でジャリツという小石と乾いた砂の混じった地面を踏みしめる音がアレンの耳に届いたのは……。

アレンはその音に過敏に反応し、音のした方向に素早く振り向いた。

しかし、アレンの曇った表情は決して晴れることなく、むしろその曇った表情に、さらに怪訝けげんさが加わった。

なぜなら、そこにはいたのはアレンが待っている男、リオウ＝アレスターではなく、一人の女だったからだ。

女は、その艶つやだった金色の髪が特徴的だった。

金色と単調に言っても、ここまで人の目を惹くほどの美しさはほとんどないだろう。

しかし、アレンにとってはそのことよりもまず、女が自分とほとんど同じ年齢層であることが気になった。

リオウを見た時、アレンは『ドラゴンアッシュ』で自分よりも若い奴が出てくるのかと驚いたが、この女もまた、それと同じであった。

女は肩で息をし、両膝に手をやりうつ向いているためか、まだアレンに気がついてはいない。

それに加えて何か愚痴の様な独り言を漏らしていた。

「なんで……私が……こんな災難に……巻き込まれないと……いけないのよっ……！」

息も絶え絶えに漏らすその言葉には、明らかな怒気が含まれている。

どうやら、アレンやリオウと同じくリオレイアの群れに襲われたらしい。

すると、その女はここきてようやくアレンの存在に気がついたらしかった。

「何を見てるのよ!!」

女は顔を赤らめ、突然としてアレンに食ってかかった。

アレンはハトが豆鉄砲を食ったかのように、あっけにとられて目を丸くする。

と同時に、アレンはどうやら自分がやつ当たりの対象になったらしいことを悟った。

「別に見たくて見てたわけじゃねえよ。ただ仲間を待っていたらお前の愚痴が聞こえたんだ。」

アレンは多少皮肉げに言葉を返す。

すると、女はアレンの言葉の一部が気にかかったのか、さらに顔を赤くして言った。

「仲間……？　ふうーん、やっぱり仲間なんて足を引っ張るだけの存在よね!!」

女のその言葉に、アレンは命をかけて自分を逃がしたりリオウを侮辱されたと考え、声色を強めて反論する。

「何言ってやがる！！ 支え合う仲間がいる頼もしさっていうのが分からねえのかよ！？」

しかし、女は全くその言葉を聞いていなかった。

それに加え、一人で呪文の様に何かを呟いている。

「仲間なんて……、仲間なんて……、リオウのバカアーツ！！」

そして、女はそれだけ叫ぶと突然、生い茂る木々の群れの中へと走り去って行った。

「えっ！？ あっ、おい！！」

唐突過ぎる出来事にアレンはついていけず、間抜けな反応を見せることしかできない。

「うん？ 今、リオウって言わなかったか、あの女……。」

アレンはふと女の最後の言葉が気になったが、確かめる術はない。

アレンは走り去った女の手に、リオレイアの逆鱗が握られていたのを羨ましく思いながら、再びリオウを待ち始めた……。

俺は、薄暗い洞窟の中を這う様にして進んでいた……。

先ほどの様に、洞窟に光が差し込んでくるような場所はない。

あの時、俺は見事にリオレイアから逃げ切った。

が、しかし……。

滑空して来たりオレイアは案の定、岩壁に激突。

そして、こちら側の壁も、例のごとく崩壊を起こした。

俺は命からがら、崩れ落ちる壁や天井の中を潜り抜け、生き延び

たことを喜んだ。

しかし、次なる問題は、『ここから出られるのか?』という最大の問題……。

出られなかったら終わりだ。

笑い話にもならない。

俺は自らの心中を具現化したような、入口から今にかけてだんだんと狭くなってきた穴の中を突き進んだ……。

終わりのない闇が前方を包み込む。

（ヤバイ……、やっぱりあそこで右に曲がるべきだったか？）

素直に出られる気がしなくなってきた……。

だが、止まっても何も変わりはない。

ひたすら突き進むのみ……。

—ゴツツ……！！

「痛ツ……！？」

闇雲に突き進んでいた俺は間抜けな音を響かせ、何かに頭をぶつ
けた。

「チツ……、何だよいったい？」

俺は舌打ちして目の前の中へと手を伸ばした。

「あれっ……？」

しかし、次の瞬間には俺は間抜けな声を闇の中に響かせていた。

手のひらに冷たい岩肌の感触……、それは今、一番あつて欲しく
なかった感触……。

ある種の絶望感が心を染め上げてくる。

「いや……大丈夫だ。戻って別の道を進めば……。」

自分でそう言い聞かせ、身を反転させるスペースすらないその道をほふく前進ならぬ、ほふく後進で戻り始める。

が、しかし……。

響いた……落石音……。

すぐ後ろで、だ……。

俺は心の奥底まで沈黙した。

頭の中が真っ白になる。

「う……うわあああああああああああーっ!」

自分でも誰のものか分からない絶叫がその小さな闇の中に響き渡った……。

《続く》

13話：闇の中で光を求める者（前書き）

今回はめまぐるしく視点とかが変わるので、読みにくいかもしれませんが……（汗）

さらに次回の更新は遅れるかもしれない……（爆）

とりあえず、感想とか待ってます（笑）

13話：闇の中で光を求める者

戻ることもできず、進むこともできない。

俺にどうしろと言うのか？

最後の足掻き、希望を胸に戻れるところまで戻ってみたが、退路は完全に埋もれてしまっていることだけが分かった。

そして、今度は再び一番奥へと戻って来てみる。

（終わりなのか……？ 俺の『ドラゴンアッシュ』は……。）

『ドラゴンアッシュ』どころか、これはもう命の問題だ。

視界は全て闇、ただ冷たい岩肌の感触だけが伝わってくるという不気味で独特な感覚……。

絶望を具現化するとしたら、ちょうどこんな感じではないだろうか？

（死ぬ……？ いや、そんな簡単に死んでやるかよー！）

俺は拳を握り固め、肩幅ほどしかないこの狭い空間では十分な力を込めることはできないが、可能な限りの力で目の前の闇を叩いた……。

やはりこの岩肌も脆くなっているのか、僅かながらも表面が削れ落ちていくのが分かる。

俺は我を失ったかの様に、必死になって削れ落ちていく闇を叩き続けた……。

再び『女王の巢』の外……。

先ほどと同じ様にして岩に腰掛けているのはアレン＝ストラーダに変わりはない。

しかし、先ほどまで落ち着きのなかった彼だが、今はその様子が一変していた……。

アレンは目をつむって視覚を封印し、神経を研ぎ澄ましていた。

そよ風に揺れるその髪以外は一切動きがない。

アレンは僅かな音も聞き逃すまいと、聴覚に全てをゆだねていた……。

最初は闇雲に辺りを見回したりしていたアレンだが、彼は一瞬、リオウの叫びを聞いたような気がしたのだ。

聞き間違いかと思ったアレンだが、嫌に頭に残る絶望感漂うリオウの声。

だから今、彼はこうして聴覚だけの世界に身を置いている。

そして……、そよぐ風に遊ばれる葉の音に混じり、かすかに響いた音……。

アレンはたしかに聞き取った……。

（乾いた土の音……？）

アレンの感性からするとそんな感じの音だった。

地面を敷き詰めるそれとは違った……、何かこぼれ落ちる小石の様な……。

アレンは音源を感知しながらふらふらと、迷うような歩調でゆっくりとそこに近づいて行く。

（ここか……？）

アレンは『女王の巢』の外周を取り巻く岩壁に行き当たる。

そこはアレン達が侵入した場所から少し右に寄った場所だった。

アレンは少し戸惑うが、次の瞬間には拳を振り上げ、そして、岩壁に叩き込んだ……。

俺の拳は止まっていた……。

(い……息ができない……!!)

俺は空気を求める魚の様に口をパクパクと動かし、薄い空気を懸命に取り込む。

閉鎖された闇は想像していた以上に恐ろしかった。

ついにはそこに囚われる者の精神だけでなく、肉体にも牙を剥いてきたのだ。

(だ……駄目なのか……!?)

心が折れかけ、諦めの言葉が頭をよぎった時だった……。

闇の中に、軽い衝撃と音が駆け抜けた……。

(……?)

闇が震えたのに俺は驚き、一瞬身をこわばらせる。

しかし、続けざまにもう一度同じものが駆け抜けた……。

それによって、俺は半ば確信的に、最後の力で再び拳を動かし始める。

だが、拳を二、三発叩き込んだところで、最初の二回を遥かに上回る衝撃と轟音が闇を揺るがした……。

それも一度ではない、続けざまに何発も……。

（や……闇が……崩れていく……！！）

光だ……光が闇の中に線を引いていく。

闇が薄れ、久しぶりに自分の手を見た……。

その拳は血に染まって震えている。

そして、最後に今までで一番大きな破碎音……、残された闇は全て崩れ去った……。

「マジでついてなかったよ……。」

そう語る俺の表情は、どんよりと曇っていただろう。

「生きて出れただけマシじゃねえかよ。ヘタすつと、あのまま化石になってたかもな……！」

アレンが豪快に笑って言う。

「それにしても、奇跡的だったよ……、ホントに。」

まさか、がむしゃらに突き進んで行き止まった場所が入口のすぐ真横で、なおかつアレンのすぐ近くだったとは……。

「とりあえず……だ。」

しかし、助かったのはいいが、大事なことを忘れてはいけけないので一旦話を戻す。

「俺達は今から……、地図なしで『盲目の森』へと入ることにな

るんだが……。」

そう言った瞬間、アレンの表情がこわばったのがハッキリと分かった。

そう……、現在俺達は密林の中でも、よりいつそう木々が生い茂るエリア『盲目の森』の目の前で休息をとっている。

ただし、今言ったように地図なんてない……。

『ゴルドクイーン』だったり、三匹の女王だったり、逆鱗にこだわってられる時間なんて微塵もなかったのだ。

「それに加えて時間的にもマズイんだろ……。」

さらにアレンは自分で自分に追い討ちをかける様なことを口にする。

たしかに『女王の巢』に行った分の時間のロスも考えなくてはならない……。

俺は不安を胸に押し込め、天下無双刀を砥石で研ぎながら、生い

茂る木々を……、そして、黒く、いかにも怪しい色をした雲に包まれた空を見上げた。

つかの間の生還の喜びに、いつまでも浸っているわけにはいかな
いようだ……。

どこかの屋敷の一室……。

暗闇に包まれた部屋の一角で、ランプの灯かりが怪しく揺らめいていた。

部屋のいたるところに趣向を凝らしたアンティークが配置されており、その部屋の主の趣味がうかがえる。

そのランプの灯かりの下、高級感溢れる、それもまたアンティークの椅子に腰を据え、同じくアンティークの机に向かっている男がいた……。

その男は、『ドラゴンアッシュ』の開幕宣言をした、運営側の総責任者であるルイス・フランクリンに他ならなかった。

彼はその手に持った羽ペンで、何かの書類にサラサラと作業的にサインをしていく。

その時、重厚な木製のドアをノックする音が彼の耳に届いた。

「入れ……。」

彼は視線を書類に向けたまま、サインをする手を止めることなく、明らかな感情を感じさせない声で端的に言う。

「失礼いたします……。」

ドアがゆっくりと開かれ、一人の妙齡の女性が入ってきた。

女性は作業に没頭するルイスの前まで歩み寄ると、再び口を開く。

「『龍骨』のことですが……、トップグループがそろそろ森を抜けるようです。第一ステージの最終通過ラインも逆算できました。」

女性の報告を受けても、ルイスの表情は一切変わらない。

「続ける……。」

ただ相変わらずの口調でそう言って、報告の続きを即した。

女性もルイスの性格が分かっているのか、大した反応も見せずに言われた通り報告を続ける。

「現時点での脱落者の数は例年を大きく上回っています……。その大半は『盲目の森』での脱落ということです。」

女性の顔は少し曇っていた。

脱落者の数がおもしくない数字だったためだろう……。

一瞬だけ女性の方を見たルイスはそれを察したのか、羽ペンを動かす手を止めて言った。

「構わぬさ……。そのために高い金を支払って『盲目の森』の使用許可を得たのだ……。」

しかし、女性は意に解せぬところがあつたのか、表情から疑惑の感情がハッキリと見てとれる。

「私語ですが……。」

そして、女性はそう断りを入れてから言った。

「今回の『龍骨』は歴代のものと比べても、明らかに力を入れ過ぎではないでしょうか？」

それに対してルイスは、フツと怪しげな笑みをその表情に浮かべて言う。

「今回の『龍骨』はそれだけ重要だと言うことだ……。ひょっとすると『最後』になるかもしれぬ……。」

ルイスはそこで一旦話を切ると、羽ペンと書類の束を片付けてから続けた。

「ギルドも不穏さを感じたのか、『犬』を動かしたとの情報も入ってきている……。変にレースを荒らされぬよう、細心の注意を払っておけ……。」

「……分かりました。」

女性はそう言って一礼すると、部屋を後にした。

「脱落者が続出か……。予想以上に『死神』が役に立っているようだな……。」

ルイスは怪しげな笑みを浮かべたまま、一人そう呟いた……。

《続く》

14話：再会（前書き）

ようやく14話ですね（笑）

プロローグを入れると15話です！！

（・ω・）b

前作ハンティングワールドの打ち切りから、やっとこのラインまで復帰して参りました！！

これも読者様の応援メッセージのおかげでございます！！

ー（・ー・）ー

長い長い密林もようやく最終エリアに突入しましたので、より一層の努力をしていきたいと思えます！！

読者の皆様も長い目で見守っていただけると嬉しいです。
感想やメッセージとかも……（笑）

では、本編をどうぞ！！

くボソツと独り言く

そろそろオリジナルモンスター出したいなあ……。……。

14話：再会

雨は闇夜に紛れて降り、冷たい水滴の感覚が肌に触れ、つたうのに、雨が降っているのがどうかイマイチ分らないといった奇妙な感覚を生み出していた。

腐葉土の地面はぬかるみ、足を踏み出す度に泥が跳ね上がるのがうっとうしい。

現在の天候は大荒れ……。

夜まで休んでから『盲目の森』に侵入したまでは問題……なくはなかったが（地図を貰えなかったこととか）、まさかこんなに天気が荒れるのは思わなかった。

道なんて分からないので、とりあえず走る。

運良く、どこか雨露を凌げそうな場所が見つかれば良いのだが……。

「やっぱり最近、どこかついてないよ、俺は！！」

『女王の巢』での出来事を含め、俺は切実にそう思っていた。

しかし、背後を走っているアレンは特に反応を返してはこない。

気になったので走りながら体を半身捻り、視線をそちらに向けてみる。

すると、アレンは何か口をパクパクと動かしていた。

何かを言おうとしているのだろうか、滝の様な豪雨と鳴り響く雷のせいで全く聞こえない……。

つい「何だよ?」と聞き返したくなるが、どうせ聞こえることはないだろう。

しかし、アレンの言おうとしていることは今のでハッキリと分かった。

つまりは今俺が言おうとしていたことと同じであろう。

俺は少しスピードを落とし、アレンのすぐ横につく。

この距離ならお互いの声も聞こえるだろう。

「聞こえるか、アレン?」

「ああ……、雑音がかなり混じってるけどな。」

たしかに激しい雨音が、アレンのいかにも不機嫌そうな声をその雑音でかき消そうとしているようにも思えなくはない。

「いいか……リオウ、言ってなかったんだが……」

「うん？ 何をだ？」

アレンが体を変に震わしながら何かを言おうとしている。

そして、アレンは少しの間を空けてからそれを叫んだ。

「俺はな……、雷が大の苦手なんだよ！！」

アレンの声が雨音を引き裂いて響くのと同時に、また空が青白く輝き、雷の轟音が辺りに轟いた……。

「へえ〜。」

特に実感も共感も沸かなかった俺は、とりあえず適当に感嘆の声を試してみる。

「『へえ〜』じゃねえよ!! 俺にとっては今の状況はかなり深刻なんだよ!! 今、こうしている間にも俺の心は挫けそうになってるんだからな!!」

アレンが珍しく、軽くではあるが真剣に怒っている。

それに驚かされた、というよりも、珍しさと意外性が俺を驚かせていた。

今の状況のような、苦手なものや状況に関してアレンは過剰な反応を見せるのだろうか……？

感情表現が素直になった、ともしれなくはない。

（まあ、どうでもいいことが……。）

そんなことを考えていた時、豪雨により狭められた俺の視界に、かなり都合の良いものが飛び込んできた……。

俺はアレンを落ち着かせる狙いも含めて、前方を指差して叫んだ。

「アレン、見ろよ！！　どうやら雨宿りくらいならさせてもらえ
るみたいだぜ！！」

俺の指先には巨大な大樹……。

この『盲目の森』全体に生い茂った木々はどれも例外なく、類を
見ないほどに高く、太く育っているのだが、俺が指差したその大樹
はその中においても異彩を放つほどに巨大であった。

そして、俺がその大樹を指差したのは、ただ大きな木があったか
ら……ではなく、その大樹の根本の部分にポツカリと大きな穴が開
いていたからである。

「あそこなら雨宿りくらいは余裕でできるだろ……って、アレン
？」

俺がそう言った時、俺の横にいたはずのアレンの姿がなくなっ
ていた……。

俺はバツと前を振り返り、見る。

そこには、もの凄いスピードで大樹に開いた穴に向かって駆け寄るアレンの姿があった……。

俺は笑いをこらえる様に微笑んで、その後を追う。

そして、何度目か分からない雷音が響き渡ると同時に、アレンは穴に滑り込むように駆け込んで行った。

俺もぬかるんだ地面に足をとられそうになりながらも大樹の真下までたどり着き、そこで一度ゆっくりと、星一つない漆黒の空を見上げてみる。

視界全体に余すところなく敷き詰められた灰色の線が落ちてきて顔に当たるが、すでに濡れて冷えきった身である者の感覚からすれば、そんなことは全く気にはしない。

それから俺は、揺らめく灰色の向こう側、果てなく広がる漆黒の空に青白い光が二度三度、怪しく輝くのを見ていた……。

雷と雨によって生み出される轟音の中にあってなお響く、絹を裂くような女性の悲鳴が、大樹の内側より響き渡るまでは……。

俺は訳が分からず、しばらくそのままの体勢で固まるが、とりあえず穴の中を覗いてみようかと振り返る。

穴の中から茜色の灯かりが漏れだしていた。

まさかとは思うが、中で焚き火でもしたのだろうか？

（いくら穴の中が広いとはいえ、大樹の中だぞ……。）

それに、炎を起こしたのはアレンではないだろう……。

いくらなんでも早すぎる。

それに女の声が響いたことを考えれば……。

（先客がいたのか……？）

とにかく、状況を確認かめるためにも、俺は灯かりの漏れだす穴の中へと入ってみることにした……。

「痛い……。」

と言ったのはアレンだ。

俺が穴の中に入って最初に見たものは、頬に赤く染めてたたずむアレンだった……。

「ア……アナタが悪いのよ！！ 突然飛び込んでくるから……！！」

中央で燃え盛る焚き火を挟んで反対側から女の声がした。

先ほどの悲鳴を上げた女だろうか……？

とりあえず、俺はその女の顔を見てみようと思った。

「あつ……！？」

「ええっ……！？」

しかしその次の瞬間には、俺とその女は驚きの声を同時にあげていた……。

「……………」

とりあえず、お互いに沈黙を守ったまま、互いにその顔をまじまじと見つめる。

「リンス？」

俺はその女の名前を呼んだ。

「リ……リオウなの？」

リンスが俺の名前を呼び返してくる。

俺の名前を呼んだということは、リンスに間違いはないだろう。

女がリンスだという確証が得られたところで、とりあえず何か言わなければならない事があった気がしてならない……。

だが、これまでゴタゴタした出来事が続いていたせいか、その言葉が出てこなかった。

リンスの方も何か言いたそうにしているが、口を閉ざしてしまっ

ている。

とりあえず、よく似た状況下にあるようだ。

そんな滑稽こっけいな場を打ち破ったのはアレンの一声だった。

「ああっ！！ オマエ、よく見たらあの時の女じゃねえか！？」

「えっ……？ あっ！？」

そう言われたリンスは一瞬何を言われたのか分からなかったのか、困惑の声を出すが、すぐに心当たりがついたのか一変して驚きの声を上げる。

「何だ？ お前達、知り合いだったのか？」

俺はアレンとリンスが顔見知りだということに少々驚きを覚えながら聞いてみた。

「いや……、何て言っているのか分からねえが、『女王の巢』でオマエを待っている時に少しやつ当たりされたんだ。」

アレンは相変わらず赤い頬をさすりながら言う。

それを聞いたリンスは恥ずかしかったのか、少し顔を赤らめていたが、何か思い当たることがあったかの表情を二転三転させて叫んだ。

「ちよつと待つてよ！！ あの時、アナタが待つてゐるって言うていた『仲間』ってリオウのことだったの！？」

そう叫んだ時のリンスの表情には少々怒りが含まれていた……。

「見て分からねえか？ この通り、俺とリオウは協力して『ドラゴンアッシュ』を攻略してるんだ。」

アレンは特に変わった反応も見せず、淡々と言い返す。

そのやり取りの中で、俺はリンスに言おうと考えていた言葉が何であつたか、少し思い出せそうになる。

そして、その言葉は、完全にプツリとキレたリンスの言葉によってハッキリと思ひ出すことができたのだ……。

「リオウ……、アナタ……私にレース開始前に『誰とも組まない』って言ってなかったかしら……？」

怒りに身を震わせるリンスが詰め寄って来る。

「ま……待て！！ とりあえず色々とあったんだ。と言うより、何でそんなに怒るんだ……！？」

俺はリンスの剣幕にギリギリと後退しながら弁解する。

「アナタが『組まない』っていうから私も一人で、ここまで酷いめに遭いながら頑張って来たのに……、そのアナタが他の人と組んでるなんて、許せるわけじゃないでしょうが……！！」

「そ……それは悪かったよ……。」

（こ……こうなったら、とりあえず謝りまくるしかない！！）

アレンが焚き火に当たりながら笑いを堪^{こら}えているが関係ない。

しかし、そんなヘタレ精神全開の考えが俺の脳裏を支配する中、一つだけ反論の余地があることに気がついた……。

「ちょっと待て……！！ お前も誰かと組めば良かったんじゃないのか！？」

これは正論だろう、俺が『組まない』と宣言しようとリンスには関係ないのだから……。

すると、リンスはピタリと動きを止めた。

「ほ……他の人とは組む気が起こらなかったのよ……。」

そしてリンスはその言葉だけを何とか紡ぎ出す。

その顔は何故か赤く、先ほどまで怒っていたためではなさそうだ……。

「か……勘違いしないでよ！！ 他に知り合いがいなかったってだけなんだから……！」

さらにリンスは弁明するようにそう続ける。

(……よく分からねえな。とりあえず落ち着いたし、結果オーライか?)

先ほどとは体勢を変えて焚き火に当たっているアレンは何かを悟ったかの様に一人で頷うなずいている。

「とりあえず、色々と話もあるみたいだし一休みしないか？あ
の天気の中をずっと走って来たから疲れたんだ……。」

「許したわけじゃないから……、たつぷりと弁解を聞かせてもら
うことにするわ……。」

「はい……。」

騒がしいその夜は、なかなか過ぎ去ってはくれないようだった……。

14話：再会（後書き）

ついにリンスが合流!!

15話にして、ようやくメインメンバーが揃いました（笑）

次の話の前に外伝を書いてみたいと思っているのでよろしくお願ひします!!（笑）

すでに本作とは関係ありませんが、モンスターハンターの短編を一つ投稿しておりますので、そちらの方も読んでいただき、感想とかメッセージをいただけると非常に嬉しいです（笑）

（´・ω・`）b

外伝：リオウとハワード 前編（前書き）

こちらは本編の外伝となります。（、＊）

短編として投稿しても良かったのですが、本編との関係性がそこそこあり、纏めて短編にして投稿するにけっこうな長さになりそうだったのでこちらに投稿しました。

できる限りたくさんの方の目について欲しいという意味もあったりします（笑）

（、・ω・、）b

舞台は『ドラゴンアッシュ』開始の1ヶ月ほど前になります。

忘れているといけないので書きますが、ハワードについてはこの作品の序盤に登場するキャラですので、「ハワードって誰？」という読者様は軽く序盤をチェックしてから読んでいただけるとありがたいです（笑）

—（、—、）—

では、森と丘を訪れたリオウとハワードの目的とはいったい何なのか……？

ご覧くださいます！！

）追記）

外伝はあった方が良いのか？とか気になるのでメッセージや感想を
いただけると嬉しいです（笑）

―（・・）―

外伝：リオウとハワード 前編

ここは森と丘……。

敷き詰められた緑がみなぎるかの様に盛り上がり、なだらかな丘陵地帯を形成している。

そのところどころを澄んだ無色透明な川が光をピカピカと反射させながら、いくつも枝分かれしつつ突っ切っていた。

悠久の時を感じさせるその地を、二人のハンターが木々の群れを掻き分けながら突き進む……。

その二人は、大の大人と、大人として認められたばかりの青年という組み合わせであった。

「いいか、リオウ！！　すでに『ドラゴンアッシュ』の出場権を得ているお前に俺が言うのも何だが、『初心忘れるべからずだ』、いいな！？」

大の大人がリオウと呼ばれた青年に言い聞かせる様に叫んだ。

「分かってますよ、ハワードさん！！　それで……、俺を引っ張

り出して何をする気ですか!？」

リオウもまた叫んで返す。

どうやらリオウという青年は、ハワードという年輩の男に半ば強引に連れて来られたらしい……。

「他意はねえよ!! ただ、『ドラゴンアッシュ』の出場権を得て舞い上がっているお前に、少し稽古をつけてやろうと思ってな!」

どうやらこの二人、いちおうの師弟関係にあるようだ。

「舞い上がってませんよ!! むしろ、かなり緊張して実感が無いくらいなんですから!!」

「それならなおさらだ!! そんな状態で『ドラゴンアッシュ』に挑んでも、第1ステージ脱落が目に見えているぜ!!」

ハワードという男は、何が何でもリオウを鍛え直すつもりでいるらしい……。

しかし、大会開幕を翌月に控えたりオウからすれば派手なことは

ご免被^{じやうむ}りたいのだ。

リオウはそのことで反論しておこうと思ひ口を開こうとするが、ハワードの叫び声にそれは遮られた。

「見ろよ、リオウ。 あそこだ……！！」

ハワードが叫ぶと同時に指差したのは、生い茂る木々の中、ポツカリと開いた場所にたたずむ、古ぼけた建物だった……。

小屋の様にシンプルなその建物は今どき珍しい石造りで、何か重要な物をその中に隠しているといった印象も受けなくはない。

ハワードはその石造りの小屋に先走って近寄ると、その側面に作られた、同じく石造りの扉の前に立った。

扉は今述べた通り石造りで、いかにも頑丈そうであるのに、さらに錆びかけてはいるが鎖で幾重にも封をされている。

「チィッ……、『ドラグライト』で作った鎖でも錆びついちまうか……。『カブレライト』でも用意しろってか？」

ハワードは愚痴を言いながらも、鎖の繋ぎめにある鍵穴……六ヶ所ほどあるその鍵穴に、ポーチから取り出した……同じく六つの鍵を、次々と差し込んでいく……。

そして、鈍く……重い音をたてて鎖はハワードの足下に落下した。

「何が置いてあるんです？　こんな秘密の場所みたいなのに……。」

リオウは重いその扉を押し開けようとするハワードに聞いてみる。

「秘密の場所だから……。秘密の物が置いてあるに決まってるだろうが……よっとー！」

ゴゴゴつと石の扉独自の力強い音がして、その封は完全に解かれた……。

「答えになってないですよ……。」

リオウは愚痴を返しながらも、その部屋の中を覗いてみる。

中はむせかえりそうな程に誇りが充満してはいるが、それ以上に中はごったがえしていた……。

言うなれば……そう！！

『資材置き場』だ……。

「汚な過ぎる……。」

リオウは率直な感想を漏らすしかない。

すると、それを見たハワードは苦笑いして言った。

「ま……まあ、汚ねえのは仕方ないだろ？　こんな場所だし、管理できねえしな……。」

どうやら、ハワードの個人的な所有物のようだ。

「……で、ここに何があるんですか？」

リオウはもつともな疑問をハワードにぶつける。

対するハワードは石の壁に手を当てながら、どこか懐かしそうな顔で答えた。

「ここは、俺が修行時代に使っていた場所なんだ……。今回はお前に、俺がやったのと同じ修行をしてもらう。」

「修行……ですか？」

リオウはかなり熱血的な言葉にいぶかしげな顔でハワードを見返す。

「そうだ！！ 修行だ！！」

ハワードはやけにテンションが高くなり、そのゴミ貯めのような部屋へとわけ入って行く。

そして辺りを見回した後、何かを引っ張り出してきた……。

「何ですか……それ？」

リオウはハワードが持ち出してきた物の異質さに目を見開いて聞き返す……いや、聞かざるを得ない。

「『太刀』だ!!」

ハワードはアッサリと言っただけ。

リオウはハワードの態度に呆気にとられるが、しばらくした後で口を開いた。

「どこからどう見ても……『錆びた棒』にしか見えないんですけど……。」

たしかに形状だけを見れば立派な『太刀』だ……。

しかし、錆びた刃は欠けてとても使い物にはならない……。

それをハワードは『太刀』と言っただけだ。

「馬鹿野郎!! これでも立派な太刀だ!!」

ハワードはリオウにその錆び付いた棒を投げてよこす。

リオウがそれを受け取った時にいちおうは金属のものらしき音がした。

が……、異常に軽い。

「これをどうしろと……？」

リオウはたじたじ聞き返す。

ハワードはフンツと鼻で大きく笑って言い放った……。

「リオウ……、お前にはこれからその『太刀』で、この森と丘で
猛威を振るう主……『リオレウス』を狩ってもらう……！」

「……はあっ！？」

リオウはがく然として、手元の錆びた棒を見つめるしかなかった
……。

《続く》

外伝：リオウとハワード 前編（後書き）

前編・後編……または、前編・中編・後編に別れるのでご了承ください。

―（・―・）―

構想はある程度練っていますが、まだ前編しか執筆していないのでどれくらいの長さになるかは不明です……（汗）

とりあえず、後書きまで読んでくださって感謝いたします（笑）

―（・―・）―

外伝：リオウとハワード 中編（前書き）

とりあえず先に予告しておく、後編 が変に長くなりそうなんだ。

とりあえず悪いことではないから謝る必要はないんだが、全ては己の構成力の無さが原因だね。

本編もこれが終わりしだい再開するから待っていて欲しい。

最近、外伝ということで短めながらも、ちゃんと更新できてると思っしね。

喋り方がおかしいのは仕様なんだ、許して欲しい。

とりあえず最近アクセス数が増えてきた気がして嬉しくてね。

読者様には本当に励まされるよ、ありがとう。

これからもよろしく頼むよ。

外伝：リオウとハワード 中編

いくらなんでも、こんな得物で空の王者たるリオレウスを狩るなんて無茶過ぎる……。

愛刀である『天下無双刀』をハワードに没収されたりオウは、しぶしぶ錆びた刀を持って森と丘を探索していた。

ちなみにその無茶な試練を与えた肝心のハワードは、あの石造りの小屋に居残ったままだ。

本人は修行時代に同じことをやり遂げたらしいが、かなり怪しい……。

（しかたない……、真面目に勝機を探ってみるか……。）

リオウはいつまでも不安と疑心の混じったままでいるのは何の解決にもならないことを今になって悟り、とりあえず前向きに考えてみることにした……。

リオウはハワードが与えたヒントらしき言葉を思い出す……。

『太刀はその刃で斬るんじゃない、お前のその燃える様な心が相手を斬るための武器になる!!』

ハワードの熱すぎる感情がにじみ出た言葉を、リオウは心の中でその言葉の起伏や声色まで再現して再生してみる。

そして、結論はすぐに出た……。

「意味不明だ……!!」

としか言いようがない。

とりあえず、このボロボロの刃がリオレウスの身に傷を刻めるのかどうか疑わしいが、やってみるしかないようだ……。

傷を負わせられるのならまだ勝機はある。

そんな思惑が頭の中を巡る中、リオウは気まぐれに空を見上げた。

太陽の光を遮るほどに生い茂る葉が、自由気ままな風に遊ばれている。

その時たまたま、その中の一枚が揺さぶられて落ち、リオウの元

へと落ちてきた。

リオウは特に意味もなく手のひらを上に向け、その葉を掴みとろうとしてみる。

が……、その葉はリオウの手に触れることなく、猛々しい咆哮を持った突風によって天高く舞い上げられていった……。

リオウは突然の突風に身をこわばらせながらも、目でそれを追う。

舞い上がった木の葉の向こう側……一枚二枚ではなく、辺りに生い茂っていた物の大半が今の巨大な力によって巻き上げられ、不規則に宙を飛び交っている……、その向こう側に赤い巨影……。

風とともに駆け抜けたその姿を、しっかりと確認できたのは刹那のことではあったが……、あれは見間違うはずもなく『リオレウス』そのものであった……。

「向こうから現れてくれるとは好都合だ……！！」

リオウは走り出す、リオレウスを追って……。

奴が通った後に舞い上がっている木の葉の渦が道しるべになってくれている。

なだらかな斜面がだんだんと急な坂道になっていく……。

深緑の大地から飛び出した、樹齢何年とも知りえぬ木々の根が足を絡めとろうとするかのようにそこに存在するが、どれもがリオウの行く手を遮る障害にはなりえなかった。

（見つけた……！！）

そして、遂にリオウはリオレウスが大地に降り立つ瞬間に居合わせる事となる。

それは戦いの幕開けを意味していた。

しかし、その始まりは、リオウによる一方的な宣戦布告からであった……。

リオウは渡された錆びた太刀を、同じく錆びた鞘から抜き放ち、未だこちらに気づかず背を向けているリオレウスに肉薄する。

刃を抜き放った際に、表面の錆がこぼれ落ちてリオウを躊躇^{ためら}わせるが、それでもやるしかないと分かっているので、止まらずに突っ込む。

そのリオウがまず最初に狙ったのは、リオレウスの尻尾……。

垂れ下がったその尻尾は飛竜種ならではの巨大さで、恐ろしい棘がいくつもついている。

その尻尾をどうにかする……、それこそ飛竜退治で最も重要な要素の一つだったりするのかもしれない。

ハンターにとって飛竜の吐く灼熱の吐息や、その強靱な脚で地面を駆け抜けられるのも十分な驚異なのだが、その動きは巨体が長所であり短所でもある、といった感じた……。

つまりは細かな動きと、俊敏な動きを得意とするリオウからすれば、自由自在、変幻自在に動く尻尾の方が厄介というわけだ。

リオウは錆び付いた刃をその尻尾めがけて、走ってきた勢いそのままに上段から振り下ろした……。

不意を突き、相手に気づかれていないためか、リオウの太刀筋は教科書通り……というべきか、とにかく非の打ち所がないほどに正確で、本人が今できる範囲で完璧なものだった……。

そして、リオウの手に鈍いながらもたしかな金属独自の、あの震えるような反動が伝わる。

その手応えから、リオウは確信を得た……。

（無理だろ……！！）

結果として、振り下ろされた刃はリオレウスの全身を覆う堅い鱗と甲殻に弾き返され、リオウは込めた力の分だけ大勢を崩されるだけに終わった……。

それに加え軽く刃が欠けたのだが、むしろ、刃こぼれだけですんだだけでも良かった方かもしれない。

ヘタをすれば刃が根本の方から折れていた……。

しかし、嘆いてばかりはいられない。

今のでさすがにリオレウスも、こちらの存在に気づくだろう。

リオレウスは未だに何が起こっているのか分らない、といった感じでキョロキョロと辺りを見回してはいるが、いちおう視界にリオウの姿を捉えたようだ。

しかし、その目は普段獲物に襲いかかる時の、怒りに満ちた様な目ではなく、不思議なものを見つけたかの様なものだった……。

それほどまでにダメージと呼べるダメージがなかったのか知らないが、リオウにとっては悲しすぎる出来事には違いない。

「クッ……！！　まだ手はあるんだ！！」

リオウは気を入れ直すように叫んでリオレウスの側面に回り込もうとする。

狙うは翼……その薄い翼膜ならば、この太刀と呼べるかも微妙な物でも貫くことくらいはできるだろう。

しかし、リオレウスは足下で動き回るリオウが妙に気に触ったのか、先ほどまでとは一転し、怒りを全面に押し出して臨戦体制になる……。

「短気な奴め……！！」

リオウはリオレウスの変貌ぶりに愚痴をとれるセリフを吐きながらも、今度はリオレウスの翼を狙い始めた……。

《続く》

外伝：リオウとハワード 後編（前書き）

少し更新が遅れましたが、後編となります。

とりあえず予定よりも遅くなったことをお詫びいたします。

—（・―・）—

予告通り前編、中編よりも長いです（汗）

自分の構成力に課題を発見（笑）

（；・・・）

とりあえず初の本編の『外伝』ということで手探り状態でしたが、自分ではけっこう頑張ったと思います（笑）

感想とかあればよろしくお願いいたします！！

—（・―・）—

外伝：リオウとハワード 後編

それは何の苦もなくアツサリと突き刺さった……。

リオウが突き出した、いちおうの刃にあたる細長い部分は、リオウスの翼膜に風穴を穿つ。

今になって気づいたのだが、いかにどう猛なリオレウスが相手といえど、翼を狙うだけならさほど難しいことではなかった。

その変わり、それによって与えられる効果は限りなく薄いといっても過言ではない。

論より証拠……。

リオレウスは自らの翼膜の一部に、その全体から見れば全く差し障りない程度の穴を開けられた程度では動じず……、むしろ気がついてすらいないのか、そのままリオウを噛み砕こうと鋭い牙がいくつもついた口を大きく開き、丸飲みにする勢いで迫る。

（クソッ……！！ これ以上、どうしろって言っただよ！？）

リオウは大勢を崩していると思えるほどに、身を大きく捻ってその猛威をかわす。

もはやこれ以上は打つ手なし……、リオウは半ば諦めかけていた。

そんな時に、リオウはリオレウスの圧倒的な威圧感を潜めた、その赤く燃え上がる様な目を見つめてしまった……。

「……ッ!？」

たしかに血に飢えた野獣の目を連想させるそれは、たしかに見る者を恐怖させるが、普段は特に気にもならない。

それは単に覚悟^{ひとえ}の問題なのだ。

立ち向かう気持ちや集中力が切れない限りは、そんなものは当たり前……といった余裕すら感じられる。

しかし、リオウは半分は折れてしまっている心で、リオレウスの狂気にも似たそれを見つめてしまったのだ……。

リオウは全身が金縛りにあったかの様に、見えない何か……恐怖

心と呼ばれるそれに囚われた。

身体中の筋肉が緊張状態にあるかの様な感覚……。

（動けない……！？ 前を見なければ……！！ しかし、直視はできない！！ 何故？何故！ 何故！？）

心中はそれとは逆に、訳が分からないほどに混乱してしまっている。

しかし、その混乱する心は、次の瞬間にはキレイさっぱり……“真っ白”になっていた……。

「さてと……、そろそろリオウの奴も音をあげて戻ってくる頃合いだな……。」

石造りの壁にもたれて一眠りしていたハワードは、リオウがいると予想される、木々の合間から微かに覗く、なだらかに盛り上がった丘を見つめる。

その深緑の曲線のいずこかにリオウ……、そしてリオレウスもいるのである。

（『ドラゴンアッシュ』の厳しさってやつを教えてやらねえとな……。）

ハワードはうつすらと、しかし焼け跡の様に深々と、その心の奥底に刻まれたあの……誇らしくも、同時に忌々しくもあるあの時の記憶を思い返した……。

この事は誰にも……、もちろんリオウにも教えていないハワードだけの秘密だ。

（『ドラゴンアッシュ』の中では二度三度……いや、数えきれないくらいの危険にさらされる。全てはそこを潜り抜けられるかどうかだから……。）

だからこそハワードはリオウに無茶とも思える試練を与えてやったのだ。

正直な話、ハワード自身……あの錆びた太刀……いや、棒であのリオレウスを殺れるとは思ってもいない。

もちろん、これもハワードだけの秘密である。

デタラメな課題とヒントを与えて、リオウがそれで派手に失敗してくればオツケーなのだ。

そして、リオウに『ドラゴンアッシュ』の厳しさというものを優しく諭してやる……、というのがハワードの計画だった……。

「クックククク……！！　リオウよ……、派手にやられてくるがいいー！」

ハワードは完全に悪役の様な笑い声を上げながら、丘陵地帯の方を見上げる。

「……あん！？」

だが、次の瞬間にハワードは間の抜けた声とともにその表情を一変させた……。

「チッ……。俺も歳かな……？」

ハワードは自身の両目を何度も擦ってみる。

それは今一瞬、迫る様にそびえたつ曲線の内側、敷き詰められた緑を……、深い紅が引き裂く様に一閃したからであつた……。

視界が揺らぐ……、足が地面についてない様な感覚……、吐き気がして強烈な頭痛までする。

リオウは全身に痛みと違和感を感じながらも、なんとか立っていた……。

対するリオレウスは今も変わらず、圧倒的な威圧感を誇る捕食者としてそこに君臨している。

狩る者と狩られる者の立場というものが確立されようとしていた……。

「くそっ……。もし、これが夢であつたなら最高なんだが……」。

リオウは揺れる視界にリオレウスの全身を収める。

砲哮をあげ、土ばかりを巻き上げながら、怒濤の勢いで迫り来る赤い絶望の姿を……。

しかし、当たり前だが、リオウとしてはこんなところで終わるわけにはいかない。

幸いにも脚のダメージは少なく、走ることできる。

リオウは体の自由が戻るまで、走り回ってリオレウスの猛攻をやり過ぎそうと考えた。

が……

「な……ッ!？」

リオレウスの動きに意識のほぼ全てを集中させていたのが仇^{あだ}となつた……。

ここは地面から巨大な大樹の根が這い出す、非常に足場が悪い場所だということをリオウは完全に失念していたのだ。

案の定、リオウは地面から飛び出した根に足をとられて転倒する。

リオレウスはそれを好機と見たのか、それとも本能的なものなのかは分からないが、勝利を確信したかの様な咆哮を轟かせ、リオウに迫った……。

（死ぬ……のか？ 否……まだだ、まだ早い。夢を目前に死んで
たまるか……！）

リオウは錆びた太刀の切っ先を猛進するリオレウスに向け、足掻きにも見える抵抗の意をハッキリと見せる。

しかし、リオレウスは張り巡らされた木の根など意にも介さず、地面ごと抉りながらリオウの目前まで迫ってきた。

「うおおおおーっ！！」

リオウは普段は上げない雄叫びとともに手に持つそれをリオレウスの眉間に向けて突き出す。

すると、眉間を狙ったその一撃はリオウの生への執着心がそうしたのか、はたまたは天が起こした奇跡か、その錆びているとは言えど鋭さを残した切っ先がリオレウスの憤怒を象徴する紅い右目に突

き刺さり、抉った……。

リオレウスは悲鳴のような凄まじい鳴き声で吼え、それは辺りの木々をざわめかせるほどであった。

肝心なりオウは何が起こったのか全く理解できておらず、ただ耳から伝わってくる不愉快を通り越して、耳を塞ぎたくなるような衝撃的な怪音に眉をひそめる。

だが、リオウは頭の中を掻き乱される様な爆音の中においてもその耳を塞がず、両手はその代わりに自らが与えられた得物を強く握りしめていた……。

リオウが優先したのは聴覚ではなく視覚であったのだ。

鳴き叫び、見かたによっては混乱して動きを止めているようにも見えるリオレウスの姿を写し出す己の視覚を……。

（ここしか……ない!!）

今の今まで体勢を崩していたリオウであったが、好機……それも天が与えてくれた最後のチャンスになるであろう、その一瞬の隙を手にするため飛び出すように立ち上がる。

そして、駆けると同時にその名も無き太刀を振るった……。

しかし、この時リオウは全く気がついていなかったのだ。

その太刀の中ごろから先は存在していないことに……。

その太刀にとってはかなり重要な部分は今この瞬間も苦しみ叫びを上げ続けるリオレウスの右目に深々と突き刺さっているのだが、リオウはその部分があるものと心の奥底まで思い込んでいた……。

それでもリオウは折れた太刀を振るった……。

狙うは、リオレウスの腹。

（通れば『生』を、通らねば『死』を……。俺は必ず『生』を掴みとる！！）

全ては気迫だった……。

リオウは気迫で名無しの刃を振るっただ。

あるはずのない刃をその『生』への執着心で燃える心中で想像し、

描き出して……。

そして――

『紅い閃光が駆け抜けた』

目的の二割はリオウを探しに、残る八割が『紅い閃光』の正体を確かめに……。

そんな探求心の割合が遥かに大きいハワードが見たのは、折り重なるようにして倒れるリオウと、己の体色とは違った赤に染まるリオレウスの……“半身”だった。

「何だ……これは!？」

ハワードの言葉は出るべくして出た言葉であろつ。

目の前にはリオレウスの無惨な斬殺体……、その向こうには同じリオレウスの断面図……。

多少吐き気をもよおしたハワードは、まだ意識があるのか、肩で大きく息をしながら突っ伏すリオウに近づく。

「やりましたよ、ハワードさん……。」

ハワードの影がその背にかかったところでリオウは口を開いた。

「そう……みたいだな……。ちょっとは強くなったか!？」

賞賛するハワードの声は微かに震えていたのは言うまでもない。

地面に突っ伏しているリオウからは見えないがその表情はかなり汗ばんでいたりする。

(やべえ……。マジでやっちゃまいやがった……。)

これが素直なハワードの心境であった。

「と……とりあえずだ!! これで『ドラゴンアッシュ』の厳しさというものをだいたい把握したな!？」

ハワードは取り繕うように言う。

「ええ……、嫌と言っくらい。」

うなだれるように答えるリオウ……、その表情に微かな笑みを浮かんでいたのをハワードは知らない……。

珍しいほどに赤い夕日が森と丘を、そしてリオウを背負ってその中を帰るハワードを照らす中……、いちおうはハワードの『リオウ修行計画』は幕を閉じた……。

騒乱と熱狂が交響曲を奏でる『ドラゴンアッシュ』の開始まで、1ヶ月ほど前の話である。

外伝『リオウとハワード』

これにて【完】

外伝：リオウとハワード 後編（後書き）

ふう〜、長かった（笑）

後書きまでしっかりと読んでくださっている読者様には感謝です。

いちおうこの場を借りてアピールを……（笑）

自分は

アイルの集い

<http://x42.peps.jp/kazumhp2/>

という攻略サイトに、少し前から拠点を移して小説を書かせていただいております（笑）

（´・ω・´）b

管理人はカズさんという優しい人でございます。

（´、*´）

こちらの方が少しだけ早く自分の小説を読めます。

そういった読者様がいてくれるのかは分かりませんが、少しでも早く読みたいという方はどうぞ（笑）

そもそも何でここでこんなことを書いたのかと言うと、このサイトの小説コーナーで1月の始めから人気投票があったりするので（

爆)

数十の作品がランキングに参戦しています(笑)

1月1日〜7日くらいに投票やってますので、その時はよろしくお
願いします。

上位を狙ってみたいので……(笑)

長々と失礼しました

|(・|・)|

15話：白に染まる世界（前書き）

間に外伝を挟んだので雰囲気崩れていないか心配です（汗）

とりあえず、密林の最終エリア『盲目の森』の試練とは……！？

感想とか待ってます（笑）

15話：白に染まる世界

色んな意味で寝苦しかった夜は、それが幻であつたかのごとく過ぎ去った。

大樹に空いた穴の入り口から差し込む朝日が日の出を教えてくれる。

しかし、薄暗い大地を照らす朝日には輝きがなかった。

俺は、朝に弱いのか虚ろな瞳で何を見つめているのか定かでないリンスと、未だに眠り続けるアレンの存在を確認した後で、大樹の内側に吹き込む外気の異質さを確かめに外に繰り出した。

体に張り付くような湿気が辺りに漂っている……。

なるほど、これでは快適な寝起きは望めはしない。

「それにしても……、ここは別世界か……？」

俺はたじろぐ様に呟く。

五里霧中……という言葉があるが、まさにそんな感じだ。

辺りを埋めつくす深い霧……白の世界が、霞む朝日と共に出現した……。

あれだけ生い茂っていた大樹もその白い世界にぼんやりと、不気味に浮き上がっているといった感じで、その圧倒的な存在感を奪われてしまっている。

（たつた一夜でここまで表情を変えとは……、まさに大自然の神秘……。）

俺は感嘆と同時に、立ち込める霧に心を包み込まれたかのような不安を覚えた……。

そんな中で好奇心も後押しして、俺は勇気を出してその白い世界に一步を踏み出す。

「雨……？」

体を感じとっている湿気が急に濃くなった……、というよりは体に水滴が垂れ始めた。

（霧雨……。）

そう……、立ち込める霧に隠されていたため、気がついたのが今になったのだが、深い霧に混じる様な感じで繊維の様に細い雨……つまりは霧雨が降っている。

そもそも天までも覆い隠すような霧のせいで“降っている”という実感はなく、むしろ細かな水が霧の中に浮いているといった印象ではあったが……。

「たまらねえな……。」

俺は不快感を通り越して、諦めにも似た感情を抱いた。

「何も見えないわね……。」

すぐ背後から声がする。

振り返って確認せずとも分かる……、リンスのものだ。

「ああ……、間違いなく遭難する状況だ。」

俺はこの霧の様にうつすらとして、明確ではない事態の深刻さをようやく実感した。

「これじゃあ、“地図”も役立つかわからないわね……。」

リンスはそう言って真新しい、大きめの紙を取り出す。

（地図……！？）

俺はリンスの発した言葉が気になり、その紙を覗き込む。

「リンス……お前、『逆鱗』手に入れられたのか？」

俺は率直な疑問をリンスにぶつけてみることにした。

なぜなら、リンスが広げていた紙というのはまさしく『盲目の森の地図』だったからである。

「まあね、私の実力からすれば楽勝だったわよ！！」

リンスはフンツと鼻を鳴らして勝ち誇るように答えた。

そしてリンスは何かを察したのか、怪しげな笑みを浮かべて聞き返してくる。

「ねえ、ひょっとしてリオウ……。『地図』を手に入れられなかったの？」

「ぐうつ……！！」

凶星である……。

リンスに弱みを握られてしまうとは不覚だ……。

何だか淒く嫌な予感がしなくもない。

俺のあからさまな反応を見たリンスは、さらにニヤリと笑って続ける。

「つまり私がないとアナタ達はリタイア確定というわけね？」

「う……うもつともです……！」

マズイ……、いつぞやの『ゴールドクイーン』よりも質^{たち}が悪いかもしれない……。

いかなる要求をしてくるのか……、俺は息を呑んだ。

そして、リンスは口を開いた。

「じゃあ、決まりね！！ 私も仲間に入るわ！！」

「えっ！？」

それは、俺からすればかなり意外な要求だった……。

「何よ……。その微妙な反応は？」

リンスがいぶかしげにこちらを睨んでくる。

「いや、もっと凄い要求がくるのかと思ってた……。」

俺は素直にそう思い、身構えていたのは秘密だ。

「失礼ね。私に仲間になって欲しくないってことかしら？」

「誰もそんなことは言っていないだろ？」

「じゃあ、問題ないじゃない。決まりね!!」

とりあえず、リンスが仲間に参加しそうであった……。

まあ、あそこまで回りくどい方法をとらずとも、今なら普通に言えば仲間になっていたと思う。

「とりあえず、ありがとうなリンス!! おかげで遭難せずすみそうだ!!」

礼は言っておかねばなるまい。

どういうわけか、俺が邪魔だと言っていたリンスが、ほぼ無償で助けになってくれるのだから。

「か……勘違いしないでよね!! 地図が必要なアナタと、戦力になる仲間が必要な私で利害が一致したっただけなんだから!!」

何故かリンスは顔を真っ赤に染めて、怒鳴り散らす様に叫んだ……。

それは数有る異形のモンスターのの中においてもなお、異形であった……。

それは、我々が意図的に閉鎖した霧と闇が支配する世界から出たことはなく、それ故にその存在を……自らが圧倒的な恐怖となりゆるであるうことを俗世に知られることなどなかった。

わすがにその存在を知る我々はある意味で『古龍』よりも希少であり、不明なところが多いと語っている。

会おうとして会えるものではなく、むしろ会いたくはない時にこそ……命を狩りに現れるのだ。

何人もの研究仲間の屍を積み上げようと、決して理解できないその存在に……我々研究者は三割の敬意と七割の畏怖を込めて『死神』の名前を授けた。

そして、謎に満ちたその存在はまさに『混沌』。

カオス……『死竜カオス』

気をつけることだ……。

閉ざされた世界の支配者たる死神は、初めての外の世界からの訪問者に『死神の鎌』を向けているのだから……。

そして、死神は……気がついたらすぐそこにいるぞ……。

それにしても、愚かな男がいたものだ。

死神を『試練』とするなど、愚考以外の何物でもない。

まあいい、利害は一致している。

こちらは貴重な研究資料を手に入れられるわけだからな。

せめて、ハンターどもが健闘してくれることを祈っておいてやることにしよう……。

——片腕のない研究者の書記——

「いてえ……。」

アレンが腰の辺りをいたわるかの様に擦りながら呟く。

「いつまでも寝てるアナタが悪いのよ。いつ、何時、緊急事態が起こるか分からないという気持ちでいてもらわないと……!!」

アレンの腰痛の原因であるリンスが、自らの行為の正当性を証明するかのように言い返す。

つまりは、眠りこけるアレンの腰を、リンスがわざわざ助走をつけて蹴りとばしたという、見た側としては驚愕ものの出来事があったのだ……。

「俺、個人的にはあの寝苦しさの中であそこまで寝ていられるアレンが凄いと思うよ……。」

それもある種の才能なのだろうか？

俺はアレンを褒めるつもりはないが、素直に驚嘆の声を口にした。

「そう思うだろ？ 俺はどんな状況下でも必要最低限の睡眠をとる自信があるぜ！！」

俺のその言葉に反応したアレンが大げさに胸を張り、自慢気に答える。

「そんなのぜんぜん自慢にならないわよ……。」

リンスが呆れた様にため息を漏らして釘を刺した。

まあ、全く必要のないスキルと言い切ることはできないが、いつまでも眠り続けるのは、たしかにどうかと思う。

「……。」

何故か急に話題がなくなった……。

バカな会話が途切れた時というのはこんな空気になることが多い。

『酒場』で育った者の教訓……というほどのものではないが、無駄知識の一つである。

俺が思うに、話題はあることはあるのだが、上がりきったテンションに見合っ話題がないのだ。

そんな中、リンスが沈黙に耐えかねたのか、今一番言ってはならなかったタブーを口にしてしまった……。

「それにしても、何なのよ！？ このジメジメを通り越して水の中にいるみたいな状況は！！」

できるだけ気にしないようにしていたというのに……。

（まあ、誰だってそう叫びたくはなるけどな。）

リンスが叫ばなければ自分が叫んでいたであろう。

辺りは相変わらずの霧、霧、霧。

それに混じるように降るしきる、雨というには少々弱すぎる霧雨。

一つそこに付け足すならば、太陽を遮断する木々が生み出す薄暗さと、その木々が高い湿気で腐った臭いが雨によって浮き彫りにされている。

早く抜けてしまいたい、ここは『盲目の森』という“迷いの森”。

頼れるのはリンスの持つ地図だけで、それを持っているとはいえず、この霧の中で地図に描かれた『目印』を探しながらではない。

つまりは、嫌でもこの生き地獄にも似た環境の猛威に晒されなければならぬのだ……。

「あつー!!」

リンスがそんな中、何かを発見したようだった。

今この瞬間までこわばっていた彼女の表情も少しは和らいだみたいだ。

「見て!! あれが中間地点の目印よ!!」

そう言ってリンスが指差したのは、霧の中に僅かに浮かぶ建物のようであった……。

さらに近づくにつれてその全貌が明らかになっていく。

基本は石造りで、風化の度合いは激しく何十年……いや何百年も前からここにあるといった感じである。

今にも崩れそうだ、と思ったのはたぶん他の二人も同じだろう。

さらに細かく説明すると、壁にはツタや苔がびっしりで、素直に言つと最初は石造りであることが分からなかったほどだ。

「でけえ建物だな……。」

すぐ間近まで来たところでアレンが率直な感想を漏らす。

たしかに大きな建物だ……。

建物の高さ自体は辺りから突き出す巨木のせいで際立ってはいないが、その奥行きは相当な規模を誇っていた。

朽ち果てて崩れた部分からは外気とともに霧が入りこんでいるのか、内装には白い霞がかかっている。

さらにその霞の向こうの壁には、何やら龍のレリーフの様なものが彫られており、それを薄い霧が覆うことによって、神秘的かつ立ち入る者に警告を促すような威圧的な空気をもしだしていた……。

《
続
》

15話：白に染まる世界（後書き）

オリジナルモンスターの影を異質な感じでちらつかせてみました（笑）

（ ） /

問題はオリジナルモンスターの描写ですね……。
精一杯やるのでよろしくお願いいたします！！

―（・|・）―

16話：閉鎖世界の死神（前書き）

あけましておめでとございます

m — (m

今年も私の作品をよろしく願います

（笑）

16話：閉鎖世界の死神

果てしない時の流れを越えて存在する名も無き遺跡……。

そして未来永劫、この遺跡が崩れ去り……完全にその存在が忘却の彼方へと葬られるまで共にあり続けるであろう、闇がそこに広がっていた……。

遺跡とともに長き年月を取り込んだ闇には、何か恐ろしい怪物が潜んでいるかもしれない……といった、親が子に語り聞かせるおとぎ話を、今になって信じてしまっぐらいの深い畏怖を感じずにはいられない。

「我は時の流れに取り残され……、絶望を抱く闇を張り巡らす、汝を引き裂く巨壁なり……。」

「はあ？」

突然として意味不明な言葉を漏らしたのはリンスだ。

今、目の前にそびえ立つ遺跡を強く意識させるその言葉に、つい俺は驚きと疑惑の混じった言葉を返してしまう。

「地図に描いてある中間地点の横に、ヒントみたいな書き込みがしてあるの……。」

リンスは間違いなく聞き返されると予想していたのか、特に変わった反応も見せず言葉を返してきた。

俺は何も語らずリンスの手元にある地図を覗き込む。

たしかにそこには、今リンスが言ったことが一字一句間違いなく記されていた……。

「ヒントって言うより、注意書きみたいだな。」

リンスはこれをヒントと解釈したみたいだが、俺はそう思う。

「主催者側が用意した、恐怖を煽るためのただの演出じゃねえのか？」

遺跡を見つめつつ何を思っていたのか、しばらく沈黙を守っていたアレナが、少々おちゃらけて言った。

「だと良いんだがな……。」

俺は間違いなく主催者側が勝負を挑んできているとしか思えない。
参加者を“ふるい”に掛けるとすれば間違いなく・・・何かある。

俺は覚悟を決めて、闇の中へと踏み込んだ・・・。

遺跡の構造は一本道がずっと向こうまで続いている、といった感じだった。

深い闇と流れ込んだ霧とでそこまでハッキリとは見えないが、今のところ脇道や部屋らしき区画は確認できていない。

ただ延々と通路が続いており、変わったことといえば壁に描かれたレリーフが、まるで何か物語のようなものを描き出しているのか、数歩ごとの間隔で彫られているだけだ。

似たようなものはあっても、同じ内容の物は一つもない。

しかし、俺個人としてはあまり興味はなく、仮に内容を把握しようとしても所々が崩れてしまっているため、全部でいくつかある物語の本の初めを読んだ後でその本の四巻を読んで内容を把握するくらい無理がある。

「まあ・・・、気を紛らわす程度には役立つか。」

俺は目を背けたくなくなるような辺りの不気味さの中をただ黙々と進むよりはマシだと思い、壁画を見ながら先へと進むことにした。

「ちょっと、リオウー!!」

そう考えた矢先、俺を呼ぶリンスの声が響いた。

「こりゃあヤバイんじゃないか・・・?」

アレンの声も僅かながらも驚愕か、はたまたは恐怖の意味合いかは分からないが震えている。

俺は何事かと思い、すぐに壁画から目を離して、リンス達が見つめているその一点を凝視した。

「これは・・・!?!?」

そして、すぐに俺も似たような声を漏らすこととなる。

何故なら、そこにあつたのは・・・人間の・・・右脚・・・。

具足が装着されていることから、それがハンターのものであるうことは簡単に推測できた。

床にはおびただしい量の血が撒き散らされており、しかもまだ切断されてから余り時間は経っていないようだ・・・。

「汝を引き裂く巨壁・・・。」

リンスが例の地図に書かれていた文の一節を思い出したかのように読み上げた。

目の前の光景とあいまって不気味を通り越して、恐怖心すら感じる。

- ああああああーッ!!

闇の奥から響き渡ってきたのは断末魔・・・。

あまりにも突然だった。

俺を含め、ここにいた全員が目を見開いて身をこわばらせる。

「行くぞ!!」

状況把握を最優先。

謎の書き込み、引き裂かれた脚、響いた断末魔・・・、それらが表すものが何であるのかを確かめるために俺は闇と霧の中を疾走した。

「ちょっと待ちなさいよ!! 何があるか分からないのよ!？」

リンスが制止の声を上げる。

「何があるか分からないから行くんだ!!」

しかし、俺はそれを振り切り、駆けた。

側壁に描かれたレリーフが流れるように移り変わっていく。

「そういうことだから、諦めてついて行った方がいいぜ。」

アレンが、考えもなく動いたとも思われるくらいに迅速な俺の行

動に啞然とするリンスに一声かけて、俺の背後に続くように駆け出す。

一瞬、置き去りにされたリンスではあったが、すぐに我を取り戻し若干の困惑含んだ面持ちでそれに続いた。

断末魔が響いた地点までは意外と距離がある……。

悲痛な叫びが聞こえたということから、そこまで離れてはいないだろうと推測していたのに、それなりの距離を走ることとなった。

日常では考えられないくらいの静寂と、遺跡の構造が音をあそこまで響かせたのであろう……。

俺は、首と右脚がなく……腹部を大きく切り裂かれた死体を見つけて足を止めた……。

いや、正確に言えばその死体に覆いかぶさるようにして肉を喰らい、骨を砕き、血をすすっていた化け物を見て……。

どうやら一瞬、目から入ってきたその異常な情報を頭が認識するのを拒否していたらしい。

それほどまでにおぞましい光景であり、その化け物の姿が異質であつたのだ……。

何と言えいいのか分からないが、その化け物は四足で大地を踏み締め、辺り一面に広がる闇に溶け込むような・・・黒光りする甲殻に身を覆っていた。

飛竜種のような鱗を持っていないのも特徴としてあげられるだろうか？

しかし、そんなところよりもまず目を引いたのは化け物の尻尾・・・。

それは・・・“鎌”である。

これは例えでも何でも無い。

見た目そのままだ。

ひよろりと伸びた、しかし甲殻に包まれて頑丈そうな尻尾の中頃から横に、飛び出すように生えているのである。

そして、驚異的な得物を持つ化け物には、その代わりに目がなかった・・・。

盲目の竜の存在は前例があることなので血の滴る鎌を見た時よりは驚きが少なかったが、この化け物も闇の中でそういった変貌を遂

げてきたのだろうか？

俺は正直、そんな化け物の存在感に飲まれていたとしか言いようがない。

まるで金縛りにあつたかのような、否・・・動くという考え自体が頭から消えて無くなっていたのだ。

ただ無言で、まばたきすることすら忘れて、見入っていた。

見たこともないその化け物の姿を、好奇心や嫌悪感、恐怖心に驚愕といった多種多様な感情が入り交じった視線で・・・。

それは普通なら愚行以外の何でもない。

敵の前に呆然と立ち尽くすなどあつてはならないことだ。

普通ならすでに先手をとられて、下手をすればその場であの世行きだろう。

しかし、なぜかその化け物もこちらに目のない、不気味で飾り気のない顔を向けて、同じくこちらの様子を伺うように立ち尽くしていた。

「リオウ・・・!!」

沈黙を破る……というほどでもないが、リンスが俺の名前を小声で呼ぶ。

真っ先に今すべきことを把握したのはリンスであつたようだ。

化け物の足元に転がる惨殺体、二本の牙が飛び出す口から滴り落ちる鮮血がこの化け物が完全に敵であることをハッキリと教えてくれる。

化け物が正体不明であろうが、イカれた外見をしていようが、戦うしかない。

それを避けては通れないだろう。

俺は天下無双刀を抜いた……。

先手必勝……、相手がこちらの動向を伺うようならば、先に仕掛けさせてもらう。

俺は化け物の尻尾についた鎌が俺から見て左側に伸びていることから、迷わず右方向から回り込むように駆け出す。

その前に一瞬、俺は後方に控えるアレンに目配せしておいた。

相手の動きが分からない以上、援護がいる。

そして、化け物への宣戦布告となる一撃が放たれた……。

放ったのはリンス……。

真っ先に動き出した俺よりも早く彼女が攻撃をなしえた理由は、彼女が扱う武器にあった。

そう……弓である。

リンスの手にはモンスターを狩ることを目的に設計された弓……、すでにその第一矢は放たれていた。

牽制とも思われるそね矢は、化け物の眉間を正確に捉えている。

すると、どうということだろうか？

化け物は回避するそぶりを見せず、それどころか、元の体勢を保ったまま動かなかった。

やはり目がないためだろうか？

解せないが、当然放たれた矢が化け物の眉間に直撃する。

が、しかし・・・。

化け物の全身を例外なく覆う、黒光りする甲殻は想像以上に堅いらしく、矢は弾かれ、その甲殻の表面に欠けたような痕を作るにとどまった・・・。

そして、その直後だった。

低めに体位を保っていた化け物が、さらに体勢を落とした・・・。

これが化け物の臨戦状態なのだろうか？

とにかく、これで俺達も・・・敵とした認識されたい・・・。

《続く》

16話：閉鎖世界の死神（後書き）

新年早々、オリジナルモンスターという荒業・・・（汗）

それはともかく、前々から宣伝していた

アイルの集い

<http://x42.peps.jp/kazumhp2/>

で人気投票があつたりします（笑）

一月三日くらいから一週間らしいです。

他にも色んな人達の作品があります（笑）

よければ投票してやってください。

m———m

ちなみにパソコンからは入れないらしいです（汗）

17話：光を知らぬからこそ闇も（前書き）

みなさんお久しぶりです。

長い間、休載していましたが、やっと再開となります。

すいませんでしたm（――）m

本文の内容ですが、いきなり反省の連続かもしれません（汗）
分かりやすく言えば、オリジナルモンスターは半端なく難しいな、
と……

ともかく、再開したからには頑張っていこうと思うのでよろしくお
願いします。

- 追記 -

今回の文章は、何度かに分けて区切りながら書いたので、文脈の繋
がり変なところがあるかもしれません。

先に謝っておきますm（――）m

17話：光を知らぬからこそ闇も

ゆっくりとした、ほとんど音を起てない歩みで、そいつは動き出した。

そこには、肉を喰らい、血に飢えるモンスターの荒々しい姿などまるでない……

むしろ臆病にも見えるその姿は、どこか自分達ハンターの姿に重なる。

「ちょっと……早く切り掛かったらどうなのよ、あなた達!!」

リンスが弓（たしか、パワーハンターボウとかいう種類のやつだ）を構えつつ、そいつの異質さに戸惑う俺達に檄^{げき}を飛ばす。

「分かってるさ!! 分かっているが……」

そう、分かっている。

目の前にいるこの化け物は決して人間とは相馴れない、敵であり、俺達が先へと進むために倒すべき存在だ。

しかし、これ以上踏み込めない。

現在、奴の周囲を取り囲むような陣形を俺達は組んでいるが、ずっとそのままだ。

「おい、リオウー!!」

続けてアレンの叫びも俺の耳へと届けられる。

そこでようやく俺の覚悟も固まった。

「……………うおおおおっ!!」

過剰な雄叫びを上げて、俺は化け物の側面から一直線に突っ込んだ。

今まで感じたことのないタイプの恐怖心を振り払うためである。

（当たって砕けるだけさ!!）

実際に砕けてやるわけにはいかないが、今の俺の心中はそんな感じだ。

そして既に、俺の間合い……

もはや躊躇^{ためら}うこともない。

俺は天下無双刀を右から左に薙ぎ払うように振るう。

するとアッサリと、天下無双刀の剣先は、化け物の左後ろ脚に吸い込まれるようにして直撃した。

周囲の闇に溶ける、黒光りする甲殻が切断の力の前に立ちほだかり、抗ってくる。

しかし、俺の手には、度重なるモンスター達との戦いの中で味わい続けてきた、あの痺れるような感触が、金属が手に食い込む感触が伝わってくることはなかった……

つい勢い余り、無双刀を振るったその勢いで、そのまま一回転しそうになった。

それくらいのものであったのだ……

（何だ、この貧弱な甲殻は！？　いくらなんでも柔らか過ぎるだろ……！！）

自分の率直な感想だ。

リンスの矢が跳ね返されたことから、俺はこの化け物の黒光りする甲殻はかなり堅いのだとばかり思っていた。

それを覚悟して、俺は天下無双刀を振るっただ……

しかし、良い意味か悪い意味かはハッキリしないが、結果は俺の予想を裏切った。

天下無双刀の刃は、黒光りする甲殻を、その内に詰め込まれた薄い赤色をした肉ごと叩き斬ったのだ。

そこから吹き出たのは緑色をした、不気味な血液……

響いたのは化け物のものか…… ガラスを引っ掻いたかのような、耳の奥底に直接叩き込まれる、高く不快な音。

「チィ!!」

化け物の奇怪さ、不気味さに舌打ちしつつ、俺は行き過ぎた刃を、体を逆に捻って引き戻す。

しかし、そこで初めて、当初の予測通りに化け物は、それ自体が鎌ともいべきその尻尾を振るっただ……

だが、尻尾から生えた鎌は逆の方向を向いていたはずだ。

俺はそれを計算に入れてここから攻撃を仕掛けたのである。

とにかく、俺は咄嗟に飛びのいた。

最初から、斬ったら逃げるという考えでいたので、タイミング的には十分に避けることができるはずだ。

「うっ!？」

しかし、奴から離れるのが一番遅かった部位、右手の甲の辺りに痛みがはしったかと思ったら、かすり傷ではあるが、たしかに斬られたような傷があった……

（おいおい、いくらなんでも早過ぎるだろ!？）

完全にかわしたと思ったタイミングであつた……が、しかし。

奴の尻尾が動いたと認識したところには、その尻尾はもう振り切られていた。

さらに、向こうを向いていた鎌は、尻尾の中頃で捻れて、こちらにその鋭い刃の先を向けている……

また一段と……化け物の不気味さに拍車がかかった。

（ずいぶんと便利な尻尾を持つてやがるな……！！でも、これなら血に飢えた飛竜の方が厄介だ！！）

高速で振るわれるあの尻尾はたしかに厄介だ……。

しかし、獲物を見つけるなり見境なく食らいつこうと、牙を剥いてくる飛竜の方が個人的には厄介だと思う。

「おまえは、おとなし過ぎるんだよ……！」

叫び、心の中にあつた化け物への違和感を、全て拭い捨てる。

完全に開き直った俺は、一気に攻勢を仕掛けるべく再度突進を仕掛けた。

化け物は俺の接近を警戒しているのか、二本の牙を剥いて威嚇し、あの奇妙な鳴き声を響かせるが、そんなものはこけおどしにもならない……

俺は堂々と、正面から、化け物の顔に向けて天下無双刀を振り下

ろす。

しかし、さすがに攻撃が単調過ぎたのか、化け物は四肢を躍動させて、飛びのくように後退し、俺の振り下ろした天下無双刀は空を切る。

「くっ……、素早いな！！　しかし……！！」

今のタイミングでかわされたのは意外だったが、それでもまだ俺の……、いや、俺達の攻撃は続く。

背後から、俺の脇を通り過ぎるように、しっかりと狙いをつけて放たれた一発の矢。

言うまでもなく、リンスが放ったものだ。

その矢は、後退した化け物を追い撃つように、化け物の左前足に直撃するが、またしても虚しい音を響かせただけで、あの甲殻に弾かれてしまう……

俺のすぐ後ろで、凄まじく殺気のこもったリンスの舌打ちが聞こえたが、気のせいだろう。

あの化け物の甲殻はかなり特殊なようである。

けっしてリンスの攻撃力不足ではないと思う……

（さあ、奴の実態をハッキリさせてくれ……、アレンー！）

俺は化け物のすぐ脇にまで距離を詰め、気配を殺しつつ、手に持つアンウゝイルハンマーを構え、体を捻って極限まで力を溜め込むアレンの姿を認めると、全ての期待をその瞬間に託した……

化け物の側面から、比較的柔らかそうな腹を目掛けて、アレンはアンウゝイルハンマーを振り抜く。脚から腰、腰から腕へと力を移動させ、鉄の塊を凶器へと変える。

ハンマーの扱いに慣れたものでなければ、その重量に遊ばれるだけであろう。しかし、アレンは違う。アレンはどうすればその威力を引き出すことができるかを熟知している。

だからこそ、俺は期待の眼差しを送ったのだ。そして今、超重量の鉄塊が、化け物の腹部に、側面から襲い掛かった。

「うおらあああっ……！」

インパクトの瞬間、アレンは叫び声とともに、アンウゝイルハンマーに最後の一押しを加える。

そして、脇腹に強烈な衝撃を受けた化け物の体が、くの字に曲がる。さらにその破壊力は収まりを知らず、化け物の体が一瞬浮いたかと思えば……そのまま化け物を、向こうの壁まで吹っ飛ばしてしまった……

「やったか……！？」

それを見せつけられた俺は、興奮気味に、そう声を漏らしていた。

化け物は、体を半分ほど壁にめり込ませて、その動きを止めている。仕留められたかまでは分からないが、間違いなく相応のダメージは与えただろう。

「——手応えがねえ……」

しかし、アレンは呟くように、そう口にした。かなり奇妙な体験をした、そんな感じの表情で……

「どうした……アレン？」

俺はアレンのその表情に不安を感じつつも、聞かずにはいられなかった。

「軽すぎるぜ。あいつの体が軽すぎたせいで、衝撃がうまく伝わらなかった。悪いんだけどよ、たぶん全然ダメージを与えられてねえ……」

アレンは振り切ったハンマーを構え直しつつ、苦虫を噛みつぶしたような表情で言う。

まさか……と、俺は半信半疑でその言葉を聞いた。

「ねえ……ちょっと……」

そこでリンスが、それを指差し、信じられないものを見た……といった感じで、呟いた。

「やっぱり効いてなかったか……」

それを見たアレンも続けざまに言う。

リンスの指差した先には、当然ながら、化け物の姿が……

壁にめり込んだ半身を抜き出すと、目がないその顔を、俺達を見据えるように向けてくる。

どこか様子が変わった……。そう思った瞬間、鼓膜を突き破るよ

うな、凄まじい騒音が響き渡った……

俺は……趣味というほどのものでもないが、モンスターを観察するのが好きであったりする。

人物観察という変わった趣味がこの世にはある。その人が何を思い……どう動くのか……というものを考える、哲学的な趣味だ。

俺の場合は、その対象がモンスターになった、というだけである。

そして、そんな俺からハッキリと言えることが二つある。

——まず一つ目

こいつは……キレるとヤバイ……

「きゃあ……っ！？ 何よ、こいつ」

「ぐああっ！？ うるせーぞー！」

空気が音で振動するのが、肌でハッキリと感じとれるほど……強烈な音波が、俺達を襲う。

リンスとアレンはたまらず悲鳴を口にし、両耳をそれぞれの手で

覆い隠す。

俺もまた同じように、聴覚を閉じてしまおうと試みるが……どうやら無駄な努力のようだ。

耳がおかしくなりそうである。

そして、やっと……その凄まじい騒音が止んだかと思えば……

「つくづく不気味な奴だな……」

「私もそう思うわ。でも……不気味と言うより、気持ち悪いわよ」

「何なんだよ、こいつは!？」

その化け物の姿に、俺が呟き、リンスが応え、アレンが叫んだ……

化け物の黒光りするグロテスクな外見にも、さすがに見慣れてきてはいた。

しかし、今の化け物の姿は……少し違っている。

黒光りするその甲殻の隙間から、体液のような……オレンジ色を

した謎の液体が流れ出ているのだ……

化け物は吐息を荒くし、その根本まで奇妙な液体に染まった鎌を、左右に振りつつ、近付いて来る。

「キレイがったか……」

アレンが、騒音を響かせた直後に豹変した化け物を見て言う。

「怖いのか？」

リンスが、アレンを挑発するように言った。

「まさか……。むしろ、とっとと潰してしまいたい気分だぜ」

アレンはアッサリとそれを受け流し、少し引きつった笑みを浮かべる。

それを聞いて、いや……聞くまでもなく、俺は天下無双刀を構えた。

「それなら早く片付けてしまおう……。さすがに、こいつの存在にも飽きてきたところだ。不気味さしかないなら、もはや興味も沸か

ない」

俺はそう言っつて、さらに続ける……

「一つ、思ったことがあるんだがな。たぶん……この化け物は、斬撃に弱くて、他のには強い。そんな変わった特徴を持っている」

それが俺の、二つ目に気がついたことであつた……

《続く》

18話：豹変する混沌（前書き）

オリジナルモンスターは、俺の手には余る代物であったか（・・・；）

なけるぜ……

盲目の森に入ってから、内容が薄いわりには、無駄に長いような気がします（汗）

それでも頑張って書きますが……

テンション低いですが、執筆意欲はちゃんとありますのでご安心を（笑）

18話：豹変する混沌

化け物が石畳の床を蹴り、翼を広げ、天井の高さまで跳び上がった。

今までのゆったりとした化け物の動きからは想像もできない俊敏さと、軽やかさ……

「やっと本性をあらわしたか!!」

爪を剥き出しにして、俺達の頭上から落下するように、飛び掛かってくる化け物……

俺は、その軌道から明らかに自分が、化け物に狙いを定められていることを感じ取り、叫ぶと同時に、その場から飛びのくようにして離れる。

その判断を下した直後、化け物は寸分の狂いなく、俺が立っていた場所に、その鋭い爪を突き立てていた……

よく見れば、その爪にも、例のオレンジ色の液体が滲み出ている。

それを俺が認めたのと同じ、俺の視界にアレンが割って入ってきた……

着地の反動で化け物の動きが止まった……その瞬間を、アレンは狙っていたのだ。

「もう一回、ぶっ飛ばしてやるよ!」

アレンは走りながら、体の真横でアンヴィルハンマーを構え、自分が最も力を込めやすい体勢を作っている。

そして、そのまま……アレンは、込めた力を解き放つ。

振り上げるようにスイングされたハンマーは、速さ、破壊力ともに申し分ない一撃だ……

しかし、それは空を切る。

「なっ……!」

目を見開き、驚くアレン。

タイミング的には、確実に化け物を捉えていた一撃は空を切り、あるべき化け物の姿はアレンの視界から消えた。

「アレン、上だ!!」

しかし、すぐ横からその動きを見ていた俺には、何が起こったか分かる。

化け物は再び真上に跳躍して、アレンの一撃をかわしたのだ。

着地の反動など感じさせぬ、異常なスピードで……

「ふざけんなよ……!!」

俺の咄嗟の叫びを聞いたアレンは、その事実を確認するよりも早く、手にしたアンヴィルハンマーを投げ捨ててでも、その場所から逃げようとする。

だが、ハンマーを振り切った体勢からでは、直上に跳び上がった化け物の方が明らかに速い……

「アレン……!!」

俺は悲鳴のような叫び声を上げる。

化け物は、アレン目掛けて真っ逆さまに落下しながら、爪を振り下ろした。

直撃は免れない……と、俺は思った。

しかし、今は彼女がいる。

リンスは、アレンの攻撃が外れ、化け物が跳び上がった……その瞬間に、すでに矢を射っていたのだ。

その矢は、器用に、落下途中の化け物の爪の生え際に突き刺さる。

さすがのリンスも、あの黒光りする甲殻には、自らの矢は通じないと諦めたのか……甲殻のない箇所を狙ったようだ。

化け物は、無駄に響く鳴き声を、矢が直撃した瞬間に漏らし、その爪が生えた前脚をひっこめようとするが、空中……それも、落下途中であつたために、大きく体勢を崩し、そのまま直下に広がる石畳に叩きつけられる。

「ぐあっ!!」

それと同時に、潰されたカエルのような、アレンの声が響く。

リンスの狙撃のおかげで、爪の餌食になることだけは避けられたらしい……

それにしても、ここまでの精度を誇るリンスの腕には驚かされた。前に何度か、リンスの弓の技術を目にすることはあったが、今回のとはびつきりである。

「無事かしら？」

リンスが、床に叩きつけられ、もがいている化け物の下から這い出す……アレンの姿を見て、言う。

「全然、無事じゃねえよ！！　だけど……助かったぜ！！」

化け物の下から這い出したアレンではあったが、今のはそれなりにダメージを受けたらしい。

元気そうな言葉とは裏腹に、どこか辛そうだ。

「アレン、下がっていてくれ……。後は俺がやってみせる！！」

そう言って、俺は前に一步を踏み出す。

やはり、斬撃が有効な攻撃手段である以上、俺がやらねばなるま

い。

「わるいな。なんだか、体が痺れてやがる……ここはお言葉に甘えさせてもらっぜ……」

そう言い、アレンは後ろへと後退する。

そのアレンの体には、あのオレンジ色の体液が付着している……

下敷きになった時に付いたのだろう。

（なるほど。あのオレンジ色の液体は麻痺毒というわけか……）

俺は、アレンの姿と言葉から、一つの推論を導き出し、それを警戒しながら、体勢を立て直した化け物の前に……歩み出た……

化け物は身を震わせ、落下時に体に付着した、砕けた石畳の破片を取り払う。

そして、前方……身構える俺の方に向き直ると、躊躇なく飛び掛
かって来た。

跳びはねるかのように石畳を蹴り、爪と牙……そして、巨大な鎌で俺を引き裂かんと、その勢いを増していく。

目の前まで化け物が迫った……その瞬間、俺は、化け物が爪を振り上げた一瞬の隙に、真横に転がって、飛び掛かってきた化け物を避ける。

回避行動の後、俺の目に写ったのは、化け物の横腹と、その斜め上の方から降り下ろされくる刃……

（二段構えか！？）

振り下ろされる大鎌は、俺が攻撃を避けた後の隙を、的確に狙ってきている。

俺はどうにかしてそれを避けようと、上半身を後ろへとだけ反らせた。

そして、金属がへしゃげる音と、軽い衝撃が俺の体へと伝わる。

大鎌が振り切られた後、俺の胸部を守るリオソウルのプレートに、亀裂のような傷が出来上がっていた。

（掠めただけか！？）

一瞬、自分の体が両断されたかのような錯覚を味わったが、俺の

胴体はしっかりと繋がっている。

それに安堵する暇などなく、俺はすぐさま反撃の一太刀を振るった。

豪快に、上段からの大振りを、目の前の横腹に叩き込む。

その横腹にも、例の黒光りする甲殻が纏わり付いているが、関係ない。

弱点は分かっているのだ……

「真つ二つにしてやるよ!!」

天下無双刀の刀身が、黒光りする甲殻を、紙のように引き裂いていく。

オレンジ色の体液と、緑色をした血液が混ざり合った、気持ちわるい液体が飛び散る。

だが、そこで……天下無双刀の刃が深くその体に入り込む前に、化け物は大きく身を引き、致命傷を受けるのを回避した。

（素早いな……。致命傷を与えるのは困難か。だが、一撃入ればその逃げ足も止まるだろ!!）

俺は、太刀を振るった勢いをそのまま利用し、化け物を追い撃つように前へと突っ込んだ。

このまま一気に距離を詰め、確実に一太刀を化け物に浴びせてみせる。

俺は、化け物に再び肉薄……しようとするが、己の不利を悟ったのか、化け物はまたもや距離を空けようと、跳躍の姿勢をとる。

「リオウ！！ 頭を下げて……！！」

その時、後方からリンスの叫び声……

俺はその言葉に従い、自らのスピードにブレーキをかけつつ、体勢を低く落とす。

すると、身を屈めた瞬間に、頭のすぐ上を、風が通り抜けた……

髪の毛の一本が、その風にさらわれたかと思い、俺はその風が吹き抜けた先を見据える。

そこには傷ついた横腹を晒しながらも、跳躍の姿勢を保つ化け物の姿。

そして、横腹の傷口……俺が引き裂いた黒光りする甲殻の割れ目に、一本の矢が突き刺さっていた。

その矢は根本まで深々と突き刺さっており、化け物の動きを硬直させるには十分なものだっただ。

「リンス……さすがだー!!」

俺は、素晴らしい援護をしてくれたリンスに感謝しつつ、怯んだ化け物へと一気に肉薄する。

「今度は逃がさないぜ……」

化け物の機敏な動きの基点となる、発達した前脚……

そこに狙いを定め、俺は天下無双刀を横一閃に振るう。

俺の手には軽すぎる手応え……しかし、刃は確実に化け物の左前脚を叩き切っていた。

今度の一撃は浅いものではない。

天下無双刀は、その切れ味を存分に発揮し、化け物の左前脚を切断した。

両の耳を貫く痛みは……化け物が上げた、悲鳴のような咆哮のせいだ。

化け物は緑の血を噴出させ、崩れるように倒れながらも、柔軟な尻尾を動かし、密着する俺を襲う。

凄まじい化け物の叫びに、体が硬直していた俺は、振るわれた尻尾を避けることはできず、右肩の辺りに直撃を受けてしまった……

当然、弾き飛ばされるだけに止まらず、尻尾から生えた鎌が、肩当ての上からでも俺の身をえぐる。

「ぐう……っ」

幸い、苦し紛れに振るわれただけのその攻撃では、たいした傷を負わされることもなかった。

痺れるような痛みには、俺は歯を食いしばって絶える。

しかし、すぐに異常は起こった。

（右肩が……動かない！？）

正確には右腕そのものの感覚が、全くないのだ。

原因は分かる……

（麻痺毒か！？）

どうやらここが正念場のようだ……

化け物は前脚の一本を失い、満足に動くことすらできないが、未だその戦意は衰えておらず、鎌が付いた尻尾を左右に振って、こちらを威嚇している。

その内に秘めたる凶暴性は、隠すことなく、完全にさらけ出されていた。

俺は左手だけで天下無双刀を握り、化け物と睨み合うようにして向き合う。

右腕はだらりと垂れ下がり、全く動かすことができない。

「次で最後だな……」

徐々に出血の勢いは弱まってきてはいるが、大量の血液を失った化け物。

そして、利き腕である右腕の自由を失った俺。

お互いに手痛いダメージを負い、戦いは決着へと進む……

化け物は自慢の素早い動きを見せようとはせず、ただ迫り来る敵に対して待ち構えている。

ならば俺は正面からそれに応えよう……

リンスが化け物を狙い矢を引き絞るが、俺は天下無双刀を握る左手でそれを制する。

「ちょっと……リオウ。あなた、まさか切り掛かるつもり！？ 奴はもう動けないんだから、そんな無理する必要ないわよ！！」

「悪いな、リンス。どうやら俺は、自分で思ってた以上に本能的らしい」

巨大な力と対峙する、この緊迫感漂う空気が……俺の中の何かを刺激しているらしい。

左前脚を失いながらも、立ちはだかり続ける化け物の姿を見て、俺は自らの手で終止符を打ちたくなったのだ。

左手しか使えない状態であっても、化け物が反撃の余力を残していようと、俺の中で支配力を強める熱い感情は、俺の体を突き動かす。

俺はリンスの制止を振り切り、最後の攻防を演じるべく、正面で待ち構える化け物に突っ込んだ……

18話：豹変する混沌（後書き）

次の話で、カオス戦……そして、長かった密林も終わりです（笑）

ちなみに、カオス戦がしょぼいのは、オリジナルモンスターゆえ、その描写の方に文量をとられたからです（汗）

反省……（・・・）

19話：霧の向こう側へ（前書き）

オリジナルモンスターを書いてみて、その難しさを思い知りました
……

ひよつとすれば、オリジナルモンスターは二度と書かないかもしれ
ません（笑）

さすがにまいった（爆）

19話：霧の向こう側へ

伸縮自在の尻尾が伸び、先端の刃が空気を裂きつつ、唸りをあげて襲い掛かってくる。

しかし、俺はまだ間合いの外側、当たることはない。

それでも化け物は鎌を振り回し続け、その刃の軌跡で、近寄りがない壁を形成する。

奴の間合いに一步でも入れば、その途端にその猛威に曝されるだろう。

だが、こちらにも退くつもりはない。

俺は止まることなく、奴の間合いへと踏み込んでいった。

その瞬間より、竜巻の中心に立たされたかのごとく凄まじい速度で、無数の斬撃が迫りくる。

そして刃が……俺の頬を掠め、リオソウルの鎧のあちらこちらに傷跡を作っていく。

（くっ、紙一重か!?!）

全ては僅かな差だった……少し反応が遅れただけで、たちまち四肢を奪われ、首から上を失いかねない。

その極限状態の中、首を狙って振るわれる刃をしゃがみ込むようにして避け、四肢を引き裂こうとする刃を体を捻って避ける。

そうしながらも、一步一步……確実に、間合いを詰めていく。

天下無双刀の切っ先を、奴の頭に突き刺せる距離まで……

（体の自由が！？）

しかし、頬の真新しい傷から、新たに麻痺毒が体内に侵入してくる。

まず、視界の右半分が消えた。

すぐに体が重くなって、次第に化け物の攻撃を避けられなくなってくる。

そして、俺は右半分の闇から迫りくる死神の鎌に、反応できなかつた……

だが同時に、俺は左手に持つ天下無双刀を逆手で握り、今まさに、

化け物の頭にその刃を突き立てるべく……それを振り下ろさんとしていた……

脚が震え、心臓の鼓動が高まる。

息を止め、肺から放出されようとする空気を押し止めるのと同様、俺は全体重を左手に乗せ、振り下ろした。

「うああっ!!」

短く、押し止めた吐息をまとめて放出するような、自らの声。

張り詰めていた力が一瞬にして抜ける。

堅いものを貫く音はしたが、俺の左手にその感触はなかった。

あつたのは脱力感だけ……

そして俺は、残された左半分の視界で、天下無双刀の根本から切っ先までを見つめる。

天下無双刀は、根本まで緑色の血に染まっており、その切っ先は、化け物の頭部を覆う甲殻を突き破って、その内側に埋没していた。

（終わった……か……？）

天下無双刀が化け物の頭部を破壊したのを見て、俺はその視線を一度、隠れてしまった右方向へと向ける。

するとそこには、俺の首筋に触れるようにして静止する、大鎌があった。

もう少しで俺の首を掻き切る……というところで止まっているその鎌は、痙攣するかのように震え、オレンジ色の液体を滴らせている。

そして今、ゆっくりと、鎌は力無く石畳の上に落ちた……

それを見て、俺は念のために一度、化け物の頭に突き刺さる天下無双刀を、完全に貫通させてから引き抜く。

「……」

俺は、やっと終わったか……とため息を漏らそうとしたが、その声を発することができなかった。

自分の口元に左手をやると、くちびるが小刻みに震えているのが分かる。

どうやら麻痺毒の影響化にあるらしい。

（少し休んで、毒が抜けるのを待たないといけないか……）

俺は、不気味な敵を排除できたことに対して安堵しつつも、時間をロスすることに対する焦りを覚えた。

俺は感覚のおかしい脚を引きずるようにして、謎のレリーフの描かれた側壁まで歩き、寄り掛かるようにして座り込んだ。

「ちょっと、大丈夫なの？」

そんな俺を心配して、リンスが近寄って来た。

俺はまだ喋ることができなかったので、手でリンスを制し、大丈夫だとジェスチャーする。

「即効性はあるみたいだけど、そこまで強力な毒ってわけじゃないぜ」

と、言葉を発したのはアレンだ。

右半分の闇の中に立っていたので、気づくのが遅れた。

アレンはすでに自由に動けるらしく、今の発言もそれが根拠だろう。

「どうやらそうらしいな……」

俺も今納得した。

もうほとんどの毒気が抜けてしまったのか、すでに喋れるところまで回復できたのだから。

闇に閉ざされていた右半分の視界も正常通り、光を取り戻し、最も麻痺毒の影響を受けていた右腕も、顔の目の前くらいまでなら上げることが可能だ。

「よし、早くここを抜けてしまおう」

俺は自由を取り戻し始めたその右手で、天下無双刀に付着した血と体液を拭き取ると、そう二人に告げた。

「何言ってるのよ!? あなた、まだ脚が震えてるじゃない」

それに対し、リンスは少し過剰なくらいの反応を見せる。

「これくらいなら問題ない」

俺はそう言っただけで立ち上がり、その場で簡単にステップを踏んでみた。

たしかに脚は小刻みに震えている気がするが、動作には全く問題はない。

「そう慌てるな。少し休んでいくことも大切だろ？」

早く俺の姿を見て、アレも休息を促してくる。

「……分かった。けど、この遺跡を抜けてからにしよう。こんな化け物の死骸の横で、休む気にはなれない」

さすがに二人から静止を促されては退くしかない。

俺は化け物の死骸を見て、そう言った。

その後、俺の提案は受け入れられ、遺跡の出口を目指すことになった。

俺は大丈夫だ、と言ったのだが、リンスの勧め^{すす}もあって、アレンに肩を貸りることにした。

「それにしても奇妙な場所だよな」

俺を補助するアレンが、遺跡の構造を見渡し、そう呟く。

それに釣られ、俺もついアレンの視線の先を見つめてしまう。

（あの絵は、人間……か？）

その視線に留まったのは、人間のような形をした何か……

死人のように痩せ細り、生気を感じさせない。

絵だというのにゾクリとした。

「気持ち悪いわ」

同じ絵を見たのか、リンスが一言呟く。

たしかに見ていて興味が沸くものでもなければ、むしろ敬遠したいくらいだ。

しかし、俺の目はそれから離れず、そのレリーフの先を探していた。

何とも形容しがたい不思議な感情が渦巻くなか、次に俺が見つけたのは他のレリーフよりも一際大きく描かれたものだった。

そこに描かれているのは……

（柱？ いや、塔か？）

その塔と思わしきレリーフに吸い込まれるかのごとく、長い列をなすようにして、先ほどの人型のレリーフが描かれている。

「何だこれは……」

その奇怪さに、つい言葉が出てしまう。

「リオウ、やめておいた方がいいわよ。趣味が悪いうえに、何だか呪われそうな気がするわ」

リンスが阿呆らしいと言わんばかりに、俺の行動に歯止めをかける。

自分でも、こんなものを見たいとは思わないのだが……

「ああ」

俺はそれだけ言って、ようやくレリーフの群れから目を離す気になれた。

リンスの言葉によって、ではない。

最後に見たものが……そうさせたのだ。

巨大な塔のレリーフと連なるようにして描かれていた、翼を広げた巨大な龍のレリーフ……そして、塔を抜け出た先、生気に満ちた人間のレリーフが……

「出口だな」

その後しばらく歩き、遺跡の構造がかなりシンプルになってきた

時、アレンが光を目にして言った。

「長い遺跡探索もやっと終わりね」

続けてリンスも軽く背伸びをして、だるそうな声を出す。

俺はアレンに肩を貸りるのをやめ、近くにあった焚火の後に近付いた。

「先行する奴らの野営後か……」

呟き、俺は再び焦りを覚える。

なぜなら、それ以外にもいくつか焚火の後が見受けられるからだ。ひよっとすれば、俺達はかなり遅れているのかもしれない。

実際に、密林で時間を喰われすぎてるという気もしなくはないのだ。

「おつ、ありがてえ!!」

そんなことは全く気にしていないのか、アレンは野営の後を見て、

にこやかな笑顔を見せる。

「あら？　なかなか紳士的な参加者もいたものね……」

そう言ってリンスが拾い上げたのは、一本の木の枝。

リンスの足元には、それらが一束に纏めたもの置かれている。

それらの木々は、多少湿気を含んではいるが、焚火をするには十分なものだ。

「この湿気……雨の中、ありがたいな」

リンスが紳士的と言ったのも、そういった事情を含めてのことだろう。

おそらく、先行したグループのいずれかが、余った木々を、後続のグループのために残しておいてくれたのだろう。

「俺なら、たぶん隠すか……全部燃やしちゃってるかな」

アレンが笑いながら言い、すぐさま火を起こす準備を始める。

「俺は残すけどな」

そんなアレンを見て、言う。

「私もたぶん残すわね」

それに続くようにリンスも言った。

「ちよっ……ひでえな、おまえら!!」

軽い冗談に、アレンは少し顔を赤くしつつも、相変わらずの笑みを浮かべ、火種を起こす。

「うん……？ 何だ、これ？」

そして、火を大きくしようと、細い木の枝を拾ったアレンが、それとは別の何かを拾い上げた。

獅子の装飾が施された、輝かしい金のペンダントを……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0193d/>

Monster Hunter - 龍骨の狩猟王 -

2010年10月14日14時12分発行